

相見香雨没後五〇年記念  
シンポジウム関連展示  
実施報告書

Aimi Kōu 1874–1970, A Retrospective Exhibition and Symposium

桑原羊次郎・相見香雨研究会編

2021年3月

# 相見香雨没後五〇年記念シンポジウム関連展示 実施報告書

Aimi Kōu 1874–1970, A Retrospective Exhibition and Symposium

## 【シンポジウム】

日 時：2020年12月6日（日） 13時30分～16時30分

会 場：島根大学大学ホール（松江市西川津町、オンライン開催）

## 【関連展示】

会 期：2020年11月20日（金）～12月20日（日）

会 場：島根大学附属図書館1階展示室（松江市西川津町）

主 催：桑原羊次郎・相見香雨研究会

共 催：島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館

助 成：公益財団法人いづも財団、公益信託しまね文化ファンド

後 援：美術史学会、明治美術学会

## 目次 Contents

---

はじめに	1
事業報告	2
【関連展示】	
相見香雨	5
展示会場記録写真	6
第1章：父・相見文右衛門と祖父・森脇忠兵衛	8
コラム① 幕末の儒者・広瀬旭荘が見た森脇忠兵衛、貫一郎	12
第2章：近代松江における漢詩文化	13
コラム② 相見家過去帳と町絵図に記された「野波屋」	15
第3章：松江藩と豪商たちのコレクション	16
第4章：美術史家・相見香雨の誕生	20
略年譜	23
著作目録	24
出品目録	23
【シンポジウム】	
プログラム	29
パネリスト	30
報告1：村角紀子「19世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生」	31
報告2：要木純一「近代松江における漢詩文化」	38
報告3：玉蟲敏子「日本の近世美術史における相見香雨の業績と現代的意義」	43
質疑応答／ディスカッション	53
参考文献	59

## はじめに

2020年は、松江が生んだ美術史家・相見香雨(繁一、1874-1970)の没後50年にあたります。これを記念し、桑原羊次郎・相見香雨研究会では、島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館の共催のもと、シンポジウムと展示会を開催いたしました。相見は生涯、アカデミズムに属することのなかった独学の人でしたが、美術、とりわけ東洋美術に対する審美眼や基礎知識の形成にあたっては、家系と松江の地域文化が深く関わっていたと考えられます。本事業は、そのルーツをたどる試みです。

桑原羊次郎・相見香雨研究会は、2014年5月、松江市在住(当時)の研究者有志6名で活動をスタートしました。2015～2016年、九州大学文学部所蔵「相見香雨自筆調査録」(全42帙240冊、現在は九州大学中央図書館蔵)を松江に移送して全冊のデジタル撮影を行い、さらにこの調査成果として2016年7月、「松江が生んだ美術史家・相見香雨～九州大学文学部所蔵『自筆調査録』展(島根大学附属図書館1階展示室)を開催しました。これは同資料初の一般公開でした。

続いて2018年5～8月、「記録された日本美術史—相見香雨・田中一松・土居次義の調査ノート」展(主催および会場：実践女子大学香雪記念資料館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館)において、相見香雨のパートの出品選定と解説を担当しました。背景の異なる三者をとりあげたこの展覧会に構想段階から参加させていただき、それぞれの調査ノートを実見する機会を得たことは、相見の研究スタイルを、戦後のアカデミズムにおいて主流となった様式論的研究とは一線を画すものとして再認識する貴重な経験となりました。

以上の成果を踏まえ、今回は相見香雨という在野の美術史家が誕生する基盤となった松江の地域文化に着目しています。シンポジウムでは、『明治の松江と漢詩—明治初期の出雲漢詩壇』(2015年)著者の要木純一先生、さらに、琳派研究史の第一人者で、特に相見香雨の酒井抱一研究にお詳しい玉蟲敏子先生をパネリストとしてお迎えしました。また、関連展示では、江戸時代末期から明治大正期の郷土史資料に重点を置いて紹介しました。

本事業は当初、2020年6月28日の相見香雨五十回忌当日の開催を目指して準備を開始しました。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大という思いもかけない事態を受け、計画は一旦頓挫し、大幅な変更を余儀なくされました。中止を検討する意見もありましたが、最終的には会期を半年間延期し、通常の対面型シンポジウムをオンライン開催に切り替えるなどの感染対策をとることで、何とか同年中の実施にこぎつけた次第です。

この過程で、パネリストの先生方と関係者間でオンラインによるミーティングを重ね、意見交換を繰り返し行ったことは、本研究会にとって、地域からの研究発信のあり方とその意義についてあらためて考え、新たな視点を獲得、またとない機会となりました。

シンポジウムの開催にあたっては、広報関連の実務、松江会場の運営、配信等において、島根大学法文学部山陰研究センターのご協力を得ました。

関連展示の開催にあたっては、島根大学附属図書館にご助力いただき、あわせて九州大学中央図書館、九州大学文学部、京都工芸繊維大学附属図書館、島根県立図書館、島根県立美術館、松江歴史館より所蔵(寄託)資料を借用させていただきました。

また、本事業に対し、公益財団法人いづも財団、公益信託しまね文化ファンドより助成をいただきました。

最後になりますが、コロナ禍で多くの制約がある中、展示会場まで足を運んで下さった皆様、貴重な時間を割いてシンポジウムを視聴いただいた皆様、本事業実現までに様々なご助力を賜りました関係各位に、心より御礼申し上げます。

2021年3月  
桑原羊次郎・相見香雨研究会



# 事業報告

## 1. 概要

### (1) シンポジウム

日時：2020年12月6日(日) 13:30~16:30

会場：(配信主会場) 島根大学大学ホール

形態：Zoomを用いたオンライン会議方式

事前申込制、参加無料

司会：田中則雄(島根大学法文学部教授)

林みちこ(筑波大学芸術系准教授、桑原相見研究会)

報告者：

①村角紀子(桑原相見研究会代表)

「19世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生」

②要木純一(島根大学法文学部教授)

「近代松江における漢詩文化」

③玉蟲敏子(武蔵野美術大学造形学部教授)

「日本の近世美術史における相見香雨の業績と現代的意義」

会場運営：関耕平(島根大学法文学部教授)

加藤絵里子(山陰研究センター)

参加者数：事前登録者 67名

当日参加実数 55名

会場聴講者 11名

### (2) 関連展示

会期：11月20日(金)~12月20日(日)

会場：島根大学附属図書館1階展示室

入場料：無料

構成：

第1章：父・相見文右衛門と祖父・森脇忠兵衛

第2章：近代松江における漢詩文化

第3章：松江藩と豪商たちのコレクション

第4章：美術史家・相見香雨の誕生

出品数：24件 47点

来場者数(31日間)：365名

アンケート回収：17名

## 2. 実施経緯

2019年：

4月26日、桑原相見研究会30回例会(於島根県立美術館、以下同)、事業計画立案

6月28日、桑原相見研究会31回例会、概要決定

9月30日、公益財団法人いづも財団助成決定

10月23日、桑原相見研究会32回例会

11月16・17日、京都工芸繊維大学美術工芸資料館、京都府立京都学・歴史館、資料調査

12月5・6日、九州大学中央図書館、資料調査

2020年：

3月12日、公益信託しまね文化ファンド助成決定

3月18日、桑原相見研究会33回例会

3月23日、山陰研究センター打合せ

4月7日、新型コロナウイルス緊急事態宣言発出

4月30日、事業の計画延期を決定、関係者へ通知

7月1日、関係者 Zoom ミーティング第1回

9月2日、関係者 Zoom ミーティング第2回

9月11日、明治美術学会、後援承認

9月19日、美術史学会、後援承認

10月14日、桑原相見研究会34回例会、広報印刷物配布開始

10月22日、京都工芸繊維大学、借用資料搬入

10月26日、九州大学中央図書館、借用資料搬入

10月27日、島根県立図書館、個人借用資料搬入

10月27日~11月6日、借用資料の二酸化炭素殺虫処理(於島根大学附属図書館)

11月6日、借用資料の写真撮影(同前)

11月9日、松江歴史館、寄託品搬入

11月11日、関係者 Zoom ミーティング第3回

11月19日、展示作業

11月20日~12月20日、関連展示実施

12月3日、シンポジウム会場リハーサル

12月6日、シンポジウム開催

12月21日、展示資料搬出、撤収作業

12月24日、借用資料返却完了

### 3. 広報実績

#### (1) 印刷物

- ・ポスター B2、4色、30部
- ・ポスター（バス用） B3、4色、100部
- ・チラシ A3両面（二つ折り）、4色、1500部

#### (2) 取材、寄稿等

- ・「相見香雨の功績知って 没後50年企画 研究者が計画」『山陰中央新報』2020年11月18日
- ・村角紀子「相見香雨のルーツ 松江の地域文化」『山陰中央新報』2020年11月24日文化欄

#### (3) その他

- ・島根大学学内電子掲示板
- ・松江市バス車内広告（11月22日～12月6日）
- ・ホームページ（島根大学法文学部山陰研究センター、島根大学附属図書館、明治美術学会、美術史学会）

### 4. 会場アンケート集計結果

#### (1) ご記入いただいた方について

##### ・年代は？

10代	0
20代	1
30代	2
40代	3
50代	5
60代	5
70代	1
80代	0

##### ・どちらからいらっしゃいましたか？

松江市内	17
県内	0
県外	0

##### ・あなたは？

島根大学学生	0
島根大学教職員	5
学生	0
一般	12

#### (2) 本日の来館目的（複数回答可）

展示会	14
図書館利用	2
その他	2

#### (3) この展示会を何で知りましたか？（複数回答可）

島大学内の掲示等	3
ポスター、チラシ	8
ホームページ	2
新聞	2
テレビ	0
知人等から	7
その他	1

#### (4) 展示の内容はいかがでしたか？

大変良かった	16
良かった	1
普通	0
あまり良くなかった	0
良くなかった	0

#### (5) 企画展示全体についてのご意見、ご感想

- ・自筆調査録をたくさん見たいと思いました。（50代島大教職員）
- ・松江に住んで4年になりますが、かつて漢詩が盛んだったことなど知りませんでした。（30代島大教職員）
- ・御雛子日記と香雨の関係について初めて知って興味深かった。（70代一般）
- ・相見香雨の全体像とその業績が、父祖、松江の文化環境の中で史料に基づいて明確にされている。（60代一般）
- ・自分も相見という姓なので、先祖は同じかとも思い見学させていただいた。同じ姓でこのような偉業をなした方がおられて非常に誇りに思いました。（50代一般）
- ・松江市民として知られざる偉人の業績、そしてそれを生んだ地域について知ることができ本当に幸せなことだと思う。もっと広く相見香雨という人を知ってほしいと感じました。（30代一般）
- ・相見香雨という方の存在をほんの少しだけ知る機会となりました。学術的には在野という表現になるのですね。アカデミズムの一端か。（60代一般）
- ・興味が尽きませんでした。桑原羊次郎さん以外にも当地にこれ程の方がいらっしゃるとはと率直な一言。日本人

は節目の展示がお好きでよくなりますが、こうした繁  
一さんのケースは有効ですね。ただ専門家ゆえに一般の  
私には分かりかねることも多々。欲張られましたね、限  
られたスペース故。(60代一般)

- ・本来であればもっと注目されたであろう美術の大家を知  
ってもらいよい機会。今後の活動に期待(40代一般)
- ・とても良かった。駐車場の案内があればもっと観てもら  
えるのに…(60代一般)

## 5. 全体報告、成果と課題

本事業は2019年初夏、相見香雨五十回忌にあたる2020  
年6月28日にシンポジウム開催、6月20日～7月20日  
に関連展示会期を設定して計画をスタートした。助成も取  
得し、同年11月には京都、12月には福岡で事前の展示資  
料調査を行った。しかし、広報印刷物のデザイン案まで順  
調に進んだ段階で、全国で新型コロナウイルスの感染が拡  
大、2020年4月7日最初の緊急事態宣言発出という事態  
に直面した。島根県内は感染者数も少なく、状況は比較的  
落ち着いてはいたが、会場となる島根大学構内への構成員  
以外立ち入り禁止措置、さらにその期限延長を受け、4月  
末には事業の一時中断を余儀なくされた。

事業全体もしくは一部の中止、次年度以降への延期を検  
討すべきという意見も内部であったが、コロナ禍の完全な  
収束時期が見通せず、再度同様の助成が取得できるかどう  
かも不確定であることから、計画見直しの上で事業全体を  
半年間延期、同年度内に実施、という決断に至った。主な  
対策と変更点は以下の通りである。

- ① 県外機関所蔵の展示資料搬出入は業者委託とする
- ② シンポジウムはオンライン開催とし、県外在住のパネ  
リスト、司会担当者は自宅や所属先から登壇する
- ③ 関連展示のギャラリートーク等は行わず、別途、紹介  
映像を作成し、シンポジウムでも上映する

延期決定後、パネリストの玉蟲敏子先生の発案により、  
オンラインによる関係者ミーティングをシンポジウム開  
催までに計3回行った。事前の顔合わせに加え、主催者自  
身もWeb会議システムに慣れるのが主な目的だったが、  
この時期に課題の洗い出しと調整を重ねたことが、シンポ  
ジウム当日のスムーズな運営につながったと思われる。ま  
た、このミーティングで報告内容の構想を話し合い、率直  
な意見交換を行うことができた。これは本研究会にとって、  
地域からの研究発信の方法や意義についてあらためて考  
え、新たな視点を獲得、貴重な機会となった。

### (1) シンポジウム

原則オンライン開催とし、申込方法は①インターネット  
専用申込フォーム(Googleフォーム使用)、もしくは②桑  
原相見研究会事務局宛の電子メールとした。10月から受付  
を開始し、最終的に登録者は①64名、②3名の計67名、  
当日参加実数は55名だった。①の登録者の情報取得媒体  
は、チラシが40.6%、美術史学会HPが23.4%、ポスタ  
ーおよび明治美術学会HPが各8.6%、新聞記事が3.1%、  
残りが知人・関係者からの紹介だった(複数回答)。

また、島根大学構内入場の規制緩和を受け、島根・鳥取  
在住者を対象に会場開放も行うこととし、11月中旬から地  
元紙を中心に告知。電話による申込受付を行い、当日は会  
場大型スクリーンで聴講する参加者も11名あった。

当日の東京・つくば・松江会場をつないでの配信は、機  
材や通信上のトラブルもなく、時間配分もほぼ予定通り進  
行することができた。会場聴講者には音声が入声・映像経  
由で二重に聞こえるという課題が残ったが、オンライン開  
催としたことで、従来なら参加を見送ったであろう遠隔地  
(海外を含む)在住の方、特に日本美術史を専門とする研  
究者、学生に多く視聴いただくことができたのは幸いだっ  
た。質疑やディスカッションも充実し、「松江の文化度の高  
さに驚いた」というコメントが多く聞かれた。

### (2) 関連展示

来場者数は会期31日間で365人と、前回2016年の「自  
筆調査録」展(推計300人)と比べ、僅かな増加に留まっ  
た。広報印刷物の配布数は前回より多かったが、従来であ  
れば学外者が増加する土日の来場者数は、ギャラリートー  
クなど普及事業の中止もあり全く伸びなかった。コロナの  
感染拡大と自粛の影響を大きく受けたと考えられる。

アンケート回収数は17枚と低調だったが、設置ペンの  
共用を避ける方もいたと思われ、この状況下にしては意外  
に多くの方に提出いただけたとも感じた(2016年は7枚)。

回答のあった17名は全て松江市内在住だった(ただし  
関西在住研究者からの観覧報告もあり、アンケートを残さ  
ない県外来場者も少数ながらいたと思われる)。回答者は  
島大教職員、一般の方が多く、年代は40～60代が中心だ  
った。展示内容については、「大変良かった」16、「よかつ  
た」1、普通以下0と非常に高い評価であり、記述式の感想  
も概ね好評だった。「駐車場の案内があれば」という意見は、  
今後の広報上の課題として記憶しておきたい。

(文責：村角紀子)

---

## 関連展示

2020年11月20日（金）～12月20日（日）

---

### 相見香雨（明治7年-昭和45年／1874-1970）

明治7年（1874）12月1日、松江の白潟魚町の商家・相見家（野波屋）の長男として生まれる。本名繁一（はんいち）。父は相見文右衛門（淞雨）、母は松尾氏。白潟小学校、私立中学修道館の前身・進取学館を経て、島根県尋常中学校へ進学、ラフカディオ・ハーンに英語を学ぶ。十代で両親とも没し、以後、親戚にあたる岡崎運兵衛方に寄寓。東京専門学校（現・早稲田大学）文学科撰科を卒業後、明治34年（1901）に帰郷し、同年11月3日創刊の『松陽新報』編集者となる。

明治41年（1908）、東京の美術専門出版社・審美書院に入社し、美術書の史料収集と調査にあたる。翌年、『特別保護建造物及国宝帖』編纂事務に従事。明治43年（1910）、日英博覧会出店のため渡英し、1年半滞欧。帰国後、芸海社（後に精芸出版合資会社に合併）で美術書編纂にあたり、後に日本美術協会嘱託となる。昭和20年（1945）7月、空襲を避けて東京から松江に疎開、昭和26年3月まで奥谷町真光寺の離れに住む。

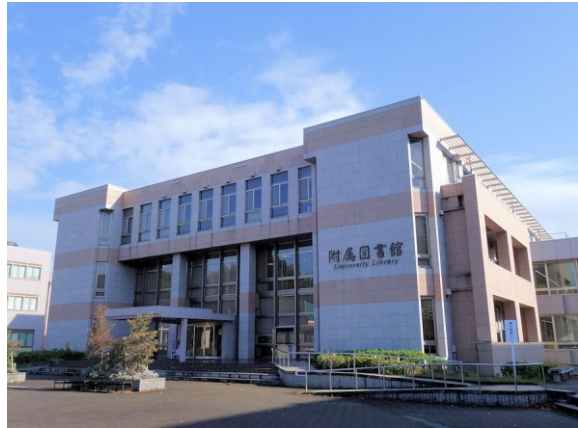
昭和27年（1952）、78歳で文化財保護委員会美術工芸部門専門審議会委員に就任。昭和36年（1961）、紫綬褒章、勲四等旭日小綬章受章。生涯、在野の美術史家として実証的研究を続け、琳派・文人画・絵本画譜を中心に多数の編著書を発表した。昭和45年（1970）6月28日、東京都北区滝野川の自邸「飛鳥山房」で没、96歳。



相見香雨と妻はま 昭和26年（関家提供）



展示資料の殺虫処理 (2020年10月27日～11月6日)



関連展示会場：島根大学附属図書館 (松江市西川津)



図書館正面玄関



図書館1階展示室入口



展示室内、第1章～第2章壁面と展示ケース



第1章展示状況①



第1章展示状況②



第2章展示状況





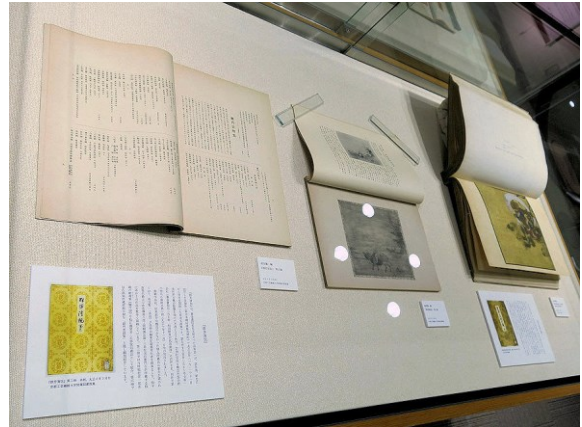
第3章展示状況①



第3章展示状況②



第3章展示状況③



第3章展示状況④



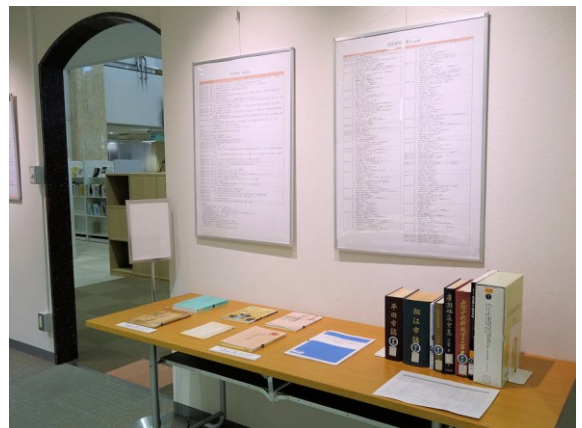
第3章展示状況⑤



第4章展示状況①



第4章展示状況②



年譜・著作目録パネル、参考図書閲覧コーナー

# 第1章

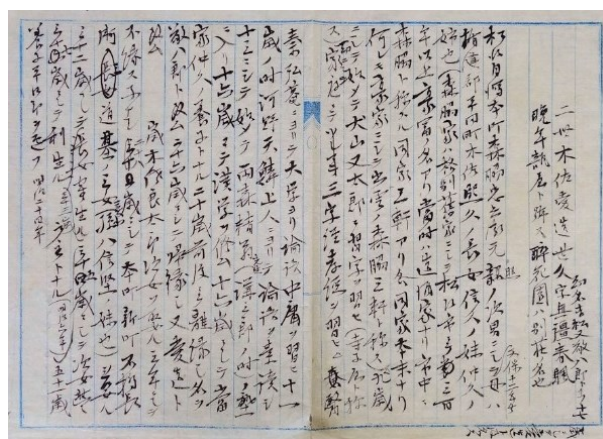
## 父・相見文右衛門と祖父・森脇忠兵衛

相見香雨の祖父は、松江白潟本町の豪商・森脇三家のひとつ古森家の森脇忠兵衛十世元照（号松陵）です。同家は文化～安政年間、大年寄や大目代（松役人の重職）をつとめる家柄でした。松陵は篆刻を得意とし、嘉永7年（1854）に儒学者で漢詩人の広瀬旭窓が山陰を周遊した際には地産の瑪瑙に印刻を求められています。

松陵の妻らくは平田の本木佐家五世新四郎熙久の四女で、同家六世徳三郎信久、大社の藤間家十五代寛左衛門は兄、新木佐家元祖の愛右衛門仲久、宍道の木幡久右衛門十一世梅屋は弟にあたります。松陵には三人の息子がおり、長男は貫一郎、二男は吉松（敬八郎）、三男は庫三郎といいました。二男は安政3年（1856）、叔父にあたる木佐愛右衛門仲久の養子となって新木佐家を継ぎ、二世愛造世久を名乗りました。松江藩領に広く根付いた美術文化愛好の風土は、こうした血縁でつながった豪商・豪農のネットワークと切り離せないものがあります。

父・相見文右衛門（1844-1891）は松陵の三男で、幼名は庫三郎、諱は敏修、字は允叔。文久元年（1861）、18歳で白潟魚町の野波屋（相見知任）へ養子入して「森脇屋庫三郎」から「野波屋庫三郎」となり、後に文右衛門の名跡を継ぎました。淞雨と号し、書画に優れ、松陵と同じく篆刻を最も得意としました。胡鉄梅はじめ清朝詩人が来松した際には世話役をつとめ、印を贈っています。明治24年（1891）5月9日、48歳で病没。菩提寺である寺町の龍覚寺に「相見淞雨碑」が建てられ、没後に編纂された印譜『蘆花浅水処印叢』には「龍手」と称えられています。

相見香雨は後年、「私の父は七細工八貧乏の方で、あとでは結局風流三昧で産を傾けたような男です」と語っていますが、「香雨」という号には、明らかに「淞雨」への敬意と愛着がこめられています。



2. 二世木佐愛造世久経歴控（新木佐家文書 267）  
島根県立図書館蔵

### 森脇家三百年の隆盛

相見文右衛門（淞雨）の次兄・吉松（敬八郎、1841-1899）は、16歳で叔父にあたる新木佐家元祖愛右衛門仲久の養子となり、愛造世久を名乗りました。「新木佐家文書」にある経歴書からは、「森脇三軒」の長期にわたる繁栄や、一族の子弟が受けていた高度な漢学教育の様子がうかがえます。

#### 【「二世木佐愛造世久経歴控」翻刻抜粋】

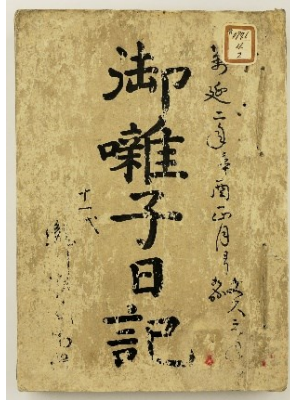
松江白潟本町森脇忠兵衛元韶（照）ノ次男ニシテ天保十二年生 母ハ楯縫郡平田町木佐熙久ノ長女（※） 信久ノ妹 仲久ノ姉也（森脇家ハ格別旧家ニシテ松江市ニテ三百年以上豪富ノ名アリ 当時ハ造酒家ナリ 市中ニ森脇ト称スル同家三軒アリ各同家本末ナリ 何レモ豪家ニシテ出雲ノ森脇三軒ト称ス）、九歳ニシテ始メテ犬山又太郎ニ習字ヲ習ヒ（寺子屋ト称ス）幼ニシテ家庭ニテ三字経孝経ヲ習ヒ、医秦弘庵ニヨリテ大学ヨリ論語中庸ヲ習ヒ十一歳ノ時河野天麟上人ニヨリテ論語ヲ素読十三ニシテ始メテ雨森精翁先生（謙三郎ノ時）ノ塾ニ入り十六歳マテ漢学ヲ修ム十六歳ニシテ当家仲久ノ養子トナル

（※）実際は四女

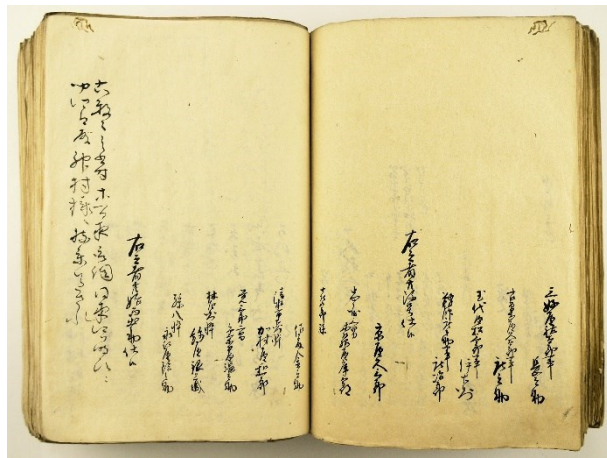




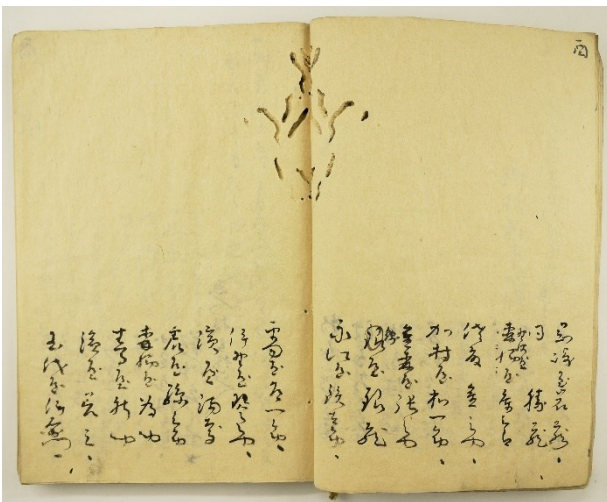
第一冊 表紙



第二冊 表紙



第一冊 安政4年(1857)閏5月21日



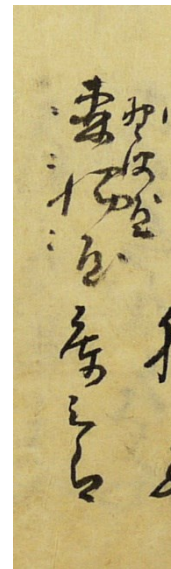
第二冊 文久元年(1861)12月1日

1. 瀧川伝右衛門『御囃子日記』  
 第一冊：天保12年～万延元年(1841-1860)  
 第二冊：万延2年～元治元年(1861-1864)  
 島根県立図書館蔵

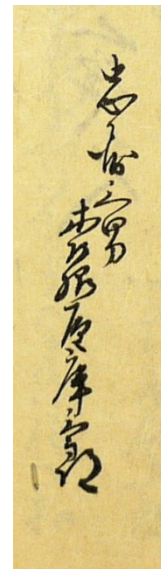
『御囃子日記』に登場する相見香雨の父と祖父

『御囃子日記』は、江戸時代末期、毎年正月五日に松江城三之丸御殿や家老宅で開催される御松囃子などで謡・囃子・舞を披露した「連中」の活動記録です。メンバーは松江城下の有力町人とその子弟で、筆者の瀧川伝右衛門が世話役をつとめていました。演目や演者、稽古の様子、本番後の酒宴メニューなどが分かる興味深い史料です。

この『御囃子日記』に、「連中」の一員として、相見香雨の祖父・森脇忠兵衛と父・庫三郎(相見文右衛門)も登場しています。庫三郎は、はじめ「忠兵衛三男(二男とも)森脇屋庫三郎」として記され、文久元年(1861)12月からこれを訂正して「野波屋庫三郎」と記されています。



(第二冊) 野波屋  
森脇屋 庫三郎

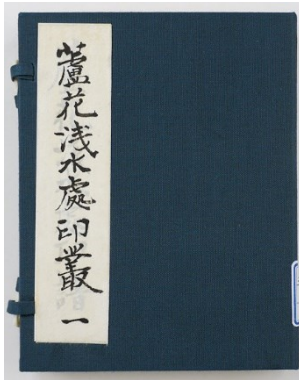


(第一冊) 忠兵衛三男  
森脇屋庫三郎

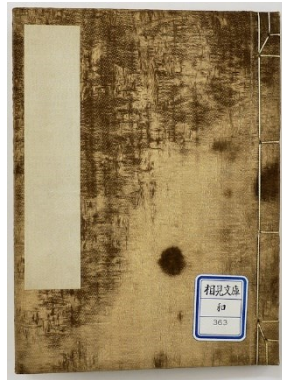
参考文献

- 小林准士 2014『松江城下の町人と能楽』今井印刷  
 小林准士校訂 2016『御囃子日記』野上記念法政大学能楽研究所





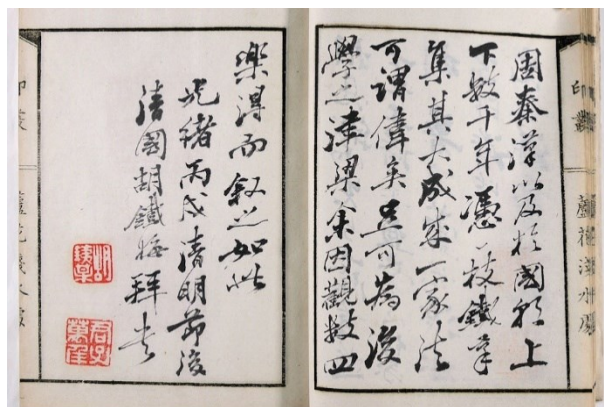
第一冊 帙



第一冊 表紙



第一冊 胡鉄梅「蘆花浅水处之図」



第一冊 胡鉄梅序 光緒 12 年 (明治 19 年/1886)



第一冊 三条実美印「実美之印」「梨堂」

### 『蘆花浅水处印叢』

『蘆花浅水处印叢』は、明治 24 年 (1891) 5 月の相見文右衛門 (淞雨) 没後、友人の中村準一郎 (鶯山) がとりまとめ、同年夏に版行した印譜です。現在、九州大学中央図書館相見文庫に完本一冊 (題箋未記入)、不揃い二冊 (題箋欠) が所蔵されています。

この印譜には、淞雨の師にあたる雨森精翁や、松江を訪れた清朝詩人 (胡鉄梅・葉松石・衛鏗生・章寿彝) による序文、三条実美・伊藤博文・長茨 (三洲) ほかに名士のために彫った印章の印影が掲載されています。序文の年記は明治 12~21 年 (1879~1888) にわたっており、淞雨が刊行に向け、長年準備をしていた様子が読み取れます。

題にある「蘆花浅水处」とは、白濁魚町の宍道湖畔にあった淞雨の居宅と考えられます (15 頁参照)。胡鉄梅が描いた「蘆花浅水处之図」を見ると、その名の通り、蘆の生い茂る中に流水が配される、俗世を離れた風雅な場所であったことが伝わってきます。

印に彫られた文字は名や号ばかりでなく、「半農半仙」「澹如水」「晴耕雨読」「人彫之生研」といった、所有者 (または淞雨自身) の人生観や座右の銘を示す遊印もあります。小さな印影の中に、中国古典の深い教養やユーモアが凝縮されています。

3. 相見文右衛門 (淞雨) 刻  
中村準一郎 (鶯山) 編  
『蘆花浅水处印叢』 明治 24 年 (1891)  
九州大学中央図書館蔵

4. 相見淞雨碑（龍覚寺） 中村準一郎撰 明治24年6月（『松江市誌』昭和16年所収）

※碑は現存せず

○相見淞雨碑（龍覚寺）

君諱敏修字允叔淞雨其號本森陽氏松陵先生第三子也母木佐氏出承相見知任君之後因冒其氏君少學家雖於家庭長有出藍之譽最工晶玉為人酒脫接人不設城府與溍客葉松石胡鐵梅等善皆推賞不措爲序其印譜君名於是益顯當時貴紳聞人爭乞彫唯恐其後會刻三條梨堂公印公賜歌賞之人以榮焉又嗜音律極其蘊奧君春秋罹病彌留纏綿不痊遂以今年五月九日終臨終賦詩曰功名偉績不徒然富貴寒貧共是天四十八年眞似夢空爲寶鴨一條煙享年四十八矣葬松江白濁龍覚寺配松尾氏先卒有一男五女男守時嗣家君之病余一日往訪之君時寢甚見余汝然曰嗟吾死矣知吾者無如子請爲吾誌墓後數日訃音偶至矣抑余受家難於松陵先生先生沒後獨與君相溍聽有得必告有疑必質情知兄弟今何棄余而逝也嗚呼實終照遠之事雖余非其然已受遺囑義寧可辭乎哉因略叙其履歷併及余平生交態

明治二十四年六月

友人 中村 準撰併書

【読み下し文】

君、諱は敏修、字は允叔、淞雨はその号。もと森脇氏松陵先生の第三子也、母は木佐氏の出、相見知任君の後を承け、因りてその氏を冒す。君、少くして篆雕を家庭に学び、長じて出藍の誉あり。晶玉に最も工なり。人となり洒脱にして、人と接するに城府を設けず。清客の葉松石、胡鉄梅らと善し。皆推賞して、その印譜に序を為すを惜しまず。君の名は是に於いて益顕らかなり。当時の貴紳聞人争いて彫を乞い、その人に後るるを恐る。たまたま三条梨堂〔実美〕公の印を刻す。公これを賞して歌を賜る。人以て榮と爲す。また音律を嗜み、その蘊奥を極む。君、客秋病に罹り弥留し纏綿として痊えず、遂に今年五月九日を以て終わる。終に臨み詩を賦して曰く「功名偉績は徒然ならず、富貴寒貧は共に是れ天なり。四十八年真に夢に似る、空しく宝鴨〔優れた香炉〕一条の煙と爲る」と。享年四十八。松江白濁の龍覚寺に葬る。松尾氏を配とす。〔妻は淞雨より〕先に卒す。一男五女あり。男守時〔相見香雨の諱・字カ〕家を嗣ぐ。君〔淞雨〕の病むや、余〔中村準一郎〕一日、之を往訪す。君、時に羸すること甚だし。余を見て泣然として曰く「嗟、吾死なん。吾を知る者に如くは無し。請う、吾が為に墓後に誌せ」。数日にして訃音偶ま至る。抑も余は篆雕を松陵先生に受け、先生没して後は独り君と相溍励し、得ることあれば必ず告げ、疑うことあれば必ず質す。情兄弟の如し。今何ぞ逝きて余を棄つるや。嗚呼、終わりを責り遠きを照らすの事は、余その人に非ずと雖も、然れども已に遺囑の義を受けたれば、寧んぞ辞すべけんや。因りてその履歷を略叙し、併せて余の平生の交態に及ぶ。



相見家の菩提寺 望湖山龍覚寺（曹洞宗、松江市寺町）

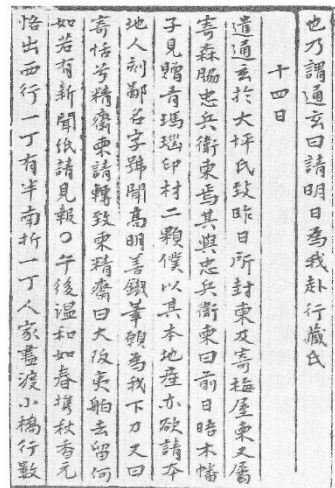
龍覚寺の相見家墓碑（2020年10月撮影）

相見家累代の墓は元々5基あったが、道路整備のため撤去されることとなり、相見香雨が設計して寄せ墓とした。昭和30年（1955）5月建立

## 幕末の儒者・広瀬旭荘が見た森脇忠兵衛、貫一郎

江戸時代末期の嘉永7年（1854）、豊後国日田の儒学者・広瀬旭荘（1807-1863）は、長期にわたって山陰を周遊しました。閏7月に浪華（大坂）を出発、津山から倉吉を通して米子に着き、松江一宍道一平田一今市一大社をめぐる、大田一大森一赤名から三次に出て、同年12月に浪華に帰着、という半年に及ぶ旅でした。この時の旭荘の漢文日記が「日間瑣事備忘録」に残されています。

「日間瑣事備忘録」巻百三によれば、旭荘が従者ととともに徒歩で松江城下に入ったのは9月26日夜のこと。松江滞在にあたっては、旧知の妹尾謙三郎（雨森精齋）の仲介により、松林寺和尚と白濁大目代の森脇忠兵衛が世話役をつとめました。松江を発った後も手紙の往復があり、忠兵衛が篆刻の名手であると聞いた旭荘は、自分用の印を依頼しました。旭荘が書き残した忠兵衛と息子・貫一郎との交流をご紹介します。



「日間瑣事備忘録」  
嘉永7年10月14日  
『廣瀬旭荘全集』日記篇五より転載

月日	滞在地	事項
10月3日	松江	（宿屋の坊島屋文右衛門に泊）晩に森脇忠兵衛がその子貫一郎をつれて訪問、肴料を持参し、貫一郎の名・字・号を選ぶことを依頼。貫一郎は先に帰り、忠兵衛とともに夜通し碁を囲む。
10月4日	松江	頼まれた書、貫一郎につける名・字が出来たので、午前中にこれを持って森脇忠兵衛を訪問。七言絶句一首を贈る。
10月6日	松江	森脇忠兵衛から餞別金百匹と潤筆料若干が贈られる。貫一郎が別れを告げに来て三成勇三郎を紹介。この人物にも名・字・号を選定して贈る。
10月7日	松江→宍道	森脇忠兵衛が別れを言いに来る。船で宍道へ移動。 （忠兵衛が松江で世話した書の潤筆料は計90両、と別の書簡にあり）
10月8日	宍道	（大坪行蔵宅に泊）木幡久右衛門梅屋（忠兵衛の妻らくの弟）の山荘を訪問。
10月9日	宍道	梅屋から地元産の青瑪瑙の印材二顆を贈られる。
10月14日	直江	（宿屋の石田屋信四郎に泊）森脇忠兵衛へ手紙を書き、瑪瑙の印材に名・字・号を彫ることを依頼。「鉄筆の名手と聞いている」
10月29日	塩冶	（秦主殿宅に泊）森脇忠兵衛より手紙の返事が届く。「十四日付の先生の手紙は数日前にやっと届きました。瑪瑙は水晶に比べて大変硬く、二三日かからないとうまく仕上がることができません。」
11月2日	今市→大社	（錦織周泉宅に泊）森脇忠兵衛より瑪瑙印二顆とともに手紙が届く。「瑪瑙は硬くて篆刻が甚だ拙くなり、また、誤って印面を傷つけたこととお詫びします。」

参考文献：多治比都夫ほか編 1983『廣瀬旭荘全集』日記篇五、思文閣出版

卜部忠治・今岡堅一共訳 1999『百四十五年前のわが町わが村—広瀬旭荘の山陰紀行—』出雲市教育委員会



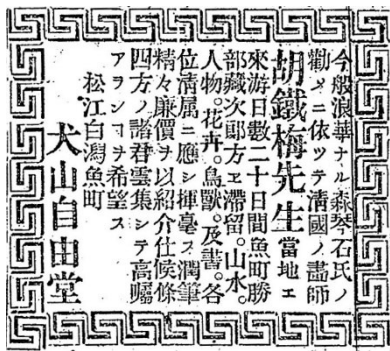
## 第2章

### 近代松江における漢詩文化

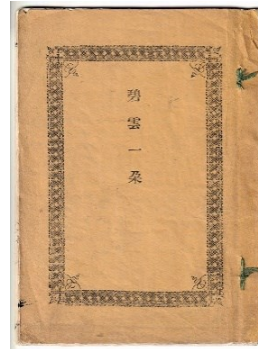
今では意外に思われる方も多かもしれませんが、松江は江戸時代末期から昭和前期にかけて、東京・名古屋と並ぶ漢詩創作の中心地でした。

江戸時代末期から明治前期、松江では永泉寺学僧の河野天鱗(苔洲、1807-1891)、儒学者の内村鱸香(1821-1901)、雨森精翁(精齋・老雨、1822-1882)らが私塾を開いて多くの門人を育て、旧藩士層ばかりでなく、町人階級にも漢学教育を普及させました。これに伴い、漢詩創作も地域の様々な層に広がっていきます。漢詩は、送別や祝賀など様々な席で揮毫され、互いに贈りあわれる名刺のようなものであり、知識人共通の文化の土台として機能しました。明治10~20年代には清の詩人や画家がたびたび松江を訪れており、漢詩を通じた交流が行われました。当時の様子を地元紙『山陰新聞』に見ることができます。

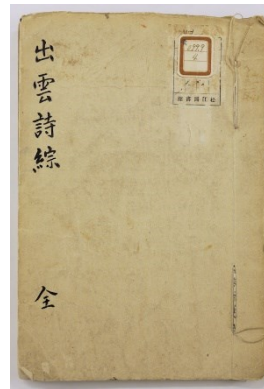
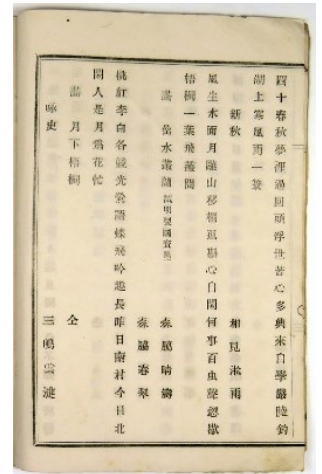
雨森精翁らによる後進の育成によって、漢詩の伝統は村上寿夫(琴屋、1861-1932)や横山大蔵(耐雪・重固、1868-1923)ら新世代へと受け継がれ、明治36年(1903)には全国規模の漢詩結社「剪淞吟社」が結成され、隆盛期を迎えます。山陰漢詩壇の中心人物となった横山は、大正8年(1919)、寛永期から明治期までの出雲地方の200人以上700首にのぼる優れた漢詩を集成し、『出雲詩綜』として出版しました。森脇松陵・相見淞雨の漢詩もこの巻四に収められています。



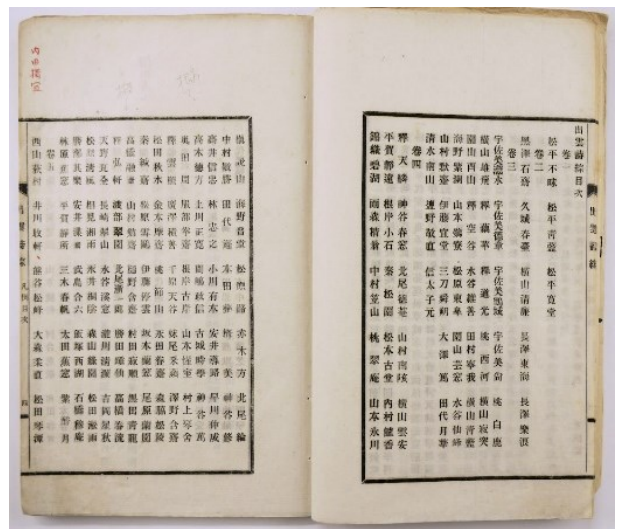
胡鉄梅の来松を予告する新聞広告  
『山陰新聞』明治19年3月23日



5. 湖南信天吟社編  
『碧雲一朶』  
明治12年(1879)  
個人蔵



6. 横山重固(耐雪)編  
『出雲詩綜』  
大正8年(1919)  
島根県立図書館蔵





(坤) 淡成舎遺稿一斑 初版贅襄者  
 岡崎運兵衛、佐藤喜八郎、佐藤梅次郎  
 三島佐次右衛門、森脇甚右衛門



7. 河野天麟  
 『淡成舎遺稿一斑』乾・坤  
 明治 44 年 (1911)  
 個人蔵



雨森精翁の還暦を祝う出雲漢詩壇の人々 明治 15 年 5 月 28 日撮影 (松江・鳴玉楼)  
 前列左より 3 人目に雨森精翁、後列左より 4 人目に相見文右衛門 (淞雨)

8. 雨森薫編  
 『雨森精翁五十年録事』  
 口絵写真  
 昭和 7 年 (1932)  
 個人蔵

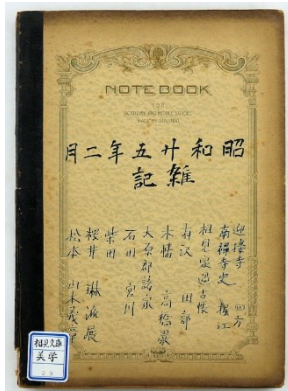
私の亡父淞雨居士は先生の教へを受けた一人で、書物の方は左程でもなかつたらしいが、字は先生の風をよくまねた方であつた。明治十五年五月先生華甲の寿筵〔還暦を祝う宴〕が松江の鳴玉楼で催ほされた時、先生のお宿は亡父の生家森脇忠兵衛の寺町八百屋畑〔久成寺東側附近〕の別荘であつた。その時一日私は亡父につれられて、その二階で始めて先生におめにかゝつた。多分相当の教訓をうかがつたのであらう。さうして名字を撰んでいたゞいたことを記憶してゐる。当時九歳であつた私は、その外先生の容姿のアウトラインだけをぼんやりとおぼえてゐるに過ぎない。

(相見香雨「老雨先生の思出」昭和 6 年 8 月 16 日記、『雨森精翁五十年録事』所収)

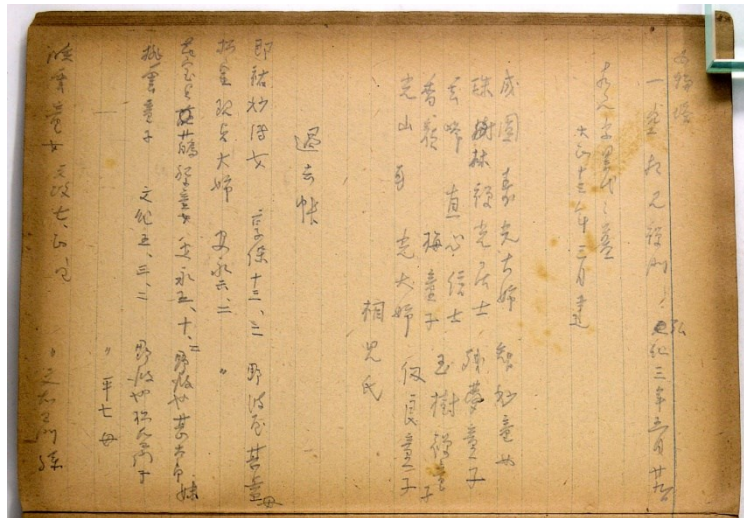


## 相見家過去帳と町絵図に記された「野波屋」

「野波屋文右衛門」の名は、「弘化四丁未九月就御上京両町寸志銀人別」（1847年）、「安政元寅二月於津田町人御目見順序」（1854年）など、江戸時代末期の様々な史料において、白潟魚町の他国間屋、有力町人の一人として登場します。詳しい来歴は分かっていませんが、昭和25年（1950）2月、松江に疎開中だった相見香雨のノート（「相見香雨自筆調査録」29-1、22頁参照）に「相見家過去帳」の写しがあり、同家は少なくとも享保13年（1728）以前より「野波屋甚兵衛」「野波屋甚太郎」等と名乗り、灘町（魚町の南）に住していたことが分かります。



「相見香雨自筆調査録」29-1  
九州大学中央図書館蔵



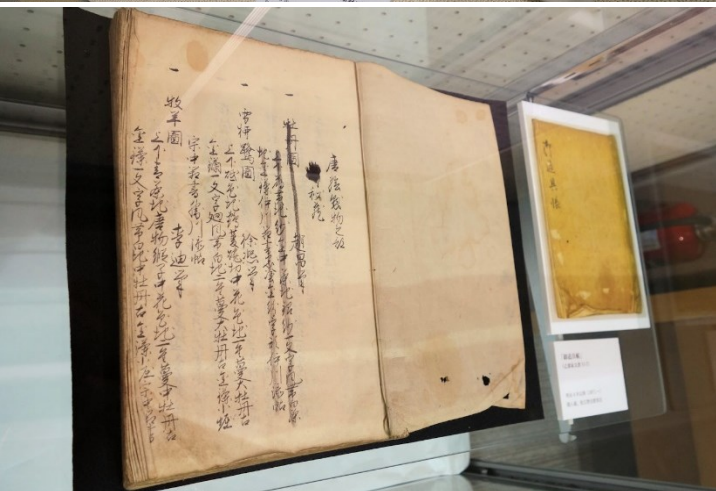
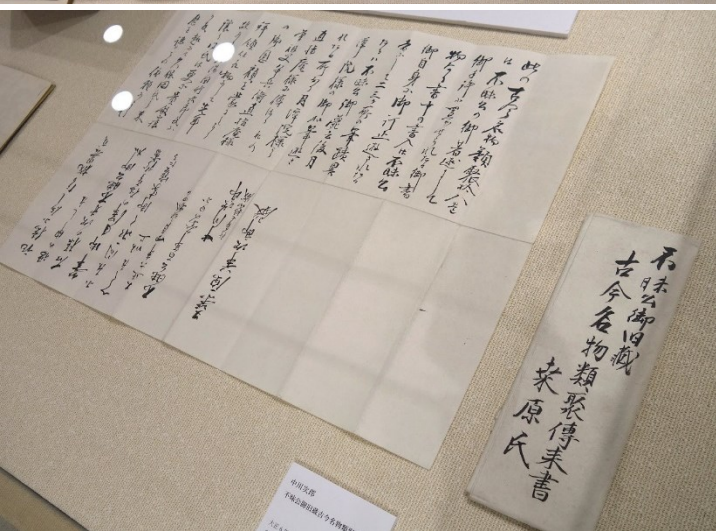
また、松江歴史館蔵「松江白潟町絵図」のうち「白潟魚町図（貼紙）」（天保12年／1841年以降）には、野波屋文右衛門居宅が以下のように記されており、宍道湖岸に面した大きな屋敷と借家を所有していたことが分かります。



平成18～20年度文部科学省科学研究費若手研究(A)「城下町の景観の動態的変容に関する歴史地理学的研究」報告書（研究代表者：船杉力修）より「白潟魚町図（貼紙）」（※上下を反転）

## 第3章

### 松江藩と豪商たちのコレクション



相見香雨は、大学の美術史研究室や研究所などアカデミズムに一度も属することのなかった独学の美術史家でした。美術、とりわけ東洋美術に対する審美眼や基礎知識の形成にあたっては、祖父から父へと続いた文人的教養、さらにはこの地域に近世以来所蔵されてきた多彩な書画骨董コレクションが深く関わっていたと考えられます。松江における〈コレクション〉の系譜をたどってみましょう。

まずは、雲州松平家七代藩主・松平治郷（不昧、1751-1818）が収集した名物茶道具が突出した存在として挙げられます。同家蔵品は、明治4年（1871）の廃藩置県により最後の藩主（藩知事）・松平定安が東京に移った後も、木実方役所跡に置かれた松平家用達所において管理されていました。後に相見香雨が入社することとなる審美書院主幹・田島志一の来松も同家蔵品の撮影が目的であり、正木直彦・高橋葦庵など著名な研究者や数寄者も明治末から大正期にかけて調査に訪れています。

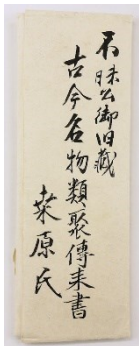
一方、松江藩代々家老六家の一家であった乙部九郎兵衛の中国絵画コレクションも、かつてはこれに劣らず著名でした。現在では国宝・重要文化財に指定される作品も数多く含まれており、乙部家の絵画目録は明治・大正・昭和前期を通じて各地で筆写されました。大正7年（1918）、相見香雨は「総門雲煙集」と題してこれを翻刻し、全国で紹介しています。

こうした地域所在のコレクションは、明治期以降、徐々に散失していきますが、新たな所蔵者のもとで秘蔵された訳ではなく、明治24年（1891）の「第一回新古美術品展覧会」をはじめとする展覧会で公開され、互いに鑑賞されていました。当時の新聞記事や出品目録からは、美術文化愛好の風土を受け継ぎ支えていた地域の人々の豊かさや躍動感が伝わってきます。

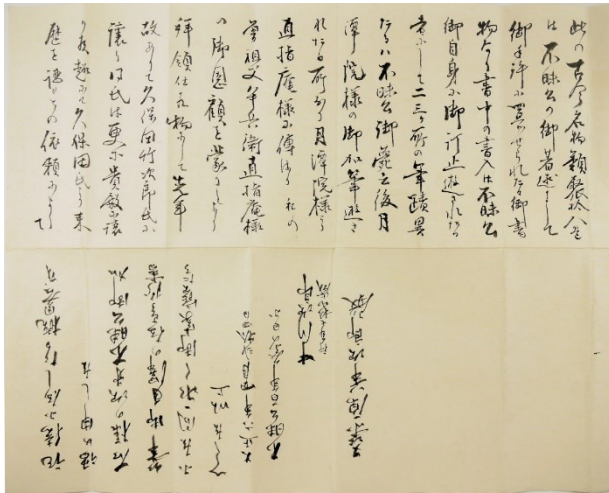




9. 陶斎尚古老人（松平不味）『古今名物類聚』全18冊  
寛政元年～9年（1789-1797） 島根大学附属図書館桑原文庫



10. 中川次郎  
不味公御旧蔵古今名物類聚伝来書  
大正6年（1917）  
島根大学附属図書館桑原文庫



### 松平不味書入『古今名物類聚』と伝来書

『古今名物類聚』は、松江藩七代藩主の松平治郷（不味）が陶斎尚古老人の名で著したとされる名物茶道具の図説集です。天明7年（1787）の序があり、寛政元年（1789）から9年間にわたり全18巻が出版されました。

本資料は、不味が手許に置いて自ら訂正を書き入れたものとされ、旧蔵者の中川次郎による大正6年（1917）4月24日（不味公百回忌）付の伝来書が附属します。これによれば、本書は不味没後、子の八代藩主齊恒（月潭院）が加筆し、九代藩主齊貴（直指庵）に伝えられ、中川次郎の曾祖父・半兵衛が齊貴より拝領。その後、久保田竹次郎を経て、桑原羊次郎が入手しました（2015年、島根大学附属図書館へ桑原文庫第三期分として寄贈）。

『松江藩列士録』によれば、中川次郎は元「若殿様御扈從（小姓）」で、元祖中川半兵衛から八代目。元祖は寛文4年（1664）に江戸で藩祖直政に召し出されたとあります。二代源五右衛門の時に二代藩主綱隆の御扈從となり、代々「御扈從番組筆頭役」を務めました。

久保田竹次郎（1865-1944）は私立松江図書館（島根県立図書館の前身）設立者の一人です。著名な蔵書家で、執達吏（裁判所で強制執行などを行う役人）をつとめていたとされます。

桑原羊次郎（1868-1955）は松江末次の豪商桑屋太助八代で、肉筆浮世絵と刀装具のコレクター、郷土美術研究家として知られています。大正6年5月末に開催された「不味公百年祭記念展覧会」に、『不味公御筆入古今名物類聚（拾八冊）』として本資料を出品しています。

#### 【古今名物類聚伝来書】翻刻

此の古今名物類聚拾八巻は不味公の御著述にして御手許に置かせられたる御書物なり 書中の書人は不味公御自身か御訂正遊されたる者にして二三ヶ所の筆蹟異たるハ不味公御薨去後月潭院様の御加筆遊されたる所なり 月潭院様より直指庵様に伝はり 私の曾祖父半兵衛直指庵様の御恩顧を蒙りしより拝領仕候物にして先年故ありて久保田竹次郎氏に譲り同氏は更に貴殿に譲り候趣にて久保田氏より来歴を認めとの依頼によりて記憶に存したる概略を認め申し候

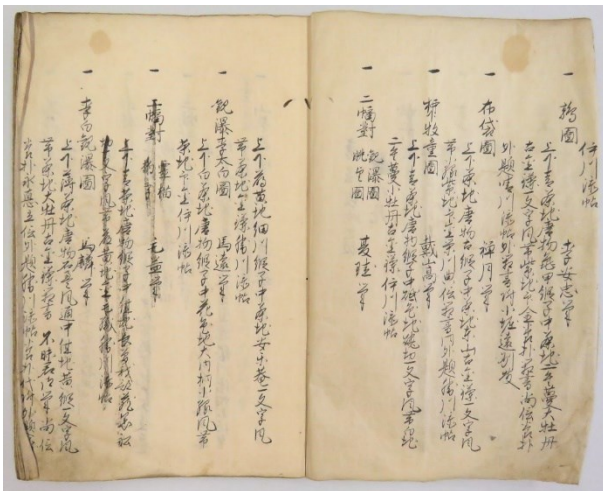
右様の次第不味公御加筆御手沢の存する珍書に候間永く御家宝たるべく候 以上

大正六年四月二拾四日  
不味公百年祭の日に  
中川次郎  
行年七拾貳歳  
桑原羊次郎殿





12. 「御道具帳」(乙部家文書 11-7)  
明治4年以降(1871~)  
個人蔵、松江歴史館寄託



相見香雨が紹介した乙部家の中国絵画コレクション

相見香雨は大正期、『群芳清玩』(全10冊)の編集印刷発行を担当し、ここで松平伯爵家や松江の豪商が所蔵する名画を多数中央で紹介しました。この第6冊で、相見は旧松江藩家老・乙部家所蔵の絵画目録を「総門雲煙集」と題して紹介しました。解題には以下のようにあります。

本書は雲州松江藩々老乙部九郎兵衛翁の蔵画目録なり、翁性古物を嗜み、最も支那画を好みて蔵弄頗る多し、嘗て自ら曰く「茶器は不昧公に及ばざれども、画幅は公家に譲らざるべし」と〔中略〕蔵幅の外装を二重篋映入外覆等にしたる仕様一種の様式を為し、これを乙部仕立と称して斯界に喧伝せらるゝに至る、かゝる大蒐集も一朝散佚して其の多くは今之く所を詳かにせず

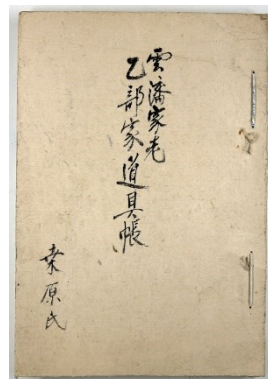
「総門雲煙集」の原典は、乙部家「御道具帳」と考えられます。明治期以降、様々なルートで筆写されており、例えば「雲州乙部家蔵幅目録 完」や「雲藩家老乙部家道具帳」、「雲州乙部家蔵」(東京文化財研究所蔵)など数種類の写本が確認できます。実際の「御道具帳」には様々な品が記載されていますが、写本類ではこのうち「唐絵懸物之部」と「和画懸物之部」の部分が流布しました。

「唐絵懸物之部」に記された中国絵画165点の中には、現在では国宝・重要文化財に指定される、驚くような名品を数多く見出すことができます(括弧内は相見が「総門雲煙集」に記した大正期の所蔵者)。

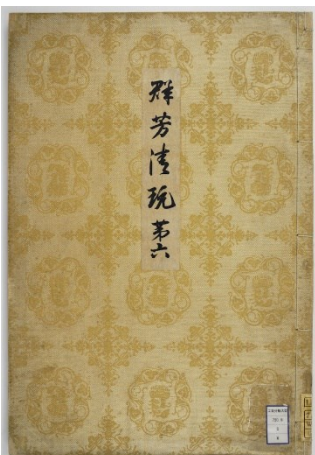
- ・伝趙昌筆《牡丹図》宮内庁三の丸尚蔵館蔵(帝室御物、井上馨献上)
- ・李迪筆《紅白芙蓉図》東京国立博物館蔵(福岡孝弟)
- ・伝毛益筆《萱草遊狗図・蜀葵遊猫図》大和文華館蔵(福岡孝弟)
- ・馬遠筆《洞山渡水図》東京国立博物館蔵(赤星鉄馬)
- ・貫休筆《羅漢図》根津美術館蔵(赤星鉄馬)
- ・直翁筆《六祖挾担図》大東急記念文庫蔵(川崎芳太郎)
- ・戴文進筆《春冬山水図》公益財団法人菊屋家住宅保存会蔵(菊屋剛十郎)



13. 「雲州乙部家蔵幅目録 完」  
明治20年代(1887-1896)



14. 「雲藩家老乙部家道具帳」  
大正10年頃(c.1921)  
ともに島根大学附属図書館桑原文庫



11. 相見繁一編  
『群芳清玩』第六冊  
大正7年(1918)  
京都工芸繊維大学附属図書館

## 松江における明治 24 年「第一回新古美術品展覧会」

明治 24 年 (1891) 5 月 5 日～14 日、松江で大規模な「第一回新古美術品展覧会」が開催されました。白潟本町の豪商・佐藤喜八郎が中心となって発起したものです。佐藤は同年 2 月、県政に関する請願のために上京した際、東京美術学校長で帝国博物館理事の岡倉覚三 (天心) に面会。当時は「宮内省臨時全国宝物取調局」(明治 21 年設置) で日本全国に所在する美術品の調査が進められているところであり、相談の上、宝物取調局委員がこの展覧会の審査員として松江に差し向けられることとなりました。

展覧会場は松江市殿町の勸業展覧場 (島根県物産陳列所の前身) と決まり、3 月より地元紙の『山陰新聞』に告知され、島根県下へ広く所蔵品の出品募集がなされました。新たに制作した「新製品」と、「古物品 (古美術品)」が同時に募集され、出品総数は最終的に 2536 点に上りました。内訳は以下の通りです。

「新製品」計 215 点		「古物品」計 2321 点	
陶器	64 点	掛物	1227 点
漆器	5 点	額面	50 点
瑪瑙細工	44 点	巻物	56 点
木製彫刻物	10 点	手鑑及書画小切	55 点
金物彫刻物	22 点	屏風	27 双 11 隻
印刷	8 点	刀剣	110 点
画並に額	39 点	武器馬具共	14 点
貝細工	7 点	諸器物	279 点
織物敷物	16 点	偶像	45 点
		印	13 点
		小道具類	147 点
		金物	90 点
		陶器	150 点
		玉類	27 点
		縫物類	20 点

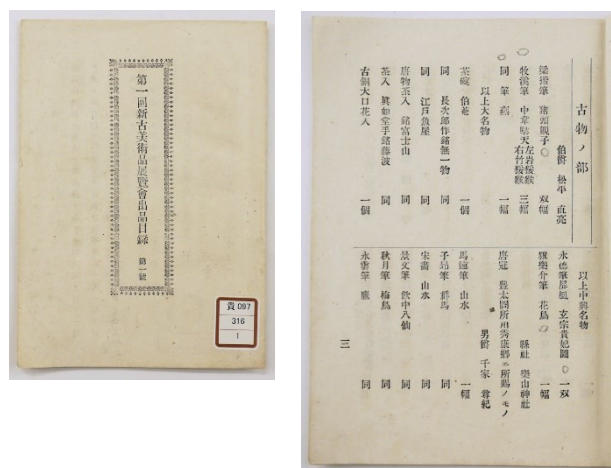
出典：『山陰新聞』明治 24 年 5 月 15 日記事

出品内容や審査状況は『山陰新聞』に随時掲載され、さらに『第一回新古美術品展覧会出品目録』(全 6 冊) が開会前から順次刊行されました。県下の美術品が一堂に集まったため、盗難や火災があっては大変と、24 時間体制で巡査 3 名 (1 時間に 6 回)、消防夫 5 名、委員 3 名、手伝 5 名が

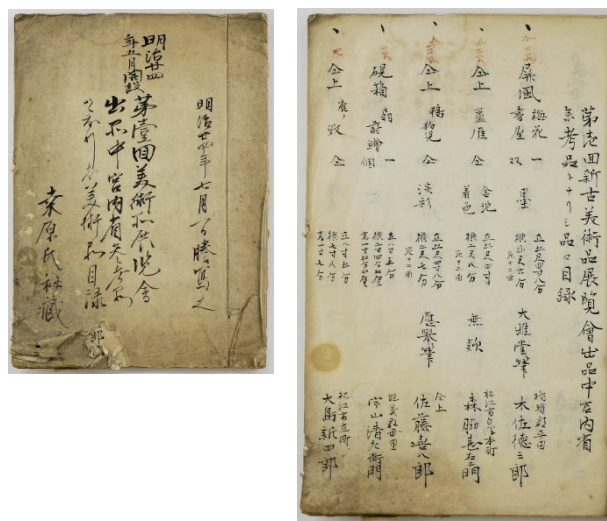
交代で巡回し、龍吐水 (江戸時代以来の消火道具) 5 挺、ポンプ 1 挺が備えられました (『山陰新聞』明治 24 年 5 月 5 日記事)。

今村長賀・山名貫義・古筆了悦の 3 名が宝物取調係員として来松し審査にあたりましたが、結果はすぐには公表されず、帰京後、評議により決定されました。出品者の一人・桑原羊次郎旧蔵の「第壹回美術品展覧会出品中宮内省参考品となりし美術品目録」によれば、この審査で「参考品」と評価された古物品は松平直亮伯爵出品の不昧公名物をはじめ 107 点でした (新製品は農商務省管轄のため除外)。

このように、互いの所蔵品を公開し鑑賞しあう「展覧会」という場が近代の松江にも登場したことは、作品が各家に秘蔵されていた近世までとは全く異なるかたちで、地域の美術愛好の文化や審美眼を底上げする一助となったと考えられます。



15. 布野勝太郎編『第一回新古美術品展覧会出品目録』第一号  
明治 24 年 (1891) 島根県立図書館



16. 「第壹回美術品展覧会出品中宮内省参考品となりし美術品目録」  
明治 24 年 (1891) 島根大学附属図書館桑原文庫



## 第4章

### 美術史家・相見香雨の誕生

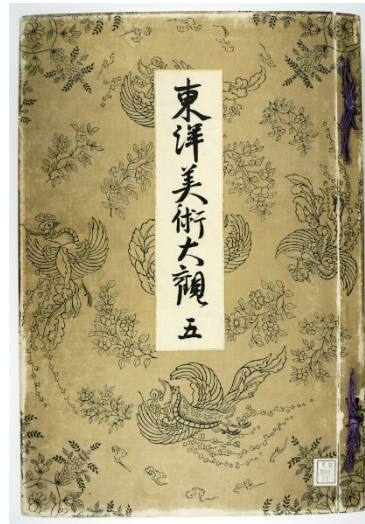
松江で『松陽新報』編集者をしていた相見香雨が美術史家の道を歩むきっかけとなったのは、明治39年(1906)頃、東京の美術専門出版社・審美書院主幹の田島志一が松平伯爵家所蔵の不昧公名物撮影のために来松したことでした。松平家用達所での約一ヶ月に及ぶ調査を手伝った相見は田島と懇意となり、「入社の子約」をします。

明治41年(1908)春、相見は審美書院に入社し、『東洋美術大観』(全15冊)をはじめ同社の代表的美術書の史料収集や作品調査を担当します。明治43年(1910)には日英博覧会出店のため、田島ほか審美書院社員とともに渡英。閉幕後もパリやベルリンで同社出版物の巡回展を行いました。

帰国後、田島は審美書院を退社し、大正元年(1912)に芸海社を設立(後に精芸出版に合併)。相見は両社で『群芳清玩』(全10冊、大正元年～10年)、『浅野侯爵家宝絵譜』(大正6年)、徳川宗家蔵品集『柳営墨宝』(大正11年)などの編集責任者となり、全国の旧大名家や新興財閥、旧家の所蔵作品や典籍類に通じるようになります。様々な雑誌に論考を発表し、単著『池大雅』(大正5年)も上梓。しかし、大正12年(1923)の関東大震災により、出版事業は壊滅的な打撃を受けます。

昭和2年(1927)頃より日本美術協会嘱託となり、『日本美術協会報告』編集に従事。「抱一上人年譜稿」(昭和2年)など綿密な史料調査に基づく実証的研究を数多く発表しました。

戦後も、様式論的研究とは一線を画した地道な調査研究により多くの新知見・新発見をもたらしました。東京国立文化財研究所長・田中一松は弔辞に「日本の美術史における、いわば在野の大立者」と評しています。



17. 大村西崖編  
『東洋美術大観』第五冊  
明治42年(1909)  
九州大学文学部蔵

#### 『東洋美術大観』

『東洋美術大観』は、株式会社審美書院(東京市京橋区新肴町)が明治41年(1908)8月から大正7年(1918)7月にかけて刊行した美術全集で、日本画之部(第一～七冊)、支那画之部(第八～十二冊)、彫刻之部(第十三～十五冊)の全15冊で構成されます。

作品選定は福岡孝弟・九鬼隆一・股野琢・高嶺秀夫・正木直彦・高村光雲・今泉雄作・関野貞・大村西崖・中川忠順・片野四郎・溝口禎次郎・平子尚。美術沿革史と作品解説を東京美術学校教授の大村西崖が担当しました。序文で宮内大臣の田中光顕は本書出版を「国家的事業」と称えています。

作品図版は、コロタイプ印刷による精緻なモノクロ写真を中心とし、カラー図版には伝統技術を応用した多色摺木版が用いられました。本金箔や天然群青なども使用された豪家図版は、それ自体が鑑賞の対象となり、本文とともに国内外で高い評価を受けました。

「相見香雨翁回想録」より

その頃〔『松陽新報』編集者時代〕、東京の審美書院主幹田島志一氏が松平伯爵家の不昧公名物の古書画古器物撮影のために、柴田写真師を同伴して出張して来て、そのお手伝いを頼まれた。そこで松平家宝蔵系の安井〔泉〕執事に紹介して、仕事にとりかかった。まず蔵帳の調査から始る。その蔵帳なるものが数十冊の尠大なもので、その要所を謄写研究するのに十日余りを費したような次第で、一々の現物をそれにとり合せてしらべるとは中々の大仕事で、遂には一ヶ月ばかりにも及んだかと記憶する。かくて私は田島氏とも懇意になり、後年審美書院へ入社を予約をするようになった。〔中略〕

さて、松陽新報を退社するとなると、創刊以来の歴史もあって、親友知人からも相当異見をうけた。僕にして政治家的野心のあるならば、代議士位にはなれる可能性もないわけでもなかったのであるが、それはガラではない。また好むところでもない。断然と決心して東京にあこがれたわけである。

〔明治〕四十一年の春、予約の如く、審美書院へ入社した。その頃書院では「東洋美術大観」が第三冊の鎌倉時代まで出て、そのあとの資料蒐集調査のために、私は京都方面へ出張することになっておった。〔中略〕

その内、四十三年（一九一〇）に倫敦で開催される日英博覧会へ、内務省から「国宝帖」なるものを出品することあり。その編集総裁が岡倉覚三氏、委員は伊東忠太、関根〔マ〕貞、中川忠順、平子鐸嶺の四氏、その事務を福井利吉郎がやった。而してその印刷の請負は国華社と競争して、審美書院がとって、その事務には私が当たった。〔中略〕

さて審美書院では、日英博に於いて大いに PR せん設計のもとに、出張することとなって、まずその第一陣として、田島主幹と私が出かけることとなった。〔中略〕

倫敦では、日英博に於ける審美書院の出品や売店の本業がある上に、政府出品の古美術品部に於いて監督主任の溝口宗文〔禎次郎〕さんからお手伝いをたのまれるのだから中々いそがしい。その頃書院の方は第二陣の渡部・知野根の両君も既に到着して手揃えとなって、博覧会近くのホールランドパークアヴェニューのアパートの三室に僑居して、その後庭でうつした記念写真が即ちここに掲げたようなものである。

（山内長三編「相見香雨翁回想録（その二）」、昭和 42 年 2 月 29 日収録、『古美術』20 号所収）



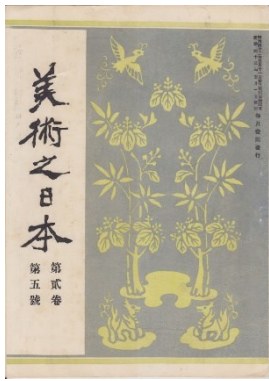
松平家用達所（木実方役所表門跡）昭和 4 年撮影  
『復刻木実方秘伝書』昭和 11 年口絵



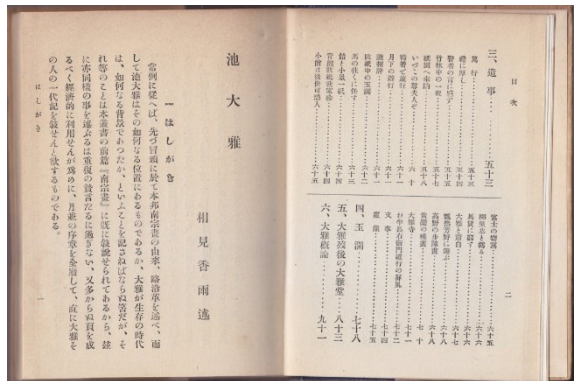
ロンドン滞在中の審美書院一行と傭女たち、明治 43 年（1910）  
左端に相見香雨、右端に田島志一  
山内長三編「相見香雨翁回想録（その二）」『古美術』20 号

「田島審美書院主幹の出版」記事中の「渡欧の相見編輯員」写真  
『美術之日本』2 巻 5 号 明治 43 年（1910）5 月（次頁 18 参照）





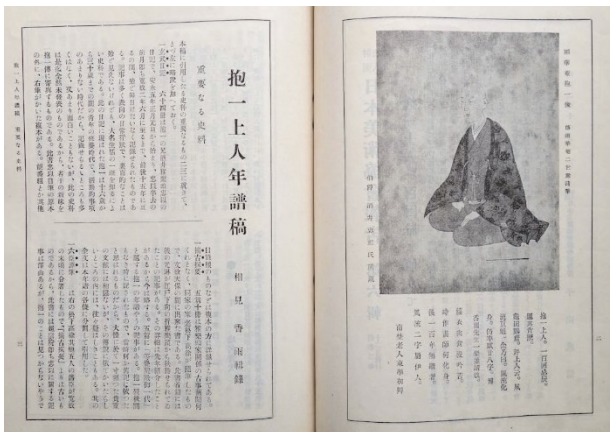
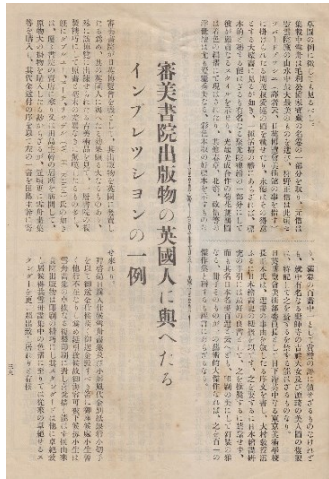
18. 『美術之日本』2巻5号  
明治43年(1910)5月  
個人蔵



20. 相見繁一『美術叢書四 池大雅』  
大正5年(1916)個人蔵



19. 『美術之日本』2巻11号  
明治43年(1910)11月  
個人蔵



21. 相見香雨「抱一上人年譜稿」(『日本美術協会報告』6輯)  
昭和2年(1927)12月 個人蔵

### 「相見香雨自筆調査録」とは

「相見香雨自筆調査録」は、相見香雨が審美書院に入社した30代から美術史界の大家となった90代まで、約60年にわたり書き継いだ42帙240冊(ノート230冊、手帖10冊)にのぼる調査記録です。

第1冊は明治42年(1909)8月2日、奥絵師の狩野四家のひとつ中橋狩野家の調査記録から始まっています。これは『東洋美術大観』日本画之部のうち第五冊(第七篇：徳川時代)編纂前後の資料収集活動と考えられます。相見はこの時35歳。以後、調査録には名家や寺社での作品鑑賞記、入札会の覚書、画家の墓碑や過去帳の調査記録、典籍の抄録などが連綿と綴られていくことになります。そして確認できる最後の年記は昭和42年(1967)7月16日、92歳の時の日記です。まさに美術史家・相見香雨の研究活動の出発から終焉までが手にとるように分かる、第一級の史料と言えるでしょう。

昭和45年(1970)6月28日に相見が96歳で亡くなった後、調査録は東京都北区滝野川の自宅「飛鳥山房」のはま夫人の元に残されました。昭和59年(1984)、相見に私淑した江戸文学研究者の中野三敏氏(1935-2019、当時は九州大学文学部教授)が仲介し、旧蔵書の一部とともに九州大学へ収蔵。旧蔵書は「相見文庫」として登録され附属図書館で公開。調査録は文学部美学美術史研究室の所管となり、菊竹淳一氏が中心となって整理にあたりました。平成30年(2018)9月まで文系合同図書室に非公開で架蔵されており、桑原羊次郎・相見香雨研究会が平成28年7月に行った展覧会(於・島根大学附属図書館1階展示室)での展示が初公開でした。現在はキャンパスの移転に伴い、九州大学中央図書館に収蔵されています。

## 相見香雨 略年譜

和暦	西暦	満年齢	事項
明治 7	1874	0 歳	12 月 1 日、松江の白潟魚町（当時は島根県意宇郡魚町、松江第六区）の商家・相見家（野波屋）に生まれる。本名繁一。父は相見文右衛門（淞雨）、母は松尾氏
明治 21	1888	14 歳	3 月、白潟小学校卒業。この年、進取学館（私立中学修道館の前身）へ進学
明治 23	1890	16 歳	9 月、島根県尋常中学校（松江中学）に進学。同校でラフカディオ・ハーンより英語を習う
明治 24	1891	17 歳	5 月 9 日、父・文右衛門 48 歳で病歿、親戚の岡崎運兵衛宅に寄寓
明治 29	1896	22 歳	7 月、島根県尋常中学校卒業
明治 30	1897	23 歳	9 月、東京専門学校（現・早稲田大学）文学科撰科に入学、上京。坪内逍遙、関根正直、高山樗牛などの講義を受講
明治 33	1900	26 歳	7 月、東京専門学校卒業
明治 34	1901	27 歳	松江に帰り、岡崎運兵衛の創刊した『松陽新報』編集者となる（11 月 3 日創刊）
明治 36	1903	29 歳	この頃、常松クマ（信子と改名）と結婚。のち一男四女をもうける（長男・敏は 27 歳で歿、娘は幸田、西村、松林、関家へ嫁ぐ。四女・関高子は女性運動家、1914-1991）
明治 39	1906	32 歳	この頃、審美書院主幹・田島志一が松平伯爵家コレクション撮影のため来松。調査を手伝い知遇を得、入社を予約する
明治 40	1907	33 歳	12 月、松陽新報社を退社し上京
明治 41	1908	34 歳	春、審美書院に入社（「相見香雨翁回想録」による。明治 42 年初夏入社とする森山時雄説もあり）大村西崖のもとで『東洋美術大観』『南画十大家集』ほか編集業務に従事
明治 42	1909	35 歳	審美書院が内務省宗教局編『特別保護建造物及国宝帖』の印刷受注、編集事務に従事 5 月、同社から月刊美術雑誌『美術之日本』創刊
明治 43	1910	36 歳	4 月 26 日、日英博覧会出店のため田島志一とともに新橋出発、シベリア鉄道経由で渡英 5 月 14 日、ロンドン着。審美書院業務のため一時帰国、8 月に再渡欧 日英博覧会終了後、フランス、ドイツに 1 年半滞在（～大正元年）
明治 45 大正元	1912	38 歳	帰国。関東大震災前まで本郷上富士前町に居住
大正 12	1923	49 歳	9 月 1 日、関東大震災
大正 14	1925	51 歳	妻信子、萎縮腎により 48 歳で歿 この頃、正木直彦の推挙により日本美術協会嘱託となる
昭和 2	1927	53 歳	『日本美術協会報告』編集に従事（～昭和 18 年）
昭和 12	1937	63 歳	はまと再婚
昭和 17	1942	68 歳	長男・敏、27 歳で歿
昭和 20	1945	71 歳	7 月、空襲を避けて松江市に疎開、雑賀町の三島家別荘を経て奥谷町真光寺の離れに住む。住職・吉田行精は『松陽新報』時代の同僚
昭和 22	1947	73 歳	この頃、松江の美術愛好者のため「審美会」で指導にあたる。幹事役は三島氏、会場は魚町の三島寸草庵など（～昭和 24 年 5 月）
昭和 25	1950	76 歳	この頃、八重垣神社（板絵着色神像）を発見（昭和 34 年 12 月に重要文化財に指定）
昭和 26	1951	77 歳	3 月、東京に戻り、はまの兄弟にあたる港区芝新堀町・桑山一郎方（薬局）に寄寓
昭和 27	1952	78 歳	矢代幸雄の推薦により、文化財保護委員会美術工芸部門専門審議会委員に就任
昭和 28	1953	79 歳	この頃、乾山会会長に就任 4 月、日本橋三越で「乾山代々をめぐる人々」展開催
昭和 29	1954	80 歳	10 月、東京都北区滝野川に居を定め「飛鳥山房」と名づける
昭和 30	1955	81 歳	5 月、市道拡張を機に松江市寺町龍覚寺にある相見家累代の墓 5 基を整理、新たに設計し 1 基とする
昭和 36	1961	87 歳	11 月、紫綬褒章、勲四等旭日小綬章を受章
昭和 37	1962	88 歳	7 月 21～23 日、『島根新聞』に座談会「相見香雨翁を語る（上・中・下）」掲載 10 月、皇居園遊会に出席
昭和 42	1967	93 歳	7・12 月、山内長三編「相見香雨翁回想録（その一）（その二）」『古美術』18・20
昭和 45	1970	96 歳	6 月 28 日歿。本郷の妙清寺に葬られる 8 月、加瀬藤園「相見香雨翁の死」『芸術新潮』248 号
昭和 46	1971		6 月、相見はま『相見香雨の一周忌に』私家版
昭和 59	1984		この年、中野三敏の仲介により、はまから九州大学へ相見香雨旧蔵書および自筆調査録寄贈
昭和 60	1985		12 月、はま 86 歳で歿

## 相見香雨 著作目録

和暦	西暦	論考・編著書（筆名が「相見香雨」の場合は省略、太字は関連展示出品）
明治42年	1909	10月、相見繁一「狩野諸家瑣談（其一）」『美術之日本』1-6 ★初論文
明治43年	1910	<b>11月、相見繁一「審美書院出版物の英国人に与へたるインプレツシヨンの一例」『美術之日本』2-11</b>
大正元年	1912	<b>11月、『群芳清玩』第1冊（1～5冊：芸海社、6～10冊：精芸出版合資会社、～大正10年11月）</b>
大正2年	1913	1月、『尚美資料』1編1輯（編者表記：田山宗堯・亀井唯二郎、尚美会、全12編～大正7年12月）
大正4年	1915	2月、相見繁一「光悦、光琳の事」『書画骨董雑誌』80 7月、同「小形光琳並に尾形家の事（小西家文書）」『書画骨董雑誌』85 8月、同「日允上人と日意上人（光琳伝の補正）」『書画骨董雑誌』86 10月、同「東山の書画会（皆川淇園創立の功勞並に蘆雪、竹洞の事）」『書画骨董雑誌』88
大正5年	1916	1～6月、「歌川豊春と彼が一代の傑作龍口御難図額〔四回〕」『浮世絵』8・10・12・13 ★号「香雨」の初使用 1月、相見繁一「図書考略記とその著者一枝軒一雪舟研究家の元祖一」『書画骨董雑誌』91 4月、相見香雨樓「古い湖龍齋」『絵画叢誌』343 4月、「大津絵師仏心」『書画骨董雑誌』94 <b>4月、『美術叢書4 池大雅（美術叢書刊行会）★初の単著</b> 5月、相見繁一「大津絵師仏心」『絵画叢誌』344 6月、「文晁摸写の東坡像に就いて」『絵画叢誌』345 8月、「蜂須賀所蔵嘯布袋附属の文書」『絵画叢誌』347 12月、「北馬と文晁と北齋」『浮世絵』19
大正6年	1917	2月、相見繁一編、田島志一序『浅野侯爵家宝絵譜』（芸海社） 3月、「海北友松（一）」『絵画叢誌』354 7月、「谷文晁」『中央美術〔日本美術学院〕』3-7 9月、「一好斎芳兼」『錦絵』6 9・12月、「海北友松（一）（二）」『美術新報〔画報社〕』276・279
大正7年	1918	2・4月、「海北友松（三）」『美術新報〔画報社〕』281・283 4月、「羅漢山人」『書画骨董雑誌』118 4月、「疱瘡絵」「源蔵豊国は一瑛齋なり」『浮世絵』35 8月、「蘆雪物語」『中央美術〔日本美術学院〕』4-8 12月、扇面亭編・相見繁一編『江戸諸家人名録』上下（藝苑叢書、風俗絵巻図画刊行会）
大正8年	1919	2月、清宮秀堅著・相見繁一編『雲烟略伝』（図書刊行会） 12月、『好古堂一家言』（著者表記・発行：中村作次郎） 12月、「小栗宗丹宗栗雑考」『中央美術』5-12 この年、大江資衡著・円山応挙校訂・相見繁一編『学翼』（藝苑叢書、風俗絵巻図画刊行会） この年、阿部良山著・相見繁一編『良山堂茶話』（図書刊行会） この年、藤井以正撰・相見繁一編『茶席墨宝祖伝考』（藝苑叢書、風俗絵巻図画刊行会）
大正9年	1920	2月、「文晁一門の閨秀作家」『芸苑』9 7～10月、「牧谿瑣談（上・中・下）」『美術写真画報』1-6・8・9 9月、「蕭尺木太平三山図に就いて（大雅研究の一節）」『美術画報』519 10月、「白醉葦芳村観阿」『書画骨董雑誌』148
大正10年	1921	5月、「中京浮世絵の元祖牧墨僊」『美術画報』527
大正11年	1922	2月、相見繁一編『雲州餘彩』上・下（芸海社） 11月、『木内翁小伝』（木内翁記念会） 12月、『柳營墨宝』（編者表記：和田幹男、精芸出版、付「徳川家の宝器伝来について」）
大正12年	1923	7月、「白酔菴筆記」『書画骨董雑誌』181
大正15年	1926	9月、「蘆雪の山姥」『伝説』1-4
昭和2年	1927	5月、「新発見の蔵丘」『日本美術協会報告〔第三次〕』4 8月、「閑却せられたる土佐光則」『日本美術協会報告』5 <b>12月、「抱一上人年譜稿」『日本美術協会報告』6</b> この年、『日本古画大観』前編（美術社）
昭和3年	1928	3月、「抱一によつて伝へられたる光琳、乾山が事ども」『日本美術協会報告』7 6月、「柳營茶器に関する片桐石州の覚書」『日本美術協会報告』8 9月、「芸苑史料二三」『日本美術協会報告』9 この年、『日本古画大観』後編（美術社）
昭和4年	1929	6月、「近世大和絵漫談」『美之園』5-6

		8・11月、「海北友松並に其系統の人（一）（二）」『日本美術協会報告』13・14
昭和5年	1930	1・3月、「奥原晴湖（上）（中）」『埼玉史談』1-3・4 2・8月、「海北友松並に其系統の人（三）（四）」『日本美術協会報告』15・17 3月、「大虚庵の二重芸術」『美之國』6-3 5月、「名宝展の屏風」『美之國』6-5 6月、田中一松・秋山光夫・相見繁一編『宋元名画集』上（聚楽社） 11月、「焼絵と稲垣如蘭」『日本美術協会報告』18
昭和6年	1931	2～11月「訥言一蕙漫談（一）～（三）」『日本美術協会報告』19・20・22 2月、「海北友松並に其系統の人（五）」『日本美術協会報告』19 3月、「俳画と破笠」『塔影』7-3 6月、『復古大和絵集』（編者表記：兼光豊治、巧芸社） 9月、「老雨先生の思出」『島根評論』8-9 この年、「絵巻物に於ける裸体画」『日本裸体美術全集』2（高見沢木版社）
昭和7年	1932	1月、「寛政文晁の展望」『塔影』8-1 2月、「訥言一蕙漫談（四）」『日本美術協会報告』23 4月、「宮田翁昔譚」『日本美術協会報告』24 8月、「伝形山作鼠燈檠に就いて」相見繁一「象壁を拝観して（細奇工小島形山の事）」『日本美術協会報告』25 <b>9月、「老雨先生の思出」『雨森精翁五十年録事』（雨森家）</b> 11月、「古画希蹟研究（一）」「能阿弥と啓書記（上）」『日本美術協会報告』26 この年、渡邊華石共編「渡邊華山落疑印譜」『近世日本画大観 10』（高見沢木版社） この年、「元朝の絵画」『世界美術全集』13（平凡社） この年、「元朝の絵画（下）」『世界美術全集』15（平凡社） この年、「徳川末期の絵画（上）」『世界美術全集』27（平凡社）
昭和8年	1933	2月、「能阿弥と啓書記（下）」「古画希蹟研究（二）」『日本美術協会報告』27 5月、「東山春興一木米画山陽書の本一」「象壁並に鼠燈台に関する追記」『日本美術協会報告』28 8月、「君台観刊本と豊田屋九右衛門」『日本美術協会報告』29 8月、『罹災美術品目録』（国華倶楽部） 11月、『渡辺華山 寓画堂日記』（観文楼叢刊） 11月、「二十三歳の華山」『古画希蹟研究（三）」『日本美術協会報告』30
昭和9年	1934	1月、「琳派叢談」『塔影』10-1 2月、「画梅断片」『南画鑑賞』3-2 2月、「小栗宗湛伝考 上」『日本美術協会報告』31 5月、「文晁松島紀行に就いて」『日本美術協会報告』32 6月、「石山寺縁起補修顛末」『美之國』10-6 8月、「嵌工芸術と破笠（上）」『日本美術協会報告』33 11月、「長沢蘆雪に就いて」『書画骨董雑誌』317 11月、「嵌工芸術と破笠（中）」『日本美術協会報告』34
昭和10年	1935	1月、「鶴画断片」『全楽堂遺墨浅説』『塔影』11-1 1月、「岡崎氏所蔵元信山水図屏風に就いて」『島根評論』12-1 2月、「曾我兵部景種」『古画希蹟研究（四）」『日本美術協会報告』35 5月、「柳太夫指竹画」『南画鑑賞』4-5 5月、「牧谿玉潤伝新史料—元人呉太素「松斎梅譜」に就いて—」「松斎梅譜に就ての追記」 「古画希蹟研究（五）」「嵌工芸術と破笠（下）」『日本美術協会報告』36 7月、正木直彦ほか共著「宗湛日記」を読む（一）『瓶史』夏の号 8月、「嵌工芸術と破笠（下二）」『日本美術協会報告』37 10月、「俳画に見えたる彭百川」『中央美術 [中央美術刊行会] 』27 10月、正木直彦ほか共著「発見された信長の茶会記を読む会」『瓶史』秋の号 11月、「司馬江漢古野紀行を紹介す」『日本美術協会報告』38
昭和11年	1936	1～10月、正木直彦ほか共著「宗湛日記」を読む（二～四）『瓶史』新春特別号・夏の号・秋の号 2月、「芳中漫談」『日本美術協会報告』39 3月、「抱一の美人畫」『阿々土』11 5月、「南画の心と形」『理想』10-2 5月、「彭百川近江京都名所絵図」『日本美術協会報告』40 9月、「北宗墨画の—源流高山寺墨画の瞥見」『塔影』12-9 11月、「海北派の画家（上） 神前松徳と友柏」『日本美術協会報告』42 この年、「珠光の絵事について」『茶道全集 巻の5（茶人篇）』（創元社）
昭和12年	1937	2月、「黙庵の布袋」『日本美術協会報告』43



		2月、「海北派の画家(下)」『日本美術協会報告』43 3月、「玉堂文房十八友」『南画鑑賞』6-3 4月、「探幽雑談」『塔影』13-4 5月、「服部南郭の画事 附、海雲上人(忍海)の画」『日本美術協会報告』44 7月、「華山の版画のことなど」『南画鑑賞』6-7 7・10月、正木直彦ほか共著「宗湛日記を読む(五)(六)」『瓶史』夏の号・秋の号 8月、「華山と太白堂 附、桃家春帖、華陰稿、月下稿の事」『日本美術協会報告』45 11月、「雲室修禅余墨」「続芦雪物語」『日本美術協会報告』46 この年、「徐熙の鷺と圓悟の墨蹟」『茶道全集 巻の13(特殊研究篇)』(創元社)
昭和13年	1938	1・5月、「大雅池氏伝余瀝(上)(下)」『瓶史』新年特別号・春の号 1月、正木直彦ほか共著「宗湛日記を読む(七)」『瓶史』新年特別号 4月、田中一松・秋山光夫・相見繁一編『宋元名画集』下(聚楽社) 5月、「画家の歌もの」『好古』1 5月、「相説宗雪と宗仙」『日本美術協会報告』48 8月、「大雅の雲州行」『南画鑑賞』7-8 9月、「画人の肖像画談」『塔影』14-9 10月、「大雅堂遺事瓊録」『南画鑑賞』7-10 11月、「是真点描」『日本美術協会報告』50
昭和14年	1939	1月、「武人画といふもの」『茶わん[茜屋書房]』9-1 1月、「香画といふもの」『好古』9 1月、「無記名」『画記(公刊)』『美術研究』85 4月、「彭百川雑考」『南画鑑賞』8-4 4月、「画譜のはなし」『瓶史』春の号 4月、「武人画の二三に就て」『日本美術協会報告』51 6月、「介石画話小引」『日本美術協会報告』52 9月、「二天随筆」『塔影』15-9 11月、「宮崎筠圃狗尾」「酒井仲遺稿抄 酒井仲と其遺稿に就いて」『日本美術協会報告』54 この年、『書道文庫34 光悦・松花堂』(アトリエ社) この年、『東洋美術文庫16 文晁』(アトリエ社)
昭和15年	1940	3月、「前田侯爵家山水屏風と曾我蛇足」『国宝』3-3 3月、「参考古画の二三に就いて」『日本美術協会報告』55 5月、「雪村の山水と竹猿」『日本の茶道』6-5 6月、「白雲文泉の西遊に就いて」『日本美術協会報告』56 8・12月、「全案余韻(上)(下) 渡辺華山と山本梧庵」『日本美術協会報告』57・58
昭和16年	1941	1月、「華山の名字号考」『東美』7 4月、「渡辺登のノボリとノボルの説」『国宝』4-4 6月、「山本素軒並びに山本家の歴代を録す」『日本美術協会報告』59 8・9月、「牧谿と八景(上)(下)」『日本の茶道』7-8・9 11月、「柳里恭伝資料」『日本美術協会報告』60 12月、「渡辺華山版画考」『洗硯』1-8
昭和17年	1942	1・2月、「宇喜多一蕙斎遺事(上)(下)」『国画』2-1・2 5月、「渡辺立の椿山先生を祭るの文」『日本美術協会報告』61
昭和18年	1943	1月、「京狩野三代記」『美術新報(旬刊)』47 2月、「藤浪[剛一]博士を懐ふ」『掃苔』12-2 3月、「兼葭堂と立原翠軒 兼葭堂江戸下向のこと其他」『上方』146 5月、『乾山遺芳』(編者表記:廣谷錦堂、乾山会) 5・8月、相見繁一「画本研究(一)」『美術史学[画説改題]』77・80 8月、「立原朴二郎」『南画鑑賞』12-8
昭和19年	1944	2月、「多胡逸斎と渡辺華山 上 逸斎の在府日記を中心として」『南画鑑賞』13-2
昭和26年	1951	12月、「光悦画事の問題」『仏教芸術』14
昭和27年	1952	<b>12月、「宗達の仙仏画と「仙仏奇踪」」『大和文華』8</b>
昭和28年	1953	9月、「菱川師宣の初作期に就いて」『大和文華』11 12月、「墨美の秋の秀逸」『淡交』66
昭和29年	1954	9月、「新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問変相経について(上)」『大和文華』15
昭和30年	1955	6月、「新出現の宋拓華嚴入法界品善財参問変相経について(下)」『大和文華』16 7月、「乾山の田楽箱」『日本美術工芸』202 9月、「若冲の拓版画」『芸術新潮』6-9

		10月、「池大雅と西洋画」『中央公論』10
昭和31年	1956	3月、「光琳初期の習作画」『大和文華』19 10月、「乾山十二ヶ月花鳥歌絵」『大和文華』21
昭和32年	1957	3月、「柳里恭と池大雅」『南画研究』1-1 6月、「渡辺始興と乾山」『大和文華』23 10月、「服部南郭の画事」『南画研究』1-8 10月、「乾山の江戸下向について」『陶説』55 12月、「大雅の画譜(一)」『南画研究』1-10 この年、「琳派随想」『新らしい眼』1-3
昭和33年	1958	1月、「池大雅と西洋画」『原色版美術ライブラリーの葉』東洋篇7(121大雅付録) 1~5月、「大雅の画譜(二)~(六)」『南画研究』2-1~5 1月、「本阿弥系図の考察一特に宗達との関係について」『萌春』51 3月、「木幡吹月氏蔵乾山十二ヶ月歌絵皿について」『陶説』60 5月、「天下太平の乾山」『萌春』55 6月、『原色版美術ライブラリー 光琳』(みすず書房) 6月、「柳里恭雑考」『大和文化研究』4-5・6 8~10月、「高芙蓉と来禽(上)(中)(下)」『南画研究』2-8~10 10月、「小形光琳の大石良雄像」『萌春』60 11月、「乾山随想」『陶説』68
昭和34年	1959	1月、「売酒郎佐竹噲噲」『南画研究』3-1 1月、「抱一略年譜」『萌春』63 2月、「乾山画雑感」『陶説』71 3~5月、「出雲に於ける大雅(上)(中)(下)」『南画研究』3-3~5 4月、「光琳東下考(上)」『大和文華』29 9月、「罕物最上」『南画研究』3-6 <b>10月、「深江芦舟の墳墓発見をめぐって」『大和文華』31</b>
昭和35年	1960	1月、「乾山の詩仙堂遊記」『陶説』82 7月、「宗達風雷神と妙光寺」『萌春』81 9月、「光琳東下考(中の一)」『大和文華』33 10月、「野沢コレクションの琳派画」『野沢一郎回顧展 新築記念画集』
昭和36年	1961	2・3月、「仁清の墓跡確認—洛北妙光寺と仁清(上)(下)」『陶説』95・96 5月、「光琳の盛り上げ菊」『三彩』138 10月、「宗雪の木蓮花」『三彩』143 10月、「乾山獅子香炉と竹田」『MUSEUM』127 この年、「光琳の雉子」『アート』3-2
昭和37年	1962	5月、『飛鳥山房十友』(私家版、大塚巧藝社) 6月、「入谷乾山の展望—寛永寺伝来柄香炉の発見—」『萌春』102
昭和38年	1963	10月、「緒方乾山の富士」『古美術 [三彩社] 』3
昭和40年	1965	1月、「光琳草花図二曲屏」『古美術 [三彩社] 』7 3月、「虎の図屏風(牧谿と周文)」『古美術 [三彩社] 』8
昭和42年	1967	1月、「光悦書画卷の断簡について」『古美術 [三彩社] 』16

#### 【参考文献】

- ・『美術之日本』彙報欄、審美書院、1909年5月~
- ・座談会「相見香雨翁を語る(上・中・下)」『島根新聞』1962年7月21~23日
- ・竹内尚次編「飛鳥山房相見香雨先生略伝」「相見香雨先生著述目録」『飛鳥山房十友』私家版、大塚巧藝社、1962年
- ・山内長三編「相見香雨翁回想録(その一)(その二)」『古美術』18・20号、1967年7・12月
- ・加瀬藤園「相見香雨翁の死」『芸術新潮』248号、1970年
- ・相見はま編『相見香雨の一周忌に』私家版、1971年
- ・中野三敏、菊竹淳一編『相見香雨集』全5巻、青裳堂書店、1985~1998年
- ・関研二編刊『婦人解放の大河に生きて 関高子遺稿追悼文集』1991年
- ・森山時雄『一老美術史学者 相見香雨の回想』私家版、旧版1985年、新版1996年
- ・山陰中央新報社社史編纂委員会編『山陰中央新報百二十年史』山陰中央新報社、2003年
- ・東京文化財研究所データベース「総合検索」<https://www.tobunken.go.jp/archives/>

## 関連展示 出品目録

No.	作成者	資料名	年代	員数	所蔵機関
<b>【第一章】 父・相見文右衛門と祖父・森脇忠兵衛</b>					
1	瀧川伝右衛門	『御囃子日記』	天保12年～万延元年 万延2年～元治元年	2冊	島根県立図書館
2	木佐愛造世久	「二世木佐愛造世久経歴控」 (新木佐家文書267)		1点	島根県立図書館
3	相見文右衛門 (淞雨) 刻 中村準一郎(鷺山) 編	『蘆花浅水処印叢』	明治24年	3冊	九州大学中央図書館
4	中村準一郎撰	「相見淞雨碑(龍覚寺)」 (上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』昭和16年所収)	明治24年6月建碑	1冊	個人蔵
<b>【第二章】 近代松江における漢詩文化</b>					
5	湖南信天吟社編	『碧雲一朵』	明治12年	1冊	個人蔵
6	横山重固編	『出雲詩綜』	大正8年	1冊	島根県立図書館
7	河野天鱗	『淡成舎遺稿一斑』 乾・坤	明治44年	2冊	個人蔵
8	雨森薫編	『雨森精翁五十年録事』	昭和7年	1冊	個人蔵
<b>【第三章】 松江藩と豪商たちのコレクション</b>					
9	陶斎尚古老人 (松平不昧)	『古今名物類聚』(箱共)	寛政元年～9年	18冊	島根大学附属図書館桑原文庫
10	中川次郎	「不昧公御旧蔵古今名物類聚伝来書」	大正6年	1通	島根大学附属図書館桑原文庫
11	相見繁一編	『群芳清玩』第3冊、第6冊	大正2年、7年	2冊	京都工芸繊維大学附属図書館
12		「御道具帳」(乙部家文書11-7)	明治4年以降	1冊	個人蔵、松江歴史館寄託
13		「雲州乙部家蔵幅目録 完」	明治20年代	1冊	島根大学附属図書館桑原文庫
14		「雲藩家老乙部家道具帳」	大正10年頃	1冊	島根大学附属図書館桑原文庫
15	布野勝太郎編	『第一回新古美術品展覧会出品目録』第1号～第6号	明治24年	6冊	島根県立図書館
16		「第老回美術品展覧会出品中宮内省参考品となりし美術品目録」	明治24年	1冊	島根大学附属図書館桑原文庫
<b>【第四章】 美術史家・相見香雨の誕生</b>					
17	大村西崖編	『東洋美術大観』5巻	明治42年	1冊	九州大学文学部
18		田島志一、相見繁一らの渡欧を伝える審美書院発行誌(『美術之日本』2巻5号ほか)	明治43年5月ほか	3冊	個人蔵
19	相見繁一	「審美書院出版物の英国に与へたるインプレッションの一例」(『美術之日本』2巻11号)	明治43年11月	1冊	個人蔵
20	相見繁一	『美術叢書四 池大雅』	大正5年4月	1冊	個人蔵
21	相見香雨	「抱一上人年譜稿」 (『日本美術協会報告』6輯)	昭和2年12月	1冊	個人蔵
22	相見香雨	「宗達の仙仏画と「仙仏奇踪」」 (『大和文華』8号)	昭和27年12月	1冊	島根県立美術館
23	相見香雨	「深江芦舟の墳墓発見をめぐる」 (『大和文華』31号)	昭和34年12月	1冊	島根県立美術館
24	相見はま編	『相見香雨の一周忌に』	昭和46年6月	1冊	個人蔵

---

# 相見香雨没後五〇年記念シンポジウム

2020年12月6日（日） 13:30～16:30

---

- 13:20 関連展示紹介（紹介映像上映、5分×1回）
- 13:25 事務局からのお願い（注意事項、質問・コメント方法について）
- 
- 13:30 開会挨拶： 丸橋 充拓（島根大学法文学部山陰研究センター長）  
開催にあたって：藤間 寛（松江歴史館学芸専門官、桑原相見研究会副代表）
- 13:35 プログラム、パネリスト紹介  
司 会： 田中 則雄（島根大学法文学部教授）  
林 みちこ（筑波大学芸術系准教授、桑原相見研究会）
- 
- 13:45～14:15 報告① 村角 紀子（松江市史料調査課専門調査員、桑原相見研究会代表）  
「19世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生」
- 14:20～14:50 報告② 要木 純一（島根大学法文学部教授）  
「近代松江における漢詩文化」
- 14:55～15:25 報告③ 玉蟲 敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）  
「日本の近世美術史における相見香雨の業績と現代的意義」
- 
- 15:30～15:40 休憩、質疑とりまとめ（関連展示紹介映像を上映、5分×2回）
- 
- 15:40～16:25 質疑応答／ディスカッション
- 16:30 お知らせ（事業報告書発刊、「しまね地域資料リポジトリ」掲載について）  
閉会

## パネリスト



### 【報告1】村角 紀子（むらかど のりこ）

1972 年生まれ。桑原羊次郎・相見香雨研究会発足時から代表。島根県立美術館を経て、現在、松江市歴史まちづくり部史料調査課専門調査員。専門は日本近代美術史、日本美術史学史。

- ・「審美書院の美術全集にみる〈日本美術史〉の形成」『近代画説』8号、1999年
- ・「明治期の古美術写真―畿内宝物取調を中心に―」『美術史』第153冊、2002年（第2回『美術史』論文賞受賞）
- ・『藤岡作太郎「李花亭日記」美術篇』中央公論美術出版、2019年



### 【報告2】要木 純一（ようぎ じゅんいち）

1961 年生まれ、現在、島根大学法文学部教授。専門は中国文学。

- ・「明治初期の出雲漢詩壇について」『アジア遊学』135号、2010年
- ・山陰研究ブックレット4『明治の松江と漢詩―明治初期の出雲漢詩壇』今井印刷株式会社、2015年



### 【報告3】玉蟲 敏子（たまむし さとこ）

1955 年生まれ、静嘉堂文庫美術館主任学芸員を経て、現在、武蔵野美術大学造形学部教授。専門は日本美術史。2018年、紫綬褒章受章。桑原羊次郎・相見香雨研究会外部会員。

- ・『生きつづける光琳 イメージと言説をはこぶ《乗り物》とその軌跡』吉川弘文館、2004年
- ・『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』ブリュッケ、2004年（國華賞受賞）
- ・『俵屋宗達 金銀の〈かざり〉の系譜』東京大学出版会、2012年（芸術選奨文部科学大臣賞受賞）

## 19世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生

村角 紀子（桑原羊次郎・相見香雨研究会代表、松江市史料調査課専門調査員）

はじめに

本シンポジウムと関連展示を主催する桑原羊次郎・相見研究会で代表をしております、村角紀子です。ここでは、「19世紀松江の地域文化と美術史家・相見香雨の誕生」と題し、相見香雨という在野の美術史家がどのような背景から登場したのかということ、関連展示の出品資料を引用しながら紹介していきます。

（※以下、報告中にスライドで示した画像が本書に掲載されている場合は「○頁参照」として省略）

### 1. 美美術史家・相見香雨の誕生（展示：第4章）

#### (1) 審美書院主幹・田島志一の来松

松江で『松陽新報』編集者をしていた相見香雨（1874-1970）が美術史家の道を歩むきっかけとなったのは、明治39年（1906）頃、東京の美術専門出版社・審美書院主幹の田島志一（1868-1924）が松平伯爵家所蔵の不昧公名物撮影のために来松したことでした。松平家用達所での約一ヶ月に及ぶ調査を手伝った相見は田島と懇意となり、「入社」の予約をします。

…その頃、東京の審美書院主幹田島志一氏が松平伯爵家の不昧公名物の古書画古器物撮影のために、柴田写真師を同伴して出張して来て、そのお手伝いを頼まれた。そこで松平家宝蔵系の安井執事に紹介して、仕事にとりかかった。まず蔵帳の調査から始まる。その蔵帳なるものが数十冊の膨大なもので、その要所を謄写研究するのに十日余りを費したような次第で、一々の現物をそれにとり合せてしらべるとは中々の大仕事で、遂には一ヶ月ばかりにも及んだかと記憶する。かくて私は田島氏とも懇意になり、後年審美書院へ入社を予約するようになった。（山内長三編「相見香雨翁回想録（その二）」、『古美術』20号、昭和42年）

「不昧公名物」と一口に言っても、ご存知の通り、その内容は茶器から墨蹟、書画など多岐に渡りますが、この時期の審美書院の出版物に茶器を取り上げたものは見当たらない

ため、田島たちの撮影対象は、明治40年に同社が刊行した『支那名画集』上下に「伯爵松平直亮君蔵」として掲載した中国絵画だったと考えられます。



図1 松平家家令・安井泉  
『溟齋詩存』昭和8年  
口絵

この時、田島たちの対応にあたった松平家家令の安井泉（図1）と、蔵帳の調査作業をした「松平家用達所」（21頁参照）です。松江藩の木実方役所の建物が利用されたもので、現在の松江赤十字病院の場所にあつた（※正確には同病院東、堀を挟んだ米子町～南田町）。

明治4年（1871）の廃藩置県の後、最後の藩主で藩知事だった松平定安（1835-1882）が東京に移った後は、同所が松江における松平家留守番役を果たしていました。建物が取り壊されたのは昭和4年頃だったようです。<sup>i</sup>

#### (2) 上京、審美書院に入社

明治41年春（明治42年初夏とする森山時雄氏の指摘もありますが、ここでは前掲「相見香雨翁回想録」に従います）、相見は審美書院に入社し、刊行中の『東洋美術大観』をはじめ、同社の代表的美術書の史料収集や作品調査を担当します。さらに、明治43年（1910）開催の日英博覧会に出陳する『特別保護建造物及国宝帖』の編纂事務にあたりました。

〔明治〕四十一年の春、予約の如く、審美書院へ入社した。その頃書院では「東洋美術大観」が第三冊の鎌倉時代まで出て、そのあとの資料蒐集調査のために、私は京都方面へ出張することになっておった。〔中略〕その内、四十三年（一九一〇）に倫敦で開催される日英博覧会へ、内務省から「国宝帖」なるものを出品することあり。その編集総裁が岡倉覚三氏、委員は伊東忠太、関根〔関野〕貞、中川忠順、平子鐸嶺の四氏、

その事務を福井利吉郎がやった。而してその印刷の請負は国華社と競争して、審美書院がとって、その事務には私が当たった。(「相見香雨翁回想録(その二)」)

この『東洋美術大観』(20頁参照)は、審美書院を代表する美術全集であり、明治41年~大正7年にかけて全15冊が刊行されました。特に「日本画之部」(第1~7冊)は、現在でも史料的に重要とされています。大変豪華な大型美術全集で、今でも揃いで古書店に出ますと、150万円程度の値がついています。

やや話がそれましたが、つまり、相見は地元松江の新聞社を経て34歳で審美書院に入社し、やや遅れたスタートで美術史の世界に入りますが、入社時点から、すぐに様々な調査に対応できるだけの美術の知識を持った人材だった、とすることができます。

## 2. 背景としての家系と地域文化(展示:第1、2章)

### (1) 家系—祖父・父・祖母

では、その背景にあった家系と地域文化について見てみたいと思います。まず、「家系」として祖父と父、そして祖母を追ってみましょう。

祖父は、白潟本町の豪商森脇家のひとつ、古森家の森脇忠兵衛十世元照、号を「松陵」と言いました。大年寄・大目代など町役人の重職をつとめる家柄で、篆刻の名手としても知られていました。

父は松陵の三男で、幼名庫三郎、18歳で白潟魚町の相見家(屋号・野波屋)へ養子入し、文右衛門の名を継ぎました。芸達者で書画に優れたそうですが、忠兵衛と同じく篆刻を最も得意とし、「淞雨」と号しました。すなわち、「香雨」という号は、この父の号から韻と「雨」の字を継いでいる訳です。

そして、祖母である松陵の妻らくは、本木佐家の出身でした。同家については後ほど詳しく紹介します。

森脇忠兵衛とその長男貫一郎(庫三郎の長兄)は、豊後国日田の儒学者・広瀬旭荘(1807-1863)の日記にも登場します。嘉永7年(1854)、旭荘は半年にわたって山陰を周遊しており、その漢文日記「日間瑣事備忘録」巻百三によれば、松江滞在にあたっては、旧知の妹尾謙三郎(雨森精齋)の仲介で松林寺和尚と白潟大目代の森脇忠兵衛が世話役をつとめました。この滞在中に、貫一郎は旭荘に名・字・号を選んでもらっています。旭荘が松江を発った後も、忠

兵衛との間には手紙の往復があり、忠兵衛が篆刻の名手であると聞いた旭荘は、地元産の瑪瑙の印材2顆に篆刻を依頼しています(12頁参照)。<sup>ii</sup>

次に、相見文右衛門(淞雨)の印譜『蘆花浅水処印叢』をご紹介します。明治24年(1891)5月の文右衛門没後、友人の中村準一郎(鷺山)がとりまとめ、版行した印譜です。現在、九州大学中央図書館相見文庫に完本一冊、不揃い二冊が所蔵されています。

巻頭には、淞雨の師にあたる雨森精翁や、松江を訪れた清朝詩人(胡鉄梅・葉松石・衛鏗生・章寿彝)による序文が掲載されています。

題にある「蘆花浅水処」とは、白潟魚町の宍道湖畔にあった淞雨の居宅と考えられます。胡鉄梅が描いた「蘆花浅水処之図」を見ると、その名の通り、蘆の生い茂る中に流水が配される、俗世を離れた風雅な場所であったことが伝わってきます(10頁参照)。

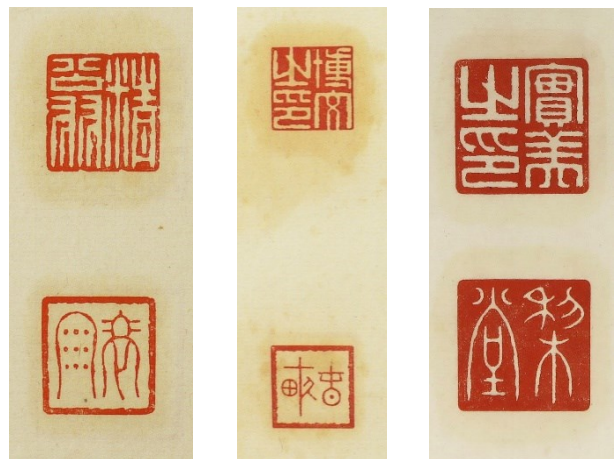


図2 相見文右衛門(淞雨)印譜『蘆花浅水処印叢』  
明治24年より 九州大学中央図書館蔵

右から、三条実美・伊藤博文・雨森精翁のために彫った印章の印影です。この他、現在では誰の印か分からないものも多数あります。

印に彫られた文字は名や号ばかりでなく、「澹如水(あわきことみずのごとし)」とか「晴耕雨読」といった、所有者の人生観や座右の銘を示す遊印もあります(図3)。文人趣味が非常に強く感じられるものですが、もしこれが文右衛門自身の座右の銘だったとすれば、およそ商売には向かない人だったろう、などと想像されます。



図3 遊印の例  
同前書



そして、祖母の実家である本木佐家は、松江の西隣に位置する平田で本陣をとつとめた家柄ですが、『平田市誌』に詳細な「木佐家系図」が掲載されているので、そこから抜粋して紹介します（図4）。<sup>iii</sup>

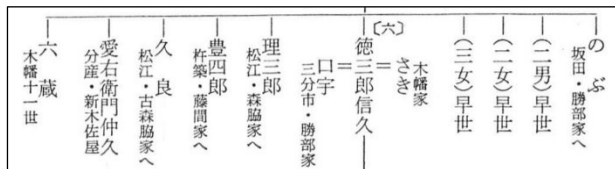


図4 「木佐家系図」六世部分抜粋  
平田市誌編さん委員会編『平田市誌』昭和44年より

この系図に拠れば、らく（元は久良といったようですが）は、本木佐家五世の四女にあたります。姉のぶは斐川（坂田）の勝部家へ嫁いでおり、本木佐家六世となった徳三郎信久、および杵築（大社）の藤間家十五代寛左衛門は兄、新たに新木佐家をたてて元祖となった愛右衛門仲久、および宍道の木幡久右衛門十一世梅屋は弟にあたります。

つまり、その血縁は、宍道湖を囲んで松江藩領の豪商・豪農に広がっていたことが分かります（図5）。

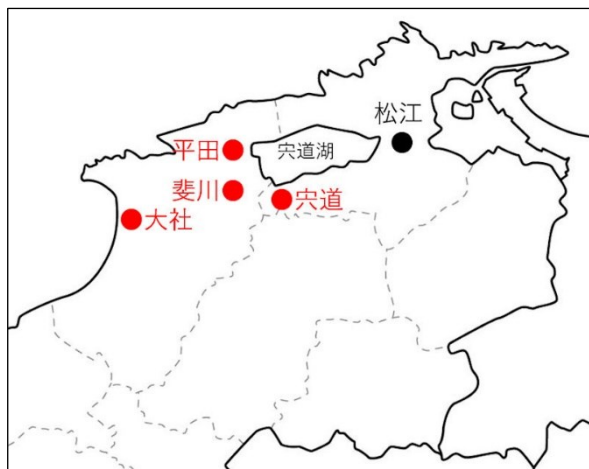


図5 島根県東部の概略図

## (2) 地域文化

次に、地域文化について見ていきます。「漢学教育の普及と漢詩文化」については、次の要木先生のご報告で詳しく取り上げていただくので省略し、ここでは、

- ・瀧川伝右衛門『御囃子日記』（島根県立図書館蔵）
- ・河野天鱗十七回忌刊行『淡成舎遺稿一斑』（個人蔵）

を取り上げます。

『御囃子日記』は、江戸時代末期、毎年正月五日に松江城三之丸御殿や家老宅で開催される御松囃子などで謡・囃子・舞を披露した「連中」の活動記録です。メンバーは松

江城下の有力町人とその子弟で、筆者で御用商人の瀧川伝右衛門が世話役をつとめていました。演目や演者、稽古の様子、本番後の酒宴メニューなどが記された興味深い史料です。<sup>iv</sup>

この『御囃子日記』に、「連中」の一員として、相見香雨の祖父・森脇忠兵衛と父・庫三郎（相見文右衛門）も登場しています。庫三郎は、はじめ「忠兵衛三男 森脇屋庫三郎」として記され、文久元年（1861）12月からこれを訂正して「野波屋庫三郎」と記されています（9頁参照）。

あわせて、ここに記される他の参加者、演者の名前を追っていくと、「岡崎屋だれそれ二男」「佐藤だれそれ孫」といった人間関係が見えてきます。

次に、『淡成舎遺稿一斑』ですが、これは学僧で漢詩の指導者だった河野天鱗という人物の十七回忌に刊行された、乾坤二冊の遺稿集です。この巻末に示されている出版賛助者は、イコール天鱗の門下だった人々、ということになりますが、岡崎運兵衛、佐藤喜八郎、三島佐次右衛門、森脇甚右衛門という松江城下を代表する豪商たちの名が並んでいるのが確認できます（14頁参照）。

さて、ここで経済の方に目を移してみましょう。今回の関連展示が始まった頃、『山陰中央新報』という地元紙で相見香雨について2回、紹介記事を掲載していただいたのですが、これを読まれた島根県大田市の古札研究家・那須寛正さんからお手紙をいただきました。相見文右衛門が発行した連判札（民間製造札）があるというのです（図6）。

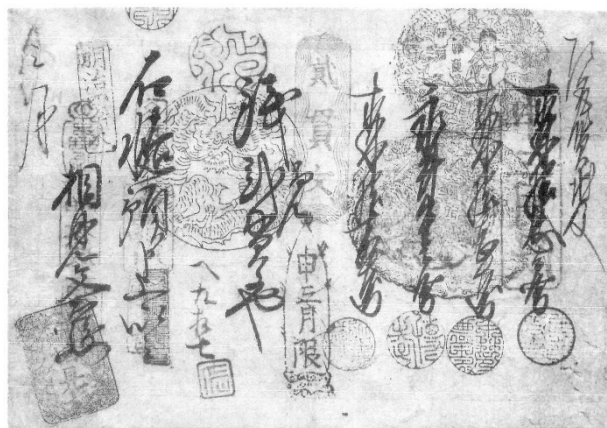


図6 連判札 銭式貫文 相見文右衛門発行 明治4年  
那須寛正編刊『出雲・隠岐両国古札図録』平成26年より

右側に名を連ねる保証人も、森脇忠兵衛をはじめ、森脇甚右衛門（大森脇）、森脇嘉右衛門（西森脇）といった、ごく近い親戚筋の豪商たちです。ちなみに、これと発行年・保証人の顔触れは同じで、発行人だけが岡崎運兵衛に代わっている連判札もありました。<sup>vi</sup>



つまり、ここから何が見えるかと言いますと、御囃子の連中、漢詩の門下生、連判札（民間製造札）の発行人・保証人は、ほぼ同じメンバーだった、ということです。例えて言うなら、松江では幕末から明治期を通じて、「松江管弦楽団」と「松江文芸協会」と「松江金融組合」が、「松江商工会議所」の幹部役員とほぼ同じ顔触れで運営されていた、ということです。すなわち、豪商たちの経済活動と文化活動のネットワークは、ほぼ一体化していた。さらに言えば、先ほどの本木佐家の系図で見たように、そのネットワークは、婚姻を結んだ血縁関係によって強化され、藩領全域へと広域化することで、長期持続可能になっていた、ということも見えてきます。

### 3. 松江藩と豪商たちのコレクション（展示：第3章）

以上、祖父から父へと続いた文人的教養と地域文化を見てきました。次に、相見の美術に対する審美眼や基礎知識の形成に深く関わったと考えられる、近世以来、松江の地で所蔵されてきた書画骨董コレクションについて見ていきます。

#### （1）雲州松平家（松平伯爵家）の不昧公名物

まずは雲州松平家七代藩主・松平治郷（不昧）が収集した名物茶道具が突出した存在として挙げられます。先に述べたように、同家の所蔵品は、廃藩置県により松平定安が東京に移った後も、木実方役所跡に置かれた松平家用達所において管理されていました。後に相見香雨が入社することとなる審美書院主幹・田島志一の来松も、同家蔵品の撮影が目的であり、正木直彦・高橋葦庵など著名な研究者や数寄者も、明治末から大正期にかけて松平家用達所へ調査に訪れています。

ここでは、東京美術学校校長の正木直彦（1862-1940）の例を紹介します。正木の『十三松堂日記』の明治45年（1912）6月3日～10日に松江旅行の記述があり、この一週間の滞在中、正木は3回、松平家用達所を訪れています。

〔明治四十五年〕六月六日 快晴 午前松平家御用達所といふ所にて同家の宝物を拝見す〔中略〕床に  
祖元無学墨蹟 無準筆一葉観音自賛 徐熙筆梅鷺…

六月九日 雨 松平家御用達所にゆきて什宝拝見  
宗甫小色紙 探幽画遠山時雨 牧溪筆蓮鷺 牧溪筆  
探幽安信常信極竹鳩 牧溪筆蓮燕…

六月十日 松平家にゆきて三度目の拝見をなす〔中

略〕松平家第一の宝物油屋肩衝を拝見せんと請ひしに  
明治時代に入りて此肩衝を拝見せしものは伏見宮殿  
下に一度台覧に供へしのみにて何人も拝見せしもの  
なしといふ 此度は格別のことなればとて一同に盥  
漱せしめて米村家従庫中より負ひて出せるは高四尺  
もあらんと覚しき桐白木笈也 目録に照して拝見す  
… （正木直彦『十三松堂日記』第1巻、中央公論  
美術出版、昭和40年）

1回目、2回目は、あらかじめ床に準備された不昧公遺愛の書画や茶器を拝見していたようですが、3回目によりやく「松平家第一の宝物油屋肩衝」を見たいと要請し、手洗い、うがいで身を清めた末に拝見を許されました。なお、松平家家従の米村信敬がここで「明治になってこの肩衝を見せたのは伏見宮殿下のみ」と語っているところからも、前述の明治39年頃の審美書院来松時の調査では、この「松平家第一の宝物」は撮影も拝観も許されていなかったことがうかがえます。

次に、不昧に代表される武家の美術愛好文化が、幕藩体制の崩壊後、松江においてどのように継承されたか、不昧書入本『古今名物類聚』（全18冊、17頁参照）の伝来を例に見てみます。

2015年に島根大学附属図書館桑原文庫（第3期）に収蔵された本資料は、不昧が手許に置き、自ら訂正を書入れたものとされており、書入は111箇所及んでいます。2018年の「没後200年 大名茶人・松平不昧展」（三井記念美術館、島根県立美術館）で初めて紹介されました<sup>vii</sup>。中川次郎から桑原羊次郎に宛てた伝来書が付属しています（17頁参照）。時間の関係でここでは全文は読み上げませんが、要旨を紹介しておきますと、本資料は不昧の没後、子の八代藩主・斉恒（月潭院）が加筆し、九代藩主・斉貴（直指庵）に伝えられ、中川次郎の曾祖父・半兵衛が斉貴より拝領しました。時期は不明ですが、中川家から蔵書家として著名な松江の久保田竹次郎に渡り、大正6年（1917）、不昧公百年忌の年に桑原羊次郎が入手した、ということです。

『松江藩烈士録』に拠れば、中川次郎は元「若殿様御扈從（小姓）」で、元祖中川半兵衛から八代目です。同家は二代源五右衛門の時に二代藩主・綱隆の御扈從となり、代々「御扈從番組筆頭役」をつとめました<sup>viii</sup>。

以上の来歴は、近代の松江において、富商が武家の美術愛好文化を継承していたことを象徴するものと言えるでしょう。

(2) 代々家老・乙部九郎兵衛家の中国絵画コレクション  
一方、松江藩代々家老六家の一家であった乙部九郎兵衛の中国絵画コレクションも、かつてはこれに劣らず著名でした。

相見香雨は大正7年(1918)、『群芳清玩』という美術全集で、乙部家所蔵絵画目録を「総門雲煙集」と題して翻刻し、全国に紹介しています。この「総門雲煙集」の原典は、乙部家の「御道具帳」(個人蔵、松江歴史館寄託、18頁参照)と考えられます。

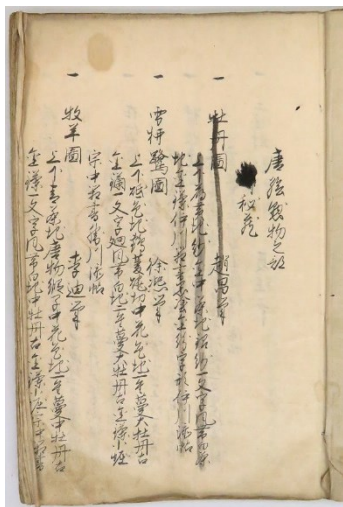


図7 「御道具帳」(乙部家文書 11-7)  
個人蔵、松江歴史館寄託

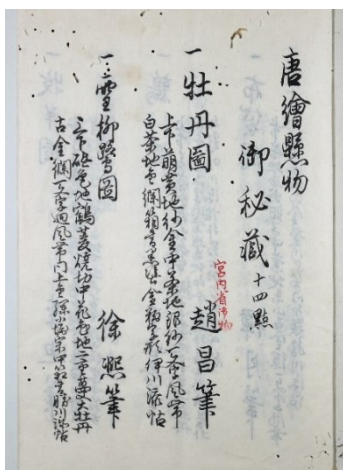


図8 「雲州乙部家蔵幅目録 完」  
島根大学附属図書館桑原文庫蔵

まず、「唐絵懸物之部」冒頭の趙昌筆《牡丹図》に添えられた「宮内省御物」という記述を元に、現在の宮内庁三の丸尚蔵館の蔵品をたどっていきますと、伝趙昌筆《牡丹図》にいきあたります(図9)。

これはその「御道具帳」冒頭にある「唐絵懸物之部」です(図7)。ここに記された中国絵画165点の中には、現在では国宝・重要文化財に指定されている、驚くような名品を数多く見出すことができます。

乙部家蔵品目録は、昭和前期まで各地で繰り返し筆写されていたことが確認できますが、こうした写本類では、「唐絵懸物之部」と「和画懸物之部」の部分のみが流布しています。

ここに示したのは明治20年代頃の写本ですが、当時の所蔵者名が朱書されているのが特徴です(図8)。

この写本と、相見の「総門雲煙集」記載の旧蔵者名を手がかりに、現存作品をいくつか追ってみます。

ただし、献上者として記録されるのは乙部家ではなく、「明治20年、井上馨より献上」とあります。<sup>ix</sup>

本図が乙部家から井上馨(1836-1915)に渡った経緯は不明ですが、周知のように、井上は徽宗皇帝筆《桃鳩図》をはじめ、いわゆる古渡りの宋元名画を数多く所蔵していたことがよく知られており、井上が《牡丹図》を入手していたとしても、全く不思議ではありません。



図9 伝趙昌筆《牡丹図》  
宮内庁三の丸尚蔵館蔵

コレクションの最上位にあったこの「王者の花」である牡丹図が、親藩家老の元を離れ、これと対峙した維新の功労者へ、さらに最終的に天皇へと献上されたことは、明治という王政復古の時代における権力と富の流転を、非常に分かりやすく象徴していると言えるでしょう。

乙部家旧蔵中国絵画を購入した明治政府の要職者は他にもいました。福岡孝弟(1835-1919)は、李迪筆《芙蓉図》(図10)と毛益筆《靈猫狗子》(図11)を購入しているのが「総門雲煙集」から確認できます。



図10 李迪筆《紅白芙蓉図》東京国立博物館蔵  
<https://webarchives.tnm.jp/imgserch/>



図11 伝毛益筆《萱草遊狗図・蜀葵遊猫図》大和文華館蔵

福岡は自身の蔵品目録（『水萍処鑑蔵目録』厚信舎、明治35年）で、これらを以下のように紹介しています（図12）。

因云乙部氏舊雲州藩老其家富於收藏最多宋元古畫世間或羨之自今有個人偽裝乙部氏舊藏以售者可不警哉	宋 李迪 宣和畫院 紅白木芙蓉圖 有款慶元丁巳李迪畫絹小對幅 毛益 乾道畫院待詔 靈貓狗子圖 無款 絹小對幅 惟是李毛兩對幅乙部氏舊藏且其撰矣予先年獲之一個人而世既有評于此畫今不復贅
--	--

図12 福岡孝弟編『水萍処鑑蔵目録』厚信舎、明治35年

国立国会図書館デジタルコレクションより

李迪 宣和画印

紅白木芙蓉図 有款慶元丁巳李迪画絹小対幅

毛益 乾道画院待詔

靈猫狗子図 無款 絹小対幅

惟是李毛兩對幅、乙部氏旧蔵、且其撰矣、予先年獲之一個人、而世既有評于此画、今不復贅、因云、乙部氏旧雲州藩老、其家富於収蔵、最多宋元古画、世間或羨之、自今有個人偽装乙部氏旧蔵以售者、可不警哉

（口語訳／この李迪・毛益の対幅は乙部氏旧蔵であり、かつその選定にかかるものである。私は先年これのある商人から得たが、既にこの絵画に対する評もあるので今また重ねることはしない。ちなみに乙部氏は旧雲州藩老であり、その家は収蔵に富み、最も多いのは宋元の古画で、世間ではこれを羨んだものだ。今後、乙部氏旧蔵と偽装し売ろうとする商人があれば用心すべきだろう。）

また、海軍への物資調達等で莫大な富を築いた薩摩出身の政商・赤星弥之助（1853-1904）にも10点が渡っていたことが、同じく「総門雲煙集」から確認できます。その1点が、こちらの馬遠筆《洞山渡水図》（図13）で、大正6年の同家売立目録『第二回赤星家所蔵品入札』に掲載されています（図14）。<sup>x</sup>

さて、以上のような名品が松江に所在していたとしても、それを果たして町人たちが実際に見ることができたのか、という疑問も当然わいてきます。最後に、明治24年（1891）

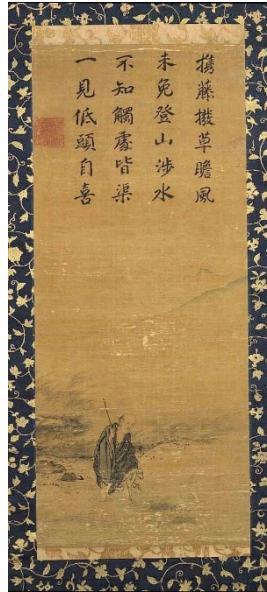


図13 馬遠筆《洞山渡水図》東京国立博物館蔵 <https://webarchives.tnm.jp/imgserch/>

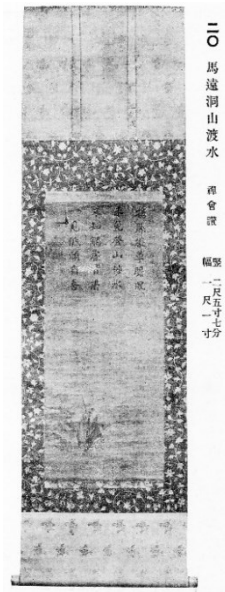


図14 『第二回赤星家所蔵品入札』図20、大正6年10月8日入札

に松江で開催された「第一回新古美術品展覧会」をご紹介します。これは白潟本町の豪商・佐藤喜八郎が中心となって発起したもので、出品総数は最終的に2536点。県下の美術品が一堂に展示され、目録6冊が刊行されました（19頁参照）。「第一回」という名称からしても、松江におけるもっとも早い展覧会と思われますが、目録からは、この時点から、松平家蔵品や、市中に散佚した乙部家旧蔵品が出品されているのを確認することができます。

つまり、単に作品がその場に所在していた、というだけでなく、互いの蔵品を公開し鑑賞しあう「展覧会」という近代的なシステムが松江にも新たに登場してきた、ということこそ、重要な要素だったと考えられるのです。

### むすびに—ピラミッドの頂点と相見香雨のあいだ

まとめとして、概念図をつくってみました（図15）。19世紀の松江において、美術文化のピラミッドの頂点は不味

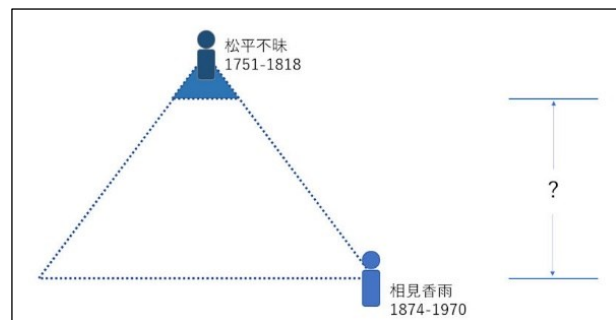


図15 概念図①



公であったと言えますが、これと 20 世紀に登場してくる相見香雨という美術史家とのあいだは、これまでほとんど見えていなかったと思います。

しかし、そのあいだには、家老や上級武家、御用商人など様々な階層の者がおり、密接に関わり合いながら、20 世紀の相見香雨へ文化を伝えていた、ということが見えてきたように思います（図 16）。

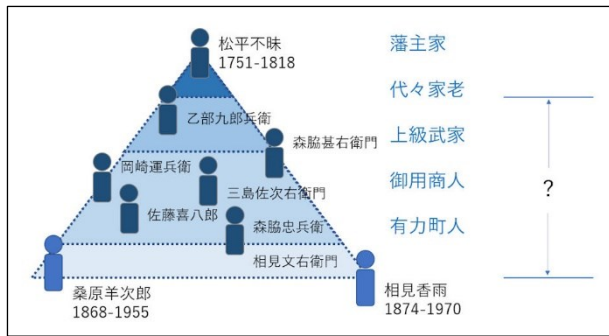


図 16 概念図②

まさしく相見は、松江から生まれるべくして生まれた在野の美術史家であった、と言えるでしょう。

今日的な意味での松江の地域美術史研究は、まだ始まったばかりと言えますが、今後も丁寧に史料を発掘してまいりたいと思います。以上で報告を終わります。ご清聴ありがとうございました。

<sup>i</sup> 稲塚和右衛門 1936『復刻木実方秘伝書 雲藩櫨樹植林製蠟手記』アチックミュージアム

<sup>ii</sup> 広瀬旭荘著、卜部忠治・今岡堅一訳 1999『百四十五年前のわが町わが村—広瀬旭荘の山陰紀行—』出雲市教育委員会

<sup>iii</sup> 平田市誌編さん委員会編 1969『平田市誌』平田市教育委員会

<sup>iv</sup> 小林准士 2014『松江城下の町人と能楽』今井印刷株式会社、および小林准士校訂 2016『御囃子日記』野上記念法政大学能楽研究所

<sup>v</sup> 山陰中央新報社（森みずき）2020「相見香雨の功績知って 没後 50 年企画 研究者が計画」『山陰中央新報』2020 年 11 月 18 日記事、村角紀子 2020「相見香雨のルーツ 松江の地域文化」『山陰中央新報』2020 年 11 月 24 日（文化欄寄稿）

<sup>vi</sup> 那須寛正編刊 2014『出雲・隠岐両国古札図録』

<sup>vii</sup> 三井記念美術館・島根県立美術館・NHK プロモーション編 2018『没後 200 年 大名茶人・松平不昧』展図録、NHK プロモーション

<sup>viii</sup> 島根県立図書館郷土資料編 2004-2006『松江藩列士録』全 6 巻、島根県立図書館

<sup>ix</sup> 宮内庁三の丸尚蔵館編刊 2003『雅・美・巧 所蔵名品三〇〇選』

<sup>x</sup> 乙部家の中国絵画コレクションの全体像については、村角紀子 2021「松江藩家老・乙部九郎兵衛の中国絵画コレクションと相見香雨—乙部家「御道具帳」と本屋平蔵「覚」—」『松江市歴史叢書』14 号、松江市に別途詳述した。

## 近代松江における漢詩文化

要木 純一（島根大学法文学部教授）

私は、中国文学専門で、たまたま縁あって、松江の明治初期の漢詩について調査研究をしております。相見香雨の父、相見淞雨という人が、この時期の松江で漢詩、篆刻等、文芸上の重要人物であったので、この講演を依頼されたのですが、淞雨についてはすでに村角さんが調べておられますし、香雨が、この父の教育のもと、どのような青少年時代を過ごしたか、を語ることができればいいのですが、あいにく、そのような回想はほとんど残っていない。雨森精翁から漢詩を作る際の正式な名前もつけてもらっており（「相見淞雨碑」には「守時」とあり）、香雨も漢詩文の素養があったはずで、漢詩も作ろうと思えば作れたはずですが、それも残っていない。というわけで、落ち穂拾いのようなことをして、お茶を濁させてもらいます。

### 1. 全国でも有数の漢詩創作の中心地・松江

江戸時代、米の生産に加えて、鉱山、森林の開発や、北前船と呼ばれる海運の発達などにより、松江は日本海側の経済中心地の一つとなったのですが、維新後の松江でも、その興隆は続き、日本の都市で、人口トップテンに入るような町であったことは、よく言われているところです。その松江が幕末から明治にかけて、全国でも有数の漢詩創作の中心地であったことは、考えてみれば当たり前のことで、その具体的な事例を、ここ数年、私は紹介してきました。松江には、漢詩に限らず、広く文化に興味をもつ知識人（武士、商人、僧侶）が多かった。そのような環境の中で、香雨が、育ったことが、彼の学問のバックボーンにあるであろうことは、まちがいないでしょう。

#### ・雨森精翁、河野天鱗、内村鱸香の指導

漢学、漢詩文の方では、幕末すでに全国にその名をとどろかしていた、雨森精翁、河野天鱗、内村鱸香といった人が、塾を開いたりして、後進の指導にあたりました。松江も明治十年代から出版が盛んになりましたが、彼ら本人及び弟子達の漢詩を集めた本が次々と出版されました。私のただいまの仕事は、それらをできるだけ翻刻し、必要な注釈を加えて、後世に残すことが中心です。その中から、相見淞雨の作品を取り上げましょう。

#### ・相見淞雨の作品

まずは、香雨のお父さんの、相見淞雨の作品について。当時、松江で出版された『風月小誌』という、漢詩・和歌の文芸誌に載っているものです（要木純一 2015『明治期の松江と漢詩—明治初期の出雲漢詩壇』）。

##### 春夜観梅

相見淞雨

香雪霏霏夜洒袍  
満身清気勸春醪  
忽然呼快人抛盞  
月出梅花三尺高

香雪霏霏として夜袍に洒ぎ

満身の清気春醪を勧む

忽然として快しと呼んで人盞を抛つ

月梅花より出ること三尺の高さなり

まあ、酒を飲みながら、梅の花を觀賞する、よくあるパターンの漢詩ですが、転句の人を驚かす、印象的な表現、そして、その謎の理由である結句の、絵画的な描写、淞雨は漢詩の方は得意でなかったと言われていますが、成功しているかどうかはともかく、少なくとも、これまでなされなかった表現をめざす、並々ならぬ意欲が感じられます。

#### ・入手した清朝絵画を詠んだ詩（平賀静遠）

香雨の、美術に対する審美眼を養ったものとして、当時の松江の知識人達の、絵画に対する関心の深さがあると思われれます。このことに関して、詩を一首紹介しましょう。今では忘れられていますが、明治初期、出雲の漢詩壇で活躍した人に、平賀静遠がいました。松江藩の家老の一人（家老並、仕置添役）ですが、隠岐騒動の責任を取らされ、幽閉蟄居。明治になって解放されてからは、ひたすら詩にのめり込んだ人です。その人が、おそらく明治十年代、同時代清朝の絵画を手に入れ、喜んで詠んだ詩があります（要木前掲書）。

獲清人張庚水墨山水幅喜而有作

隔水青山鬱崩男  
一片行雲逐飛翼  
烟鎖樓閣有又無  
毫端變化妙無極  
誰居画之張瓜田  
秀韻堪看稽古力  
君不見世間多少丹青家  
胸書無卷浪弄墨

清人張庚水墨山水幅を獲たり喜びて而して作有り  
墨水を隔つる青山鬱として崩男たり  
一片の行雲飛翼を逐う  
烟樓閣を鎖ざして有りて又無し  
毫端の変化妙たること極り無し  
誰か（居）之を画く張瓜田  
秀韻看るに堪えたり稽古の力  
君見ずや世間多少の丹青家  
胸書卷無く浪りに墨を弄するを

張庚は、清朝の画家、美術評論家として著名な人ですが、この絵がどんな絵か、今もどこかに残っているかよく知りません。ただ、大切なことは、長崎や東京、大阪、京都以外にも、同時代の中国絵画に興味を持ち、本物か偽物か知りませんが、とにかく入手している人が松江にいたということです（他の地方も同様なのか、浅学な私には分かりませんが）。そして、絵画をものするには、古典特に漢詩文をたくさん学ばなければだめだということが共通認識として、あったらこうということです。「君見ずや世間多少の丹青家（画家）、胸書卷無く浪りに墨を弄するを」。松江は現在に至るまで、立身出世には何の役にも立たない、学問や芸術を愛する気風が続いているのは素晴らしいことで、この環境があったからこそ、香雨が生まれたのではないかと思います。私の故郷の山口などは、貧乏だったためか、実学志向が強く、松江が本当にうらやましくなります。松江は、香雨に限らず、今に至るまで、学者、芸術家が輩出しているのは、驚くべきことです。香雨の専門の日本絵画についても、名品に触れる機会が多かったろうし、何よりも、絵画論、文学論が活発に知識人の間で取り交わされ、それを耳学問にして、香雨、芸術観を育てていったのではないかと推測します。

## 2. 出版文化

このように、芸術を愛好する知識人の需要に応じて、明治初期の松江はかなり出版文化が発達していたように見受けられます。それも、実学的なもの、西洋の知識よりも、漢詩のような、文学関係の出版物が多いのが特徴です。

その出版物には、多く、挿絵も入っている。それを画いたのも、松江の画家達です。私には、絵の善し悪しはわかりませんが、少なくとも、新時代にあつて、個性的な表現を目指したらしいように見受けられます。

### ・『出雲名勝摘要』一妹尾春江の名所図絵

二つほど、紹介しましょう。まず、出雲地方の名所案内に、漢詩・和歌・俳諧を附した『出雲名勝摘要』（星野文淑編、明治14年）。妹尾春江という人の挿絵（図1）。この人、他の本でも挿絵を描いています。この本には、当時の南画家の第一人者、田能村直入の漢詩が載っています（図2）。この田能村直入の松江訪問に関しては、後ほど触れます。



図1 妹尾春江挿絵「鬼の舌震」  
星野文淑編『出雲名勝摘要』明治14年 島根大学附属図書館蔵

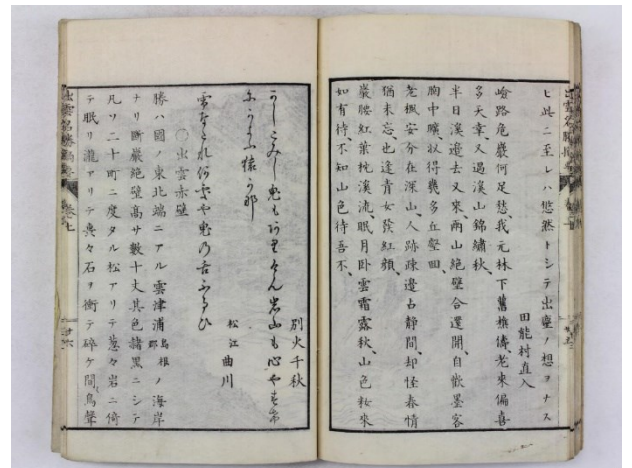


図2 田能村直入漢詩、同前書



### ・『出雲小羅浮』一天野漱石の挿絵

もう一つは、梅の詩の唱和集『出雲小羅浮』（一年舎、明治15年）。天野漱石という、郷土美術史では割合有名な人のようですが、梅の絵の挿絵を描いています。『出雲小羅浮』は、先ほどあげた、全国的に有名な松江の詩僧、河野天鱗の梅の詩に、雨森精翁らが、唱和したものです。

### 3. 文人の松江訪問

江戸時代からそうでしたが、松江及び出雲地域の学芸の発展や景物の素晴らしさは、知る人ぞ知るものであって、文人達は、誘いがあれば、喜んで訪れます。毎年、一度はそのような全国的に著名な文人達が松江を長期訪問し、それが新聞記事や報告で町中に知らされます。松江の人たちにとって、これらの訪問は、一大イベントであり、お祭りのようなもの。その記憶は後々まで残ります。もちろん、京都、東京、大坂、名古屋は、毎日のように、文人達が作品を発表して、交流も活発だったでしょう。でも、あまりに当たり前になって、ありがたみが少ない。文人達の一挙手一投足が話題となり、模倣されるような、そんな地方における熱気はなかったと思います。まして、西洋文化に対する関心が強く、都市民の伝統的学芸への興味は薄れていきました。当時の見方では、「遅れた」地方にこそ、伝統学芸は、活躍の場を見だし、明治になってからも一層発展することになるのです。松江でむしろ明治以後に、漢詩が発展したのも、そういう事情があったにちがいない。文化に触れる機会が乏しいからこそ、文化に対する興味がいや募り、一つの作品について、何回も議論し、反芻し、自らの芸術観を着実にじっくりと進展させてきたのです。

### ・清朝文人の松江来訪

松江を訪問する文人には、中国当時の清朝の文人達もいました。葉松石、胡鉄梅、衛鏄生と行った人たちです。彼らは、淞雨とも交流があり、淞雨の篆刻集に序を寄せています。中国での評価は今ひとつで、中国の文化、美術史では、あまり、名が上がる人ではありません。鎖国が解け、同時代人の中国の文人が日本内地にやってきた物珍しさもあったでしょう。でも、まあ、その影響力たるや、とくに松江では大きく、来訪に関する、新聞記事・新聞広告は、大きく掲載され、地元の知識人達と唱和した詩も、『山陰新聞』に載っています。当時の松江の中国文化に対する関心の深さ（平賀静遠が、清朝の絵画を購入して詩を詠むような）がうかがえます。

### ・田能村直入の山陰旅行

もちろん、日本の漢詩人、日本画家達も、松江で歓迎を受けています。揮毫を求められたり、自分の本や絵を書店で売ってもらったり、結構商売になったんじゃないでしょうか。都会では、西洋文化や新文化への傾斜が強くなって、段々見向きもされなくなったのに対して、伝統文化愛好家が根強く残る地方を回ることは、観光の楽しみも兼ねて、彼らの余生を豊かにしたことだろうと思います。

その一人に、先ほど、言及した田能村直入がいます。田能村竹田の養子で、京都で南面の学校の校長になり、明治期の伝統絵画界を先導したといつてよい文人画家ですが、毀誉褒貶も激しい人でした。

彼は画学校の校長になる前に、山陰に二度にわたって旅行しています。当時の大地主、富豪絲原家等の援助があったといえます。松江、出雲の人も、大いに歓迎して、当時の松江の美術、文化に与えた影響は多大であったそうで、今も直入の作品が、そこかしこに残っているそうです。その中には偽物や模倣作も多いそうですが、模倣を含めて、影響が大きいということは言えそうです。ただ、歓迎一方ではなく、批判する向きもあった。これが大切で、一つの文化現象に対して、賛否含めて、多くの人が噂話や議論に花咲かせるような、そういう環境だったということです。その中心になったのが、漢詩を作れるような、知識人達であり、その中の一人として、淞雨もあり、青少年の香雨もあったのでしょう。

絵画は、古典や漢学の教養に裏打ちされたものでなければならぬ。それが、田能村直入にはない、という批判もされました。明治中期に松江では、剪淞吟社という漢詩結社が作られ、松江は、全国でも有数の漢詩創作が盛んな土地になったのですが、その結社の大正時代に編まれた機関誌『剪淞詩文』で、懐古談として、田能村直入の松江訪問に関する逸事を引いております。

明治十二年秋、田能村直入遊華蔵寺、賦二絶句、示桂洲上人。上人直把筆改数字、且曰「子今以海内画伯自任、而詩之拙如此。有何面目見乃父于地下哉」。因諄諄訓戒。時深秋霜氣逼肌、擁一小爐对坐。及四更、直入愧謝。留三葉而去。上人以二葉与人、曰「我豈忍留若輩之俗筆、汚名利哉。特存一葉者、欲以警来者爾」。今日耳食之徒、不辨皂白、争擲千金購直入画、為可笑也。

（『剪淞詩文』第2号附録「咳唾餘珠」、大正6年）

明治十二年秋、田能村直入華蔵寺に遊び、二絶句を賦して、桂洲上人に示す。上人は直ちに筆を把って数字を改め、且つ曰く「子は今海内の画伯を以て自ら任ずるも、而して詩之拙なること此くの如し。何の面目有りてか乃の父に地下に見えん哉」。因りて諄諄として訓戒す。時に深秋霜気肌に逼る、一小爐を擁して対坐す。四更に及び、直入愧謝す。三葉を留めて去る。上人二葉を以て人に与えて曰く「我豈に忍んで若（かくのごと）き輩の俗筆を留め、名利を汚さん哉。特に一葉を存する者は、以て来者を警しむることを欲する爾」。今日耳食之徒、皂白を辨ぜず、争いて千金を擲つて直入の画を購うは、笑う可しと為す也。

田能村直入が、松江枕木山の華蔵寺の和尚に、差し出した漢詩の出来をけちよんけちよんにやっつけられる話ですが、この話が本当かどうかは、問題ではない。大切なのは、この話が40年後の大正年間でも、話頭にのぼるということで、たとえフェイクニュースであろうと、一つの事件を松江の知識人が何遍も何遍も反芻し、議論したであろうということがうかがえるということです。そして、美術の価値も漢学的教養があるかどうかが大切だったということです。職人の芸術ではなく、文人の芸術が評価されるのです。このような話、ひょっとしたら、青少年の香雨の耳に入っていたのではないかと私は夢想します。

#### 4. 『剪淞詩文』に記載された明治初期松江の逸事

##### ・中村鷺山、森脇松陵に関する記述

相見淞雨とならんで、篆刻に優れていた中村鷺山、森脇松陵に関する記述も、『剪淞詩文』第1号附録「咳唾餘珠」に載っているのを、たまたま見つけましたので、ご紹介しましょう。

中村鷺山、出雲国八束郡法吉村人、名準、字士繩、通称準一郎。又白鹿山下人。自小学教員、進為八束郡視学、後為島根県属、任農商課長。明治三十五年、病歿、年五十。為人寛厚謹嚴、学該和漢、善詩文、殊妙于篆刻。篆刻学森脇松陵、有出藍之称。与中井敬所輩訂交、為其所推。重又工狂詩。試举之。其一云、一年一年又一年、千年万年万万年。年年年来年年去、去年年来是今年。其二云、春夏秋冬雨 東西南北風。看他天地氣、万国古今同。其警拔往往如此。森脇松陵、松江人。学篆刻于羽倉可亭、有名。又善詩。与劉石秋友

善。松陵子淞雨、出嗣相見氏。亦善篆刻。然松陵臨終、授印刀于鷺山而瞑。蓋有所見也。淞雨頗以為憾。後發憤勵精。其技大進。適清人胡鉄梅來松江曰、此地可驚嘆者三、曰松江風景、曰僧天鱗詩、曰淞雨篆刻、乃磨所携印、囑淞雨刻焉。

淞雨に関係のある後半の部分だけ訓読します。

…森脇松陵は、松江の人。篆刻を羽倉可亭に学んで、名有り。又詩に善し。劉石秋と友善たり。松陵の子の淞雨、出でて相見氏を嗣ぐ。亦た篆刻に善し。然るに松陵終に臨んで、印刀を鷺山に授けて瞑す。蓋し見る所有る也。淞雨頗る以て憾みと為す。後に発憤して励精し、其の技大いに進む。適ま清人の胡鉄梅松江に來りて曰く、「此の地に驚嘆す可き者三、曰く、松江の風景、曰く、僧天鱗の詩、曰く、淞雨の篆刻」。乃ち携うる所の印を磨き、淞雨に囑して焉に刻ましむ。

淞雨没後、その墓碑銘を書くことになる、篆刻のライバル中村鷺山は、淞雨の実父森脇松陵の後継者になった。これを遺憾に思った淞雨が発憤した、そして、本場の清人胡鉄梅に褒められるほどになった。金儲けや立身出世に関わらない、芸術に切磋琢磨する当時の松江の知識人達、彼らの活発な文化活動がしのばれます。

##### ・松田淞雨に関する逸事

この記事に続く記事。

相見淞雨与松田淞雨同号。松田曾謂相見曰「君須改淞雨作湘雨」。相見問何故。松田曰「予姓為松田、故号亦宜淞字。君姓為相見、其用湘字当然耳。相見唾然。

相見淞雨は松田淞雨と号を同じうす。松田曾て相見に謂いて曰く「君須く淞雨を改めて湘雨と作すべし」。相見何の故なるかを問う。松田曰く「予は姓松田為り、故に号も亦た宜しく淞の字たるべし。君は姓相見為り、其の湘字を用いるは当然なる耳」。相見唾然たり。

松田淞雨、全国的に名をしられた漢詩人です。のちに中国紀行詩集を出版して、さらに有名になりました。その松田淞雨が先輩の相見淞雨に対して、(紛らわしいので)号を相見の「相」に合わせて、湘南の湘の「湘雨」にかえろと

いう。この、お互いに冗談が言えるような、自由闊達な雰囲気、明治初期の松江にはあったんだと思います。頑迷固陋な伝統文化墨守というのは、ちょっと違うんです。

相見淞雨の篆刻集に寄せられた序には「相見湘雨」となっているものがあります(図3)。単なる間違いか、それにしても失礼なとか、思っていたんですが、今思うに、どうも、松田淞雨の意見を取り入れて、自ら「湘雨」と号を変えた時期があったのではないかと。つまらんことですが。もしもそうならば、相見淞雨の融通無碍な人となりによるのではないかと。香雨にとって、少なくとも頑固親父ではなかった。芸術的、ユーモアに富んだ父親で、香雨もそれに感化されたのでは、とこれまた、妄想しております。

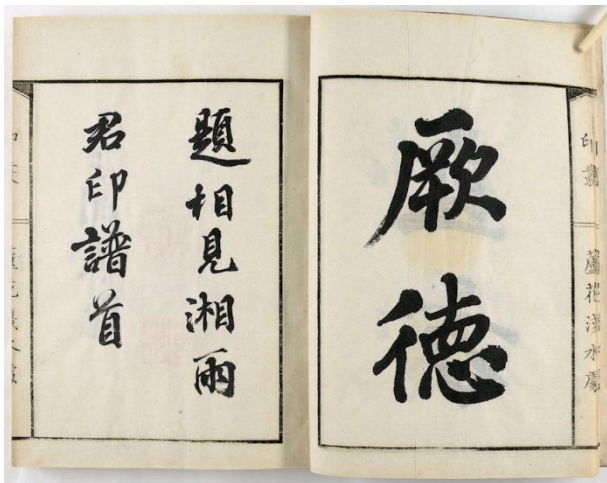


図3 長三州序に記された「相見湘雨」  
相見淞雨『蘆花浅水処印叢』明治24年(1891)  
九州大学中央図書館蔵

本当にとりとめない話になりました。相見香雨が育った明治初期の松江の文化的環境について、少しでもお役に立てれば、と思いました。今回のシンポジウムをきっかけに、相見香雨の評論、日本美術、少しずつ勉強していこうと思います。そうして、また、松江の文化史を見直してみたいと思います。ご清聴ありがとうございました。



# 日本の近世美術史における相見香雨の業績と現代的意義

玉蟲 敏子（武蔵野美術大学造形学部教授）

はじめに一忘れられた美術史家—

相見香雨（1874～1970）は、故・中野三敏氏によれば「事実に基づくことと文献資料を縦横に駆使する事を最大の特色とする」<sup>(1)</sup> 実証的な方法によって、近世美術史研究に偉大な業績を残した巨人です。美術史家としての活動は明治末より始まり、関東大震災や第二次世界大戦などの未曾有の惨事を経験したのち、昭和30年代までの長きにわたって旺盛に執筆を繰り返しました。高度経済成長期をむかえる昭和30年代半ば、すなわち1960年代以降、日本の美術書は文章よりもカラー図版に主を置く豪華な美術全集や高価な大型本の出版が隆盛していきませんが、老境に達した相見はもはやそのような流れに掉さすことはなく、昭和45年（1970）に96歳で没して以後は次第に〈忘れられた美術史家〉となっていきました。

相見が復権してくるのは、昭和60年から平成10年（1985～98）にかけて中野三敏・菊竹淳一編『相見香雨集』全5巻が『日本書誌学大系45-(1)～(5)』として青裳堂書店から刊行され、業績の全貌が明らかになってからです。近世の美術、文学、出版にまたがるその幅広い仕事内容から、現代的に言うところ境界領域研究の先駆者ということになるのかもしれませんが。

発表者は、卒業論文のテーマに選んだ酒井抱一研究の一環から、昭和51、52年（1976、77）頃より相見香雨の論考に親しく接してきました。最初にひもといいたのは代表作の「抱一上人年譜稿」で、相見の跡を追って早速に世田谷区

岡本の静嘉堂文庫まで抱一著「軽拳館句藻」の閲覧に赴くなどしています。

ここに掲げたのは「軽拳館句藻」の「千つかの稲」冊の表紙です。図1は近年、全貌が明らかになった九州大学中央図書館所蔵「相見香雨自筆調査録」（22頁参照。以下、「自筆調査録」とする）第11帙第4冊（以下、11-4と記述）に所収される昭和2年9月25日の条。図2は昭和52年10月半ばに閲覧させていただいた際の私の自筆ノートです。二つの図の間には50年近い年月の隔りがありますが、同じ閲覧室で同じ資料を前にして、相見と同じように表紙を書写していた自分自身に驚かされ、相見の存在がぐっと近くなるとともに奇しき因縁を感じました。

本発表では、相見の研究の美術史上における意義を二つの方向から読み解き、その現代性について問い直していきたいと考えます。

## （一）相見における近世絵画研究の歩みと特色

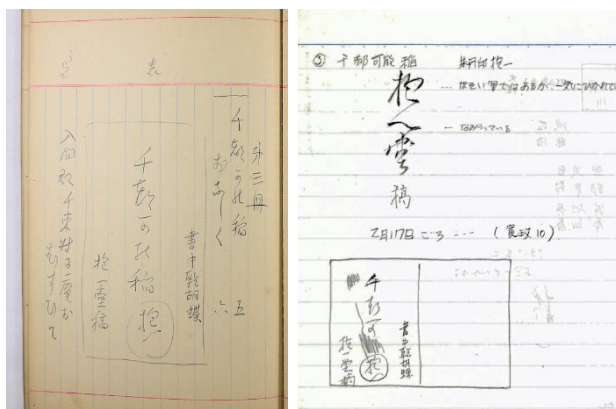
『相見香雨集』は以下のように構成されています。

『相見香雨集』一	琳派	1985年刊
『 』二	南画	1986年刊
『 』三	水墨画・大和絵	1992年刊
『 』四	浮世絵・その他	1996年刊
『 』五	罹災美術品目録	1998年刊

これらは分野別に編集されていますので、その研究の歩みを知るには、今回の村角紀子さんの労作になる著作目録（24-27頁）を参照して編年的に読み直す必要があります。

最初の論文は『相見香雨集』三に所収される「狩野諸家瑣談（其一）」『美術之日本』1-6（1909年10月）で、相見繁一の名で執筆されています。『東洋美術大観』の解説のため日本絵画史資料を蒐集した際に中橋狩野家で見出した「狩野家跡目守立の血判誓書」についての考察です。「自筆調査録」1-1巻頭にも明治42年（1909）8月の中橋狩野家での調査が記録されており、このことが裏付けられます。

一般に『東洋美術大観』第5冊（審美書院、1909年）は狩野派を含む近世の諸派の資／史料が大変に充実していることで知られています。名前が出ていないので今まで



左) 図1「相見香雨自筆調査録」11-4 昭和2年9月25日  
九州大学中央図書館蔵

右) 図2 玉蟲調査ノート 昭和52年10月

認識していませんでしたが、松江の地方紙、『松陽新報』の編集長だった相見は、審美書院主幹の田島志一にスカウトされて、明治41年頃から『東洋美術大観』の編集業務に携わるようになります。ですので、背後で相見が資料蒐集にあずかっていた可能性が高いのです。私たち近世絵画研究者は、知らずしてその掌のうちにあって相見から大いなる恩恵を受けていたのかもしれない。

さて、明治末期から大正にかけての動きをみていくと、前述の『東洋美術大観』に続き、『群芳清玩』『雲州余彩』などの大型の美術全集の編集に携わっています。そのいっぽうで、個人名による執筆も活発になり、大正5年(1916)に初めて「香雨」の筆名が使用されました。父の雅号の「淞雨」に倣っていますが出典は明らかではありません。美術雑誌に掲載された原稿が大部分を占めるものの、官学系の学術雑誌の『國華』に個人名の論考がないことが注目されます。

光琳関係の論考では大正4年7月に発表された「小形光琳並に尾形家の事」『書画骨董雑誌』85がごく初期のもので、これは同年の光琳二百年忌に合わせて発表されていますが、実際のところ調査は、遡って明治31、32年頃に先達の川崎千虎を訪問するところから始まっており、大正2年10月24日には妙顕寺泉妙院において光琳や尾形家の墓石の調査をしています(図3)。

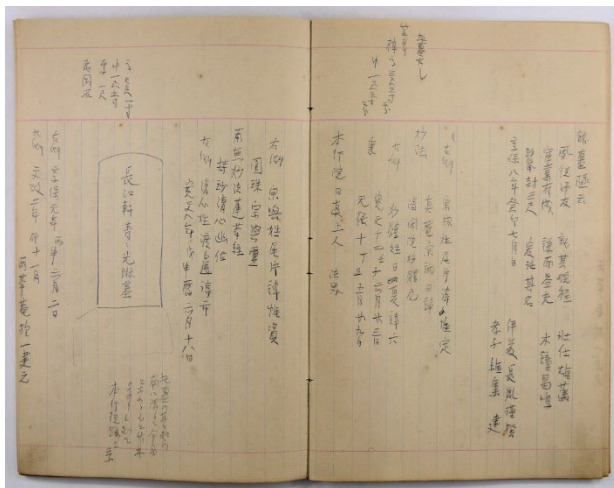


図3「自筆調査録」1-5 妙顕寺泉妙院 大正2年10月24日

泉妙院の住職から遺族の小西得太郎を知り、翌3年に小西家に伝来した光琳関係資料を調査。そして同4年の論考発表へと繋がっていきました。要するに世の動きに軽く迎合するのではなく距離をもっていたことがわかるのです。

相見の論考の特徴は、理論を用いた演繹的な論文ではなく、資／史料に基づいた実証的な論考であることです。し

たがって一編の文章量は少ないですが、ぴりっと要所をつけて簡潔です。さらに特徴的なのは、取材 → 資料収集 → 記録 → 整理 → 考証 → 報告 という独自の方法によっていることです。聞き取り取材が出発点で、資料について所蔵者、応対者、居住地、作品名、付属品、伝来、逸話、表具などあらゆる情報を収集します。この光琳資料に関する論考はそうした相見の方法が確立したことを示す典型例なのです。

いっぽう、同年には官学派の光琳研究者である福井利吉郎の「光琳考」がその母校の京都帝国大学文科大学の学術雑誌『芸文』に三回に分けて発表されます。同じく小西家伝来の資料を用いた論考でしたが、福井は相見のほうがやや先んじていたことに気づき、「光琳考(三)」の末尾に釈明文を添えています。福井の光琳論の特徴は相見と好対照に、イギリスの遺伝学者のフランシス・ゴールトンが提唱した優良種族学、すなわち現在の優生学(eugenics)を用いて、ドイツの大詩人のゲーテの家になぞらえ、天才を輩出する家系としての尾形家を称揚しています。この一件があつてか在野の相見と官学派の福井の研究交流は長く続き、その連携プレーによって数々の新事実を発掘していきます。そのことはまたのちに触れることにしましょう。

相見の研究のもう一方の重要な柱である南画研究、さらに画譜・絵本へ関心が芽生えてきたのもこの時期です。明末の文人画家、蕭雲從の『太平山水図』に着目し、大正9年には「蕭尺木太平三山図に就て(大雅研究の一節)」『美術画報』519を発表しています。相見の最初の単行書は大正5年の『美術叢書 池大雅』ですので、これは大雅の中国画譜学習の問題を発展させたものだったといえます。

次に大正末から第二次世界大戦前までの動きを見ていくことにします。この時期は研究者としての高揚期ともいえる時期で、二つの重要な著作が発表されました。第一は大正12年9月1日に東京および近隣地域を襲った関東大震災の罹災美術品調査の詳細な報告です。昭和8年に國華倶楽部から『罹災美術品目録』として公刊され、私もたびたび参照している現在でも有益な著作です。「自筆調査録」では7-2の大正12年12月の条から名家、社寺等の罹災状況が克明に記録されるようになり、翌年以降も続きます。

例えば甚大な被害のあった岩崎小彌太の深川別邸には大正13年1月13日に訪問し、ブリンクリー旧蔵の陶磁器を収めた陳列館、温室、玉突き場の無事を確認しています。この陶磁器類は現在も静嘉堂文庫美術館に所蔵されています<sup>(2)</sup>。いっぽう、光琳筆「松島図屏風」や住吉具慶筆



「源平八島図屏風」については「高輪 無歎」と書かれ、高輪邸(現在の開東園)から借り出されていたらしいこと、安否不明なことが記されています。残念ですが両屏風とも現在は伝わらず、焼失してしまった模様です。

また大正 13 年 3 月 24 日には、谷文晁および谷家の菩提寺の東上野の源空寺を訪ね、被害状況について数頁を費やして詳細に記録しています(図 4)。地震そのものの倒

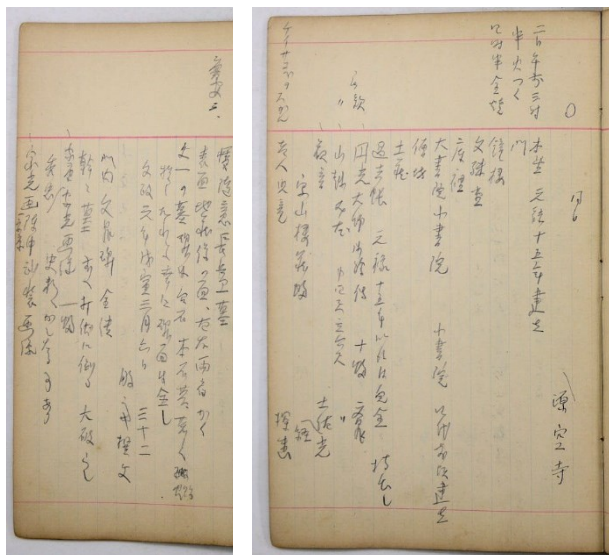


図 4 「自筆調査録」7-4 源空寺の被害調査 大正 13 年 3 月 24 日  
壊被害もさることながら、9 月 2 日の午前 3 時半に火が点き、4 時半に全焼したという火災の様子も生々しくノートの上部に書き留めています。『罹災美術品目録』にはこのような聞き書き情報は割愛されており、まさに「自筆調査録」はドキュメントとしての価値を有しているのです。他の箇所も含めて文化財の震災記録としても貴重なのではないのでしょうか。



左) 図 5 谷幹々墓の現状 源空寺 撮影：多田文夫



右) 図 6 有りし日の谷文一墓 『美術之日本』2-8

源空寺の本堂に設置されていたという文晁筆の「摘茶から喫茶迄」を描いた襖絵は「無歎」、境内にあった文晁妻の幹々の墓は前に倒れて大破したらしく、養嗣子の文一の墓は悉く破損したが幸いに碑面は「全し」であったと伝えられています。

図 5 は多田文夫氏の調査による大破した幹々墓の現状ですが、なるほど大きな破片のブロックをつないだ痛ましい状態です<sup>(3)</sup>。碑面は無事であったという文一墓は伝存せず、図 6 に掲げたのは『美術之日本』2-8(審美書院、1910 年 8 月)に掲載された写真で、その早世を悲しんだ文晁が作ったという立派な墓を確認することができます。むろん、本堂は全焼したので、文晁の襖絵は跡形もありません。

さて、この時期の重要な仕事の第二は、「抱一上人年譜稿」『日本美術協会報告』第 6 輯(1927 年 12 月)です。『相見香雨集』の編者の一人、中野三敏氏が最初に衝撃を受けたのもこの著作であったことを告白しています。昭和 2 年(1927)は酒井抱一の没後百年に当たり、日本美術協会では展覧会を企画し、併せて抱一関係の研究をその報告集に載せたのでした。相見は当時、日本美術協会の嘱託でしたから、精力的に抱一の伝記研究に励みました。論考を支える資料調査のあらまは昭和 2 年 6 月~10 月にかけての「自筆調査録」11-1~5、12-1 の 6 冊によって詳しくたどることができます。「抱一上人年譜稿」については次章で集中的に分析しますので、ここでは先を急ぐことにしたいと思います。

この時期はまた小栗宗湛、海北友松・海北派、山本素軒、京狩野、小川破笠、池大雅、長澤蘆雪、谷文晁、渡辺華山らの画家たちについての論考も盛んに執筆されています。これらは概ね『相見香雨集』三、四に所収されています。多数の論考のなかで特に取り上げたいのは、昭和 10 年(1935)に発表された「牧谿玉潤伝新史料一元人吳太素「松齋梅譜」に就いて一」「松齋梅譜」に就ての追記」『日本美術協会報告』36 であります。中国・南宋の禅僧画家、牧谿は中世の日本においてもっとも親しまれ、影響力の大きかった画家ですが、その牧谿評価における重要資料、吳太素撰「松齋梅譜」について考察した論考です。ことの次第は以下のような連携プレーによるものでした<sup>(4)</sup>。

まず、福井利吉郎が「松齋梅譜」の断片を発見し、相見に照会する → 相見は富岡鉄斎旧蔵の「松齋梅譜」を見出し、資料の全貌の明らかにして論考を発表する → すると福井は別の写本を発見し展示する → 最終的に島田修二郎が世界中を調査対象にして現存伝本の関係を解明し、



「松斎梅譜」は「中国にはなく、日本にのみ伝存する」と結論づける。相見は在野にしながら、官学系の福井、島田と堂々と渡り合い、しかも在野ならばの存在感を発揮しているのです。

近代における美術史学の発展はけっして象牙の塔に住まうアカデミズムによってのみ担われたのではなく、相見のキャリアが示すように、一般社会で活躍するジャーナリスト、編集者などによっても担われてきたのでした。相見の存在はそのことを強く、そして深く主張しているのです。現代においてはさらに、アカデミズムと社会を結びつける美術館・博物館学芸員の存在が付け加わっていきます。美術に携わるこれらの人々の役割なくしては学問の発展はおぼつかない—そのことを発表者は相見の足跡をとおして教えられたように思います。

続いて第二次世界大戦後の動きをみていくことにしましょう。昭和27年(1952)78歳で矢代幸雄の推薦により、文化財保護委員会美術工芸部門専門審議会委員に就任します。そして、昭和36年(1961)11月、87歳で紫綬褒章と勲四等旭日小綬章を受章します。相見の業績がようやく社会的に認められたのです。高齢に達したこの時期においても相見の健筆はますます冴え、戦前から従事していた画譜・絵本研究のヒット作を連発します。現在でも取り上げられることの多い「宗達の仙仏画と「仙仏奇跡」』『大和文華』8は昭和27年(1952)に、現在ブームに沸く伊藤若冲の版画に焦点を当てた「若冲の拓版画」『芸術新潮』6-9は昭和30年(1955)に発表されています。個人的には『鳴羽搔』という名数和歌絵本の存在を教えられた「乾山十二ヶ月花鳥歌絵」『大和文華』21も忘れ難い論考で、昭和31年(1956)に発表されています。晩年の相見の関心は光琳や抱一よりも光悦、宗達、乾山のほうに移っていた感じがいたします。

また相見の方法の一つである墓所調査も、昭和34年(1959)に刊行された「深江芦舟の墳墓発見をめぐる」『大和文華』31によって見事な成果を实らせました。これは正体不明だった光琳の弟子の深江芦舟が、聞き取りによる耳と墓所探索の足によって浮彫にされていくスリリングな論考でもあります。俵屋宗達と尾形光琳の接点となる「風神雷神図屏風」の伝来を探った昭和35年(1960)刊行の「宗達風雷神と妙光寺」『萌春』81も、有益な伝来情報として現役です。

相見の最終論考は、著作目録によれば昭和42年(1967)刊行の「光悦書画卷の断簡について」『古美術 [三彩社]』

16ですが、何と93歳の執筆でした。発表時間の都合と散漫になるのを避けるために取り上げなかった論考もいくつか散見されますが、以上により60年近くにおよぶ相見の研究の歩みのポイントは押えられたのではないでしょう

## (二) 美術史から見た「抱一上人年譜稿」の意義

ここで、相見の代表作の「抱一上人年譜稿」(以下の本文では「年譜稿」とする)について考察していくことにしましょう。

日本美術史における作家研究の正統的方法といえば、美術研究所(現在の東京文化財研究所)所長の矢代幸雄が提唱した「東洋美術総合目録」が筆頭に挙げられるでしょう。これは美術史上の主要作家に関する文献史料と作品資料を厳密に集成する事業で、その輝かしい成果は夭逝した渡辺一の論考を集成した『東山時代水墨画の研究』(座右宝刊会、1948年)から窺うことができます。

いっぽう、相見の抱一論は酒井家所蔵の資/史料、静嘉堂文庫所蔵の抱一著『軽拳館句藻』などに基づいて事績を明らかにし、その土台の上に作品を載せていくという編年体のもので、作品同士の厳密な様式比較や印章・署名の検討などはなされていません。これをもって直ちに美術史の正統的方法ではないと主張する方もいるかもしれませんが、前後の状況を調べていくと、この報告は同年の10月10日から11月4日まで日本美術協会第75回美術品展覧会に併催された、抱一作品の参考品展示に機を合わせた基礎研究といった意味合いをもっていたことがわかります。「年譜稿」の載る『日本美術協会報告』の翌号の第7輯にはその詳細な展示目録が掲載され、内容からして空前規模の展覧会であったことがわかります<sup>(5)</sup>。したがって、その図録が公刊されていたならば、当然ながら作品や署名印章に関する言及もあったに相違なく、さらに図録編と研究編のセットの体裁になっていたのならば、最強の抱一研究になっただろうと想像されます。叶わぬこととはいえ、残念に思われて仕方がありません。

美術史における抱一研究は、実質的に昭和53年(1978)12月に日本経済新聞社より刊行された山根有三氏を主導者とする『琳派絵画全集』の5冊目、抱一派の巻を嚆矢としています。同年の年初に卒業論文を提出していた発表者は、指導教授の辻惟雄先生を初め、諸先生のご配慮を得て同書に最初の論文を発表する機会を与えていただきました<sup>(6)</sup>。以後、美術史における抱一研究は、相見の抱一論の

欠を補うようにして作品の様式的編年への関心を深めていきました。

いっぽう 2000 年代に入ると、抱一が俳諧という文学活動も行っていることから、文事と絵事のバランスを考えようとする立場の論考も現れるようになりました。発表者のまとめた『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』（2004 年）は、美術史の側からその問題に迫ったものでもあります。要するにどのような立場をとるにせよ、相見が「年譜稿」で活用した『軽拳館句藻』の読み方—すなわち、伝記資料か、文学か、それとも江戸の風俗の写し鏡か—に係ってくるように思われます。

相見の抱一論の美点についてまとめてみますと、以下の二点が挙げられると思います。

### ① 膨大な情報収集・調査 input > 論文等による公表 output

公表された論文と「自筆調査録」を詳細に突き合わせると、その誠実な調査力、卓抜な情報収集力に圧倒されるいっぽうで、調査しながらも公表しなかった資料や情報もかなりの量に上っていることに気づきます。たとえば、「自筆調査録」11-2 に記録された昭和 2 年 8 月の酒井家における調査を見ていくと、『逾好日記』、『姫陽秘鑑』、『御宝器明細簿』、『抱一僧任官状』など「年譜稿」に言及されなかった史料がいくつも見出されます。そのうち『姫陽秘鑑』十所収の忠因君、すなわち抱一についての記録には、「以上摘要の御一代と同文」と書かれており、「年譜稿」で活用した酒井家所蔵の『摘古採要』「等覚院殿御一代」と重複を避けて割愛したとみられます。

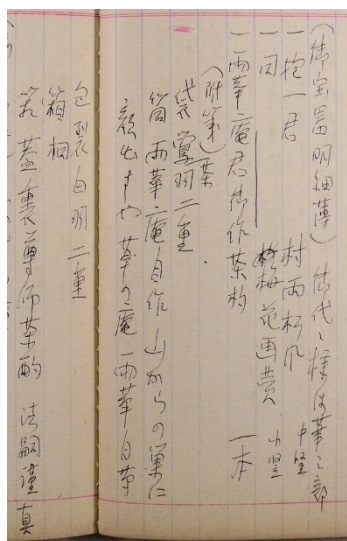


図 7 「自筆調査録」11-2  
『御宝器明細簿』の調査

また『御宝器明細簿』（図 7）は酒井家に伝来した抱一や酒井家の当主らの書画や茶道具などを収録するリストで、これによって現在は細見美術館が所蔵する「松風村雨図」や「墨梅図」なども元は酒井家蔵品であったことが判明します<sup>(7)</sup>。相見はこの史料を参照すれども論考では積極的に引用することはありません

んでした。限られた紙数ゆえに省略したのか、それとも何か別の理由があったのかは不明です。

以上のことから、相見の論考を扱うときは、資料が明記されていないからといって見ていないと短絡的には言えず、注意が必要であることがわかります。正直なところ、発表者はいままで書いてきた著作のなかで何度かその禁を犯したのではないかと冷や汗をかいています。私の想像の範囲を遥かに超えています。民主主義下ではない近代の階級制度下における調査であったこと、松平不昧公を背後に戴く伝統の松江出身者であるとはいえ、爵位を有する上流の所蔵者に対しては公表する際にきめ細かな配慮が求められたろうことなどが予想されます。そのようないくつもの柵が、相見をして含蓄のある慎重な研究者へと成長させていった面もあるのではないのでしょうか。現代とは異なる環境下で進められたからこそ、相見の研究は冷静かつ奥深い知性に彩られており、それに対してリスペクト以外の感情が湧いて来ようはずはありません。

### ② 重要な所蔵者、資料および作品は繰り返し言及し、調査する

相見の抱一論は、特定の所蔵者と信頼関係をつくり、そこからいくつものネットワークを構築することで成り立っています。具体的な例として、以下の所蔵者が挙げられます。

#### ・旧姫路藩主酒井伯爵家

抱一の実家ですが、その兄の酒井忠以が不昧公の友人であったところから、相見も何らかの縁故をもっていた可能性があります。「自筆調査録」11-1~3 によれば、昭和 2 年

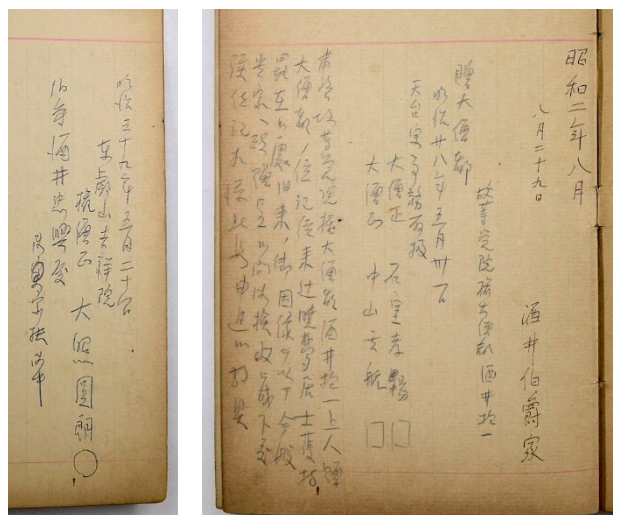


図 8 「自筆調査録」11-3 『抱一僧任官状』調査  
昭和 2 年 8 月 29 日

8月2日に申請し、8月8日から29日にかけての20日あまり『玄武日記』『摘古採要』『六臣譚筆』などの史料、抱一一族の肖像画、作画類などを調査し、最終日に「大僧都」の任官状を写しています(図8)。

ただし「自筆調査録」1-5によれば、実行に移す10年以上前になる大正2年にも「摘古採要十冊 酒井家蔵 松下高徐輯(嘯堂)…」といった書き込みがあり、かなり以前から酒井家史料の調査を視野に入れていたようでもあります。

・静嘉堂文庫

酒井家と並んで相見が重視したのが静嘉堂文庫所蔵の『軽拳館句藻』の調査です。この抱一史料についての言及も明治42年刊の『東洋美術大観』第5冊の抱一の項に「軽拳館句藻(岩崎文庫蔵原本十冊)」とあるのが早い例ですが、前述したように相見がこれを書いた可能性があるのです。「岩崎文庫」とは岩崎家の文庫という意味で、静嘉堂文庫を指すとみてよいでしょう。次いで大正9年の「自筆調査録」5-5にも「静嘉堂文庫(中略)抱一自筆句集稿本十冊」と言及があります。そして、満を持して昭和2年9月25日から10月までのほぼひと月、「自筆調査録」の11-4から12-1までの3冊を使った『軽拳館句藻』の集中調査が開始されます。本稿の最初に掲示した図1もこのときの調査のものです。

世代的に筆写体の解読を得意とする相見であったとはいえ、この史料を読んだことのある研究者ならば誰でも脱帽せざるを得ないスピードです。発表者などは十数年もかけてようやく全体を読了することができました。第二次世界大戦後も、相見は静嘉堂文庫をたびたび訪問し、ときには三古会の一員として絵本類や漢籍などを閲覧しています。

・高輪岩崎邸(開東閣)

岩崎家所蔵の美術品は主に高輪の岩崎邸で調査しています。応対した執事らしき人物の名前も書かれています。「自筆調査録」では、訪問の初出は6-4の大正11年10月8日の史学会大会の際の展覧で、明清画9点と文晁の模本、周文屏風1点を見えています。岩崎邸の後、横浜本牧の原三溪邸に赴いたようです。昭和2年の集中調査では7月と9月の2回訪問しています。相見のやり方としては初回に情報を収集し、2回目に丁寧な調査という流れのようです。

例えば酒井抱一筆「絵手鑑」(現、静嘉堂文庫美術館蔵)の場合、「自筆調査録」11-1によれば、7月26日に伝来情

報を聞き取り、同11-3の9月5日に全72図を丁寧に見えています(図9)。細工の見事さに感嘆したのか、角金具を丁寧に写し、付属の箱書なども細かく記述しています。

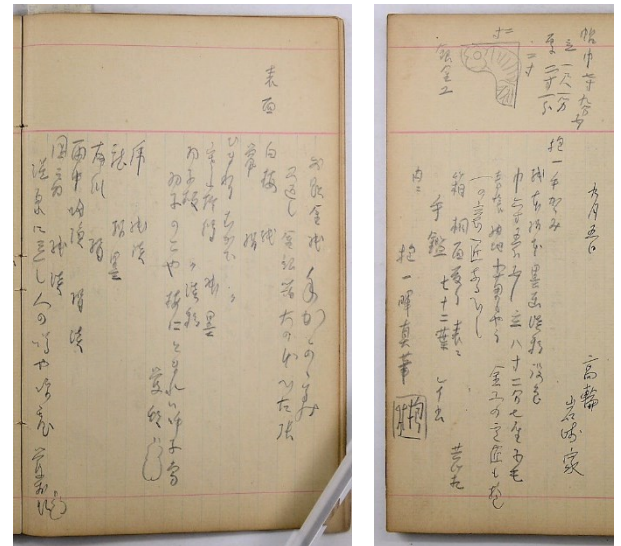


図9「自筆調査録」11-3「絵手鑑」調査 昭和2年9月5日

・酒井靖(抱祝)

雨華庵四世の酒井道一の跡を継いだ五世の酒井抱祝こと靖の下には大量の抱一や雨華庵関係の資料が残されており、「自筆調査録」11-1の昭和2年7月26日から29日にかけて数日通って系図や証書類を写し、克明な聞き取り調査を行っています。「年譜稿」では一々の所蔵者名を明記していないのですが、突き合わせることで酒井靖から提

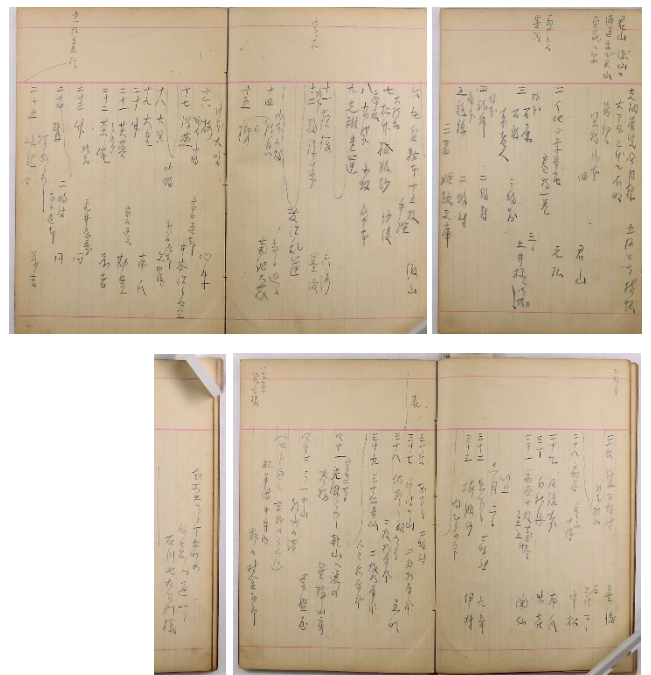


図10「自筆調査録」11-1「光琳遺墨展目録」調査 昭和2年7月29日



供された資料を分散して活用していたことがわかりました。文化12年(1815)の光琳百年忌の際に開催した「光琳遺墨展」の目録も酒井靖からの提供で、相見は生々しい焼痕そのままに写し取っています(図10)

・百花園 佐原氏

向島百花園は抱一と親密だった佐原鞠塙の遺族が関連資料を伝承しており、相見は昭和2年11月10日に訪問

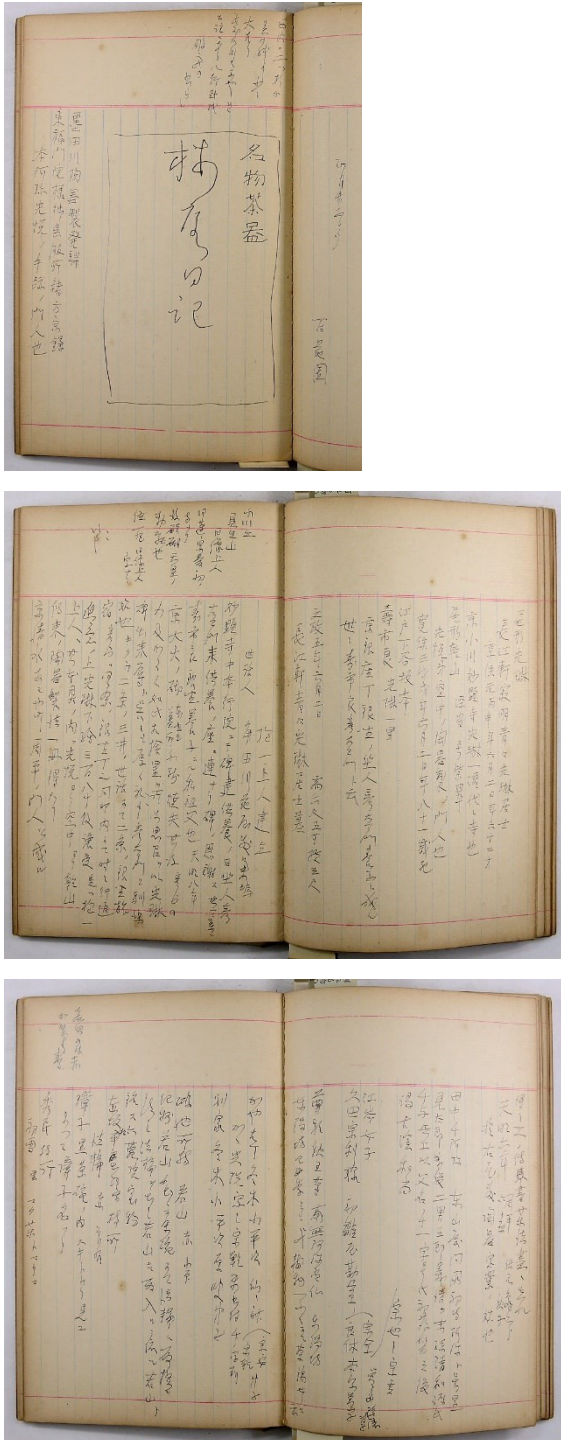


図11 「自筆調査録」12-2 「梅屋日記」の表紙と本文

して抱一から鞠塙に宛てた手紙類などを調査しています。「年譜稿」が刊行された後も百花園訪問は続き、「自筆調査録」12-2の昭和3年正月25日の条に、鞠塙が文政2年(1819)に京都に派遣された際の記録である「梅屋日記」を書写しています。今まで、「梅屋日記」は『日本美術協会報告』第7輯所収の相見執筆「抱一に依て伝へられたる光琳乾山が事ども」によって、断片的な引用箇所でのみ知られた文献でした。発表者は尾形乾山の研究者からたびたび「梅屋日記」について照会を受けてきましたが、写本の状態とはいえ、ここにその全体像が明らかになったのはまことに喜ばしいと言わざるを得ません(図11)。

加えて、これは相見の抱一論だけでなく全般に言えることですが、三番目の美点として繰り返しをいとわず、

③ 史/資料を独占せず、官学派と連携し、研究を補完を挙げたいと思います。相見が交流した官学系の研究者は福井利吉郎、矢代幸雄、田中一松、土居次義ら錚々たる顔ぶれですが、戦後の相見の執筆媒体に新たに『大和文華』が加わったのも、大和文華館の館長である矢代幸雄の肝煎りだったのではないかと推察されます。また「自筆調査録」には、震災による罹災状況調査の過程で『國華』主幹の瀧精一を訪ね、『静嘉堂鑑賞』を見ている記録もあります。今泉雄作、坂崎坦、正木直彦らの名前も挙がります。すでに指摘されていますが、抱一の戯作関係資料を見せてもらったのは林若樹などの好事家でした。古美術商との交流も見られ、「住吉太鼓橋園」などを見た組田氏のほかに、戦後では藪本氏、繭山氏などの名前も挙がります。とくに戦後はその傾向が強まっているように感じられます。

相見の築いた官学系の研究者から在野の研究者、好事家、そして古美術商にいたるまでの幅広い交流網は、俯瞰的に見れば18世紀半ばから19世紀初めにかけて関西や関東の文人たちによって繰り広げられた交流ネットワークにも通ずるものがあります。日本には近世から近代をつないで継承された、個と他者をともに尊重し合う寛容で、水平的な人的交流の系譜がありました。相見の交遊がその系譜上に位置づけられると言ってもけっして過言ではないでしょう。

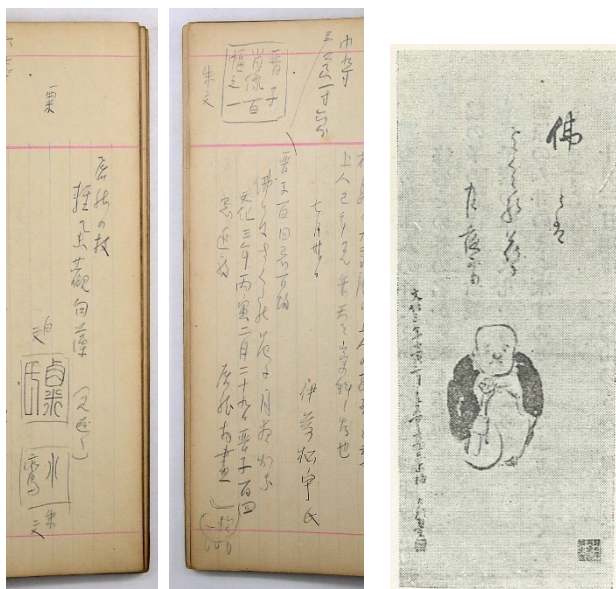
さて以上、相見の抱一論の長所について述べてきましたが、やはり現在の視点から見ると残念な点がないわけではありません。客観性を担保するためにも、以下の2点を挙げておきたいと思います。

① 安永6年9月18、19日条 甥、徳太郎誕生に際して仮養子の身分が取り下げられた事実を見過ごす酒井伯爵邸における『玄武日記』の調査は20日余りという驚異的な速さで行われています。原稿の締め切りが間近に迫っていたからか、あるいはすでに指摘したように、当時のことゆえに時間的、空間的制約があったのかもしれませんが。この事実を確認できる箇所は、抱一の通称の「栄八」の名で出てくるのではなく、文脈で判明するの<sup>(8)</sup>、見落としてしまった可能性が高いと思われます。伝記的に重要な事柄であるとはいえ、調査環境の差異があるのでここでは簡単な指摘に留めておきます。

② 文化12年の作句が含まれる増補本『屠龍之技』の存在に気づかなかったか

従来抱一研究において、この事実は発表者が平成29年(2017)に『國華』誌上に論考を発表するまで、さほど注意されてきませんでした<sup>(9)</sup>。文化12年(1815)は抱一にとって光琳の百年忌を修し、『尾形流略印譜』や『光琳百図』を編纂するなど多忙を極めた時期でした。『軽挙館句藻』にはこの年に当たる1冊が欠落していることもあり、文化12年の作句に関する資料はないと考えられてきました。相見は抱一研究の権威でもありましたので、「年譜稿」において「紛失」と書いたこともそれ以上の詮索を封じる結果になってしまったのかもしれませんが。

発表者は抱一が生前唯一刊行した自撰句集の『屠龍之技』の諸本を調べる過程で、初印本(文化11年序)と増補本



左) 図12「自筆調査録」11-1 伊藤松宇蔵『屠龍之技』「其角像」調査 昭和2年7月30日

右) 図13「抱一上人年譜稿」掲載 伊藤松宇蔵「其角像」

の関係に関心を払ってきました。増補本は国立国会図書館に所蔵され、『日本名著全集 俳文俳句集』(1928年12月)に翻刻掲載されています。現存が確認される初印本には天理図書館綿屋文庫本がありますが、相見の調査した『屠龍之技』は、「自筆調査録」11-1 昭和2年7月30日の条によれば、伊藤松宇の所蔵品でした(図12)。ほかに伊藤の下では句賛の一致から「年譜稿」に図版掲載される「其角像」(図13)なども調査していることが判明します。

俳人の伊藤松宇は古俳書の蒐集家であり、現在行方不明の伊藤松宇本は初印本の代表とされています。『日本名著全集』には菊花の雲母摺をほどこした表紙や小鸞女史による封面、抱一の甥でのちに藩主となる酒井忠実が「六華」の名で記した奥書が紹介されています。したがって、相見は増補本の存在を知らなかったか、あるいは問題視しなかったゆえに増補箇所文化12年の作句が含まれることを看過してしまったのか、そのどちらかだと思われます。

拙稿で考証したように増補本は増補箇所を一見ではわからないように挿入しており、しかも抱一自身が作為的にやったようでもありますので、無理からぬことと考えられます。『日本名著全集』の翻刻が出版されるのは、相見の「年譜稿」刊行の1年後ですから、もしそれが間に合っていれば研究熱心な相見のことですので、何句かをそこから採録した可能性があります。むしろ逆に昭和2年の抱一没後百年忌が翻刻本の出版の背中を押したのかもしれない。そうならば相見の貢献ということになるのかもしれませんが。

後学の発表者らは相見の開拓した道をたどって抱一研究や近世絵画研究に携わり、生意気にもときにその欠を埋め、軌道を修正するなどしてきました。相見が道を拓いてくれたからこそ、結果として私たちはなすべき多くの宿題が与えられ、それを一つずつ解決することで進んできたのだと思います。

さて、今まで相見の近世絵画研究の歩みをたどってその特徴を探り、とくに代表作の抱一論に焦点を当てて、その優れた点や問題点などについて検討してきましたが、そろそろまとめに入っていきたいと思います。

まとめ

『相見香雨集』一から五まで5冊に集成された論文と、明治42年から昭和30年代にいたるまで書き継がれてきた「自筆調査録」全42帙240冊に収録される膨大な量の情報を合わせて相見の業績を振り返るとき、発表者の脳裏には「パブリックレガシー」という言葉が自然に浮かんで



きます。要するに、それを必要とする誰にでも開かれている共有財産といった意味ですが、同じような意味合いでは著作権の切れた芸術や文化財を公共財として見なすパブリックメインといった考え方があります。

発表者はたまたま 1970 年代の後半から酒井抱一研究に従事してきましたので、関連する相見の論文は大体、読み込んでいました。そして幸運にも「自筆調査録」の存在を知ること、今まで読んできた論文の裏付けを取ることができ、またその背景にある史／資料の所蔵者と相見の交流についても多くを学ぶことができました。それは未知の奥深い世界を知ることであり、何にも代えがたい研究の喜びでもありました。このような楽しみを味わった発表者は、相見の業績は開かれたものであり、その恩恵は万人が享受できるものだと思っています。

この度のシンポジウムにパネリストとして参加させていただくことで、相見のバックグラウンドにある松江の歴史や文化を知りました。松平不昧公の偉大な業績は知っていましたが、その有力な家臣の乙部家の中国絵画コレクションには驚嘆させられました。また実家の相見家、その祖父の森脇忠兵衛が出自した森脇家など松江の豪商が培ってきた漢詩や篆刻などの文人文化も知りました。近年、発表者は東京近郊の豪農や商家が江戸以来、受け継いできた文人文化について調査研究を重ねているのですが<sup>(10)</sup>、相見の背景にある富裕な中間層による文人文化と共通するものがあることを実感しています。まさに「近代美術史家の背後には近世の文人文化あり」なのです。

相見の業績はその著作集の編成が示すように、琳派、画譜や南画、近世諸派、南宋・室町の水墨画、そして震災被害の調査報告といった項目で一般に理解されています。その通りなのですが、そこにもう一枚、相見には松江という地域が育ててきた文人としての素養も備わっていたように思われてなりません。戦後の「自筆調査録」から昭和 33 年 (1958) の箇所をめくると、白木屋デパートで開催された尾形光琳の生誕三百年を記念する展覧会についてのメモは僅かで、むしろ併催されていた尾形乾山の展覧会でみた書画や陶磁器の写しのほうが多数書かれていることに気づきます。一つ一つの作品は大きく扱われ、陶器に記された詩文を写す鉛筆の筆致も力強いのです (図 14)。

この頃は論文に関しても乾山に関する話題が多くなってきていることを先に指摘しました。書画陶器ともいふべき乾山の世界に魅かれる相見に、父や祖父から受け継いできた文人的な嗜好を読み取るのはそう難しいことではな

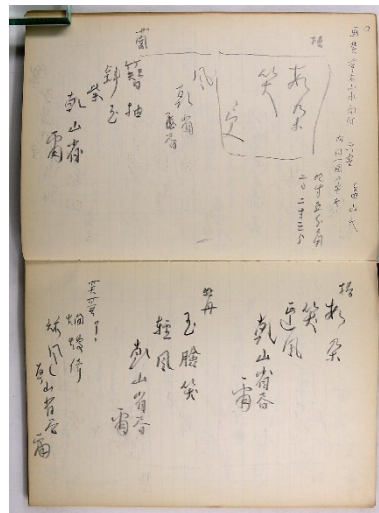


図 14 「自筆調査録」33-5 尾形乾山作「画賛草画山水向付」のメモ

いでしょう<sup>(11)</sup>。

相見は松江で育ち、松江の地方紙に従事したのち、東京に出てから編集者、研究者として目覚ましい業績を打ち立てました。そのような意味からしても相見の遺産は、地域に根差し、地域を超えて万人に開かれているパブリックレガ

シーであると言えるのではないのでしょうか。

相見のレガシーの恩恵はまだまだたくさんあります。最後に二つほど紹介して、発表を終えたいと思います。

一つは本阿弥光悦書依屋宗達画の「蓮下絵和歌巻」の断簡に関する情報です。昭和 9 年 (1934) に開催された浅田家入札を相見は見ている、6 点の断簡を図入りで記録しています。その中には現在、行方不明のものが 1 点含まれていて、今後探索する際の重要な手掛かりになります (図 15)。

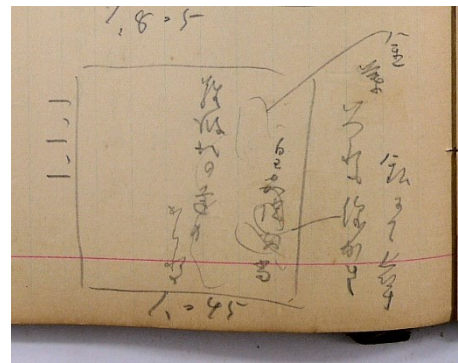


図 15 「自筆調査録」19-2 「蓮下絵和歌巻 難波江の…」断簡のメモ

もう一つは尾形光琳の署名・印章のある「富士・松島図屏風」に関する情報です。『光琳百図』後編に所載される図様とよく似た屏風が鈴木其一の箱書をともなって発見されたのは数年前のことですが<sup>(12)</sup>、この作品を示すと思われる聞き書き情報が「自筆調査録」の 9-1 と 22-5 の 2 回出てきます。伝来に関する事柄が細かに書かれています。アメリカから里帰りし、アーティゾン美術館の「琳派と印象派」展に展示



中のこの「富士・松島図屏風」(図 16)を鑑賞しながら、今さらながら相見の底知れぬ恐ろしさに心打たれているところです。

ご清聴ありがとうございました。



図 16 尾形光琳落款「富士・松島図屏風」  
(図録表記：尾形光琳「富士三壺図屏風」個人蔵)  
賀川恭子・平間理香編『琳派と印象派：東西都市文化が生んだ美術』(石橋財団アーティゾン美術館、2020年11月)より転載

- (1) 中野三敏「香雨集緒言」『日本書誌学大系 45- (1) 相見香雨集一』青裳堂書店、1985年。
- (2) 直近では、「美の競演—静嘉堂の名宝—」(静嘉堂文庫美術館、会期 2020年6月27日～9月22日)において展示されている。
- (3) 多田文夫執筆「源空寺・谷家の墓所」『谷文晁と二人の文一』足立区立郷土博物館、2018年。
- (4) この連携プレーについては以下で最初に指摘した。玉蟲敏子「江戸の古画趣味と日本の美術史学—宗達「平家納経」補修説と牧谿伝根本資料『松斎梅譜』をめぐって」『講座日本美術史 6 美術を支えるもの』木下直之編、東京大学出版会、2005年。
- (5) 整理した展示目録を以下に掲載しているので参照していただきたい。玉蟲敏子『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』(ブリュッケ、2004年)資料1 第75回美術品展覧会参考品目録。
- (6) 本巻は小林忠氏の編集になり、抱一の研究史上重要な基礎論文の河野元昭「抱一の伝記」「抱一の有年紀作品」が収録されている。発表者は拙いながらも、初論文の「抱一画の底辺—抱一芸術成立の土壌について—」を掲載させていただいた。
- (7) 『御宝器明細簿』の詳しい分析は以下を参照のこと。的矢真紀「[翻刻]姫路酒井家宝器明細簿 乾・坤」『姫路美術工芸館紀要』2、姫路市書写の里・美術工芸館、2001年、岡野智子「姫路酒井家の絵画—道具帳にみる酒井抱一とその周辺」『姫路美術

工芸館紀要』4、同 2003年。

(8) 前掲、玉蟲『都市のなかの絵』52～54頁。

(9) 玉蟲敏子「酒井抱一の俳贊をめぐる諸問題 「富士に帆掛舟図」と「正月飾り物図」の紹介をかねて」『國華』1460号、2017年。

(10) 足立区立郷土博物館編『千住の琳派』2011年、『美と知性の宝庫 足立』2016年、『谷文晁と二人の文一』2018年、『大千住 美の系譜 酒井抱一から岡倉天心まで』2018年、くにたち郷土博物館編『本田家と江戸の文人たち』2018年など。

(11) 相見は、昭和37年に紫綬褒章を受章した記念の配り物として、自ら浦上玉堂の「玉堂文房十八友」にヒントを得て、愛蔵する書画、陶器、漆器十点をを選び、『飛鳥山房十友』(私家版)を編んだ。その顔ぶれには、池大雅筆「山芋画賛」、田能村竹田絶筆の書、伊藤若冲画・大典顕常詩書の版画「乗興舟」に加えて、光悦の「伊勢図」、乾山の「色絵龍田川図香合」、光琳の「蒔絵鷺図櫛」などがある。題簽を安田靉彦が寄せている。晩年の相見の文雅な趣味が偲ばれる。相見は若冲の美を発見した先駆者の一人なのである。

(12) 図版初出は以下。

“Waves at Matsushima and Mount Fuji”, Yukio Lippit and T. Ulak eds. *Sotatsu*, pp.250-252, Artur M. Sackler Gallery, Smithsonian Institution, Washington, DC, 2015.

## 質疑応答／ディスカッション

田中則雄：後半の質疑応答、ディスカッションに入ります。三名の報告者の方に、それぞれの角度からお話いただきましたが、その中で、相見香雨という人、あるいはその業績がどのように育まれてきたかというところにスポットが当たってきたと思います。そして特に、相見香雨の郷里であるところの松江、あるいは雲州、その文化的風土というものが非常に大きな意味を持っていたことが、段々と分かってきたように思います。

そこで、「相見香雨にとって松江、あるいは雲州とは」というテーマで、三名の報告者の方にコメントをいただきたいと思います。それでは、報告順にまず村角さん、お願いします。

村角紀子：はい、自分の報告に近づけて言いますと、雲州松平家の存在が非常に大きかったと思われます。まず、スタートの時点で審美書院に出会ったのも、彼らの方からここに来た、ということですね。そして、親藩出身者であるということは相見香雨の人生にとって、例えば日本美術協会に至るまで、旧派の人脈の中で歩いていく中で、やはり何かしらの影響を落としていたと思っています。それがいつまで続いたかは分からないのですが、おそらく関東大震災あたりまでがピークではなかったか、そしてそれは松平家の蔵品が散佚を始める時期とリンクしているのではないかと、という風を感じています。以上です。

田中：ありがとうございます。それでは、要木先生いかがでしょうか。

要木純一：はい、やはり先程も申しましたように、漢詩漢文というものが、明治の初めでも「これは旧時代のものだ」ということで見捨てられつつあった、しかし、松江ではそれがまだまだ教養として生き残っていた、そういう中で育ったということが重要だろうと思います。以上です。

田中：はい、では玉蟲先生、お願いします。

玉蟲敏子：今日は私の知らなかったバックグラウンドを色々教えていただいて、本当に興味深かったです。やっぱ

りまずは不昧公のこと、これは村角さんの仰る通りだと思います。もうひとつは、要木先生の仰った文人文化、漢詩文化というものがさらにその土台になっていたと。これはどっちかというとな昧公等の上流武家ではなくて、中間層が担い手だった印象を持ちましたが、そこから相見のような美術史家が出て来る訳ですね。ですから、「近代美術史家の背景に近世・近代に続く文人文化あり」。それを強く感じたのが、村角さんと要木先生のご発表で興味深いことでした。以上です。

田中：ありがとうございます。ここで少し私の方からご質問します。まず、村角さんにうかがいます。お話の中にあつた通り、松江には伝統的に不昧や乙部家の名宝があつて、それを受け継いできているという訳ですが、私が大変興味深く思ったのは、それを囲い込むのではなくて、展覧会が開かれて、そこに町の人々が集まって、互いにそれを享受していた、ということです。それも文化の一面だという風に思いながら聞いたのですが、そうした点も、相見香雨という人を考える上で重要なのでしょうか。

村角：はい、それは松江の問題というよりは、明治になって「展覧会」というもの、文化装置と言ってしまうと少し下品ですけど(笑)、そういった近代的な形式が入ってきた、時代の要請というようなものがそこにあつたと思います。つまり、江戸時代と同じかたちがそのまま続いて、1874年に相見香雨という人が生まれたとしても、それら(名品)を享受することができたかという、全く違つたと思うんですね。やはりその前に幕藩体制の崩壊というものがあつて、そこに合わせて展覧会というシステムが入ってきた。そういう時代のタイミングだと感じています。ですから、それは「松江の文化」というのとはちょっと違う。しかし、それは相見香雨のような明治の初年に生まれた人達にとって、大変幸運な出来事だつたのではないかと、と思います。

田中：ありがとうございます。松江に不昧や乙部家の名品が受け継がれていたということがあつて、そこに、いわば幸運な出会いとして、そういうシステムがあつたということですかね。そこに相見香雨の誕生というところへのひと

つの線が出来てきた。そんな理解でよろしいですか？

村角：はい、そのように私は考えています。

田中：ありがとうございます。では、要木先生にお訊ねします。漢詩の文化というものが近世以来、明治に入ってもずっと続いていた、特に松江ではそれが顕著であった、というお話がありました。例えば、旧家の資料などを調査していると、個人が作った漢詩集があって、それを贈答し合っているような気配がするのです。色んな人から漢詩集をもらっていて、それが積み重なっている、ということがあります。そういった、漢詩を通じた人と人とのつながり、文化的な人のネットワーク、というのが非常に盛んだったと考えていいのでしょうか。

要木：はい、私は答えられるほどの研究はしていませんけども（笑）、この教養のある文化人の中に自分も入る、ということは重要なことだったと思います。漢詩を知っていて、共に話が出来るような交遊関係ですね。これは松江の中だけではなくて、ネットワークが全国にあって、色々な情報もそのネットワークから手に入る、というような状況はあったように思います。

田中：ありがとうございます。では、玉蟲先生にご質問します。相見香雨の著作については、先生からご説明がありました通り、一方で事実に基づいて丹念に調査し、そこから組み立てられており、それが特徴であり、またそこに価値があると。そのところは私のような文学で文献を扱うような者からすると、共鳴する、ある意味、分かるなぁと実感するところですが、そこと、美術の作品、表現のあり方を、相見は同じ論文の中できちんと論じているように思うのです。そういう、下からきちんと積み上げていくところと、作品そのものを論じているところ、それがつながるという考え方を持っていたように、相見の論文を読んで感じているところですが、そういった理解でよろしいですか。

玉蟲：要するに、相見の非常に手堅い方法ですね。相見は寡黙な部分もあって、思いつきの印象批評というのをあまりしない、という感じがします。やっぱり厳しいところがあります。そして、美術史でいわゆる様式論が主流になるのは1930年代以降ですね。日本美術史にも適用されて、発展するのですが、そこに関しては、相見はついていけな

かったかなという感じがします。しかし、真贋に関しては非常に厳しいし、手堅い。論文の中ではあまり見せないそういったところを、私などからすると、もう少し上手にディスクリプションしていただいてもいいのに（笑）、などと思うようなところもございます。ただし、「自筆調査録」を見ていくと、結構、「絢爛たる色彩也」などと印象批評を書いているのですよね。ですから、調査している時は素直に感想を書いているけれど、公表する時には自分で調整している。アウトプットとインプットが違うので、アウトプットされたものだけで相見を捉えるのは、ちょっと違うかな、と思います。そんなところです。

田中：ありがとうございます、文学の研究とかなり重なることがあるように思っています。文学の方でも、作家の伝記研究というのをやります。事細かに墓碑を調べたりして、そこで人物の事跡が分かってくる。そこから、残した作品がどうか、ということとどうつなげていくか、いつも悩むところです。一方で、作品自体がどうだという話は、研究者同士で研究会では話すのですが、こう感じるとかこう捉えるとかいうことは、実際に論文にしていくには、越えなければいけないハードルがある。先生のお話を聞いていて、非常に共鳴しました。相見にもそういう文学とつながる部分があるのかな、と。いわば学問における普遍的なところ、それが相見香雨の中に見出せるように思いました。

それでは、ZOOMでご参加の皆さんにはチャットの方にご質問いただくようお願いしておりますが、林先生、今どんな状況でしょうか。

林：はい、質問はまだ出ておりませんので、ぜひ、挙手機能やチャット機能を使っていただいで、ここからは自由なディスカッションにしていきたいと思っています。

田中：では、お考えいただいている間に、また報告者の方々に振ります。今日、相互に発表を聞いていただいたのですが、それを踏まえて、どのようなことをお感じになったか、一言ずつコメントを頂戴したいと思います。また村角さんからよろしいですか？

村角：はい、要木先生の発表からですが、私はもともと漢文には詳しくなく、相見香雨の漢詩や印譜を見ている中で色々分からないことがあったんですが、その中のいくつか、



まず、相見淞雨の印譜を編纂した中村鷲山という人。この人は誰だろう、と思いつつ流していたんですが、要木先生のレジュメで（中村の経歴紹介の）文章を引用いただきまして、納得もしましたし、目から鱗だったところです。また、剪淞吟社について書かれた本を読んでいますと、必ず「松田淞雨」という名前が才気煥発な人として出てきて、この人と相見淞雨の「号かぶってる問題」というのがずっと気になっていたんですが（笑）、これも要木先生の紹介で、世代交代と言いますか、後から出てきた若い世代の松田淞雨が、旧世代の相見淞雨に対して、このような（失礼な）態度をとっていた、というのが色々分かり、こちらも大変面白く感じたところです。

玉蟲先生のご発表ですが、やはりいくつか、なるほどと思ったところがありました。相見の出発点がジャーナリストだったというところ、頭では分かっているつもりでしたが分かっておりませんで、そこを「取材が全ての研究のスタートだった」とご指摘いただいたことで、なるほど、相見にとって7年間の新聞編集者生活は、やはり何かしら大きな影響を持っていたんだ、と納得しました。以上です。

田中：ありがとうございました。それでは、要木先生、お願いします。

要木：はい、今日はもうとにかく教えてもらうことばかりで、自分の至らなさに恥じ入るばかりです（笑）。私も相見淞雨の漢詩を訳したりしてしまっていて、お父さんと息子ということで相見香雨のことも調べてはいたんですが、漢詩でも作ってないかなとか、若い頃の思い出をもうちょっと書いてくれたら材料になるのにとか、探してみてもなかなか見つかりません。村角さんは先祖にまでさかのぼって探していただいた訳ですが、相見香雨自身の少年時代については、やはり分からない。ですけれども、こういう中で育った、ということはいく分かっていたと思います。

玉蟲先生の方ですが、先程紹介した、絵に対する関心が松江の文人たちにあっただろう、ということはこの発表のために探したんですが、それが後の相見香雨にどうやってつながっていくか。きっちり漢文が読める人間ではあった訳ですね、もちろん、印もお父さんのお陰でバンバン読めると。ですから、ちゃんと文献を大事にして、印象批評に流れない研究を続けたところには、この松江で育った少年時代があったのかな、と思いました。以上感想です、どうもすみません。

田中：ありがとうございます、では、玉蟲先生、お願いします。

玉蟲：はい、先程もちょっと申し上げたのですけれども、村角さん、要木先生のご発表で、松江という場所について深く教えていただきました。松平不昧という茶道史上のビッグネームと相見香雨がなかなか結び付かなかったのですが、先程ピラミッドの図を出していただいて、それぞれの位置の関係がわかって腑に落ちました。それから、あれだけ文人文化が盛んであるということ、清朝の詩人たちが来ればそれを受け皿にして詩の会が増えて、出版物も増えるという、その文人交流ですね。そこはやはり近代ならではの海を越えた交流が見られるので、そこがとっても面白かったです。あれだけ財界の人たちに名宝を色々見せてもらえたのも、松江という土台があったからで、相見は常に臆することなくそういう名家の方たちの中に入って行けたのだらうと思います。バックに不昧の幻影が存在しているような感じですね（笑）。

それから、資料を惜しみなく碩学たちに渡して、お返し知見をまたもらってという学問上の交流。それ自体が本当に、相見が実践していた文人ネットワークですね。それは、土台に父や祖父の世代がやっていた文人たちの横のつながりがあって、相見はそれを血肉化して研究者同士の仲でやっている。だから、官学や在野もあちらの先生もこちらの先生も皆平等に同一の平面にいて、自分もその間に入って、存在感バッチリ（笑）、という本当の在野。相見はそういう役割を持っていたのだと思いました。以上です。

林：ではここで、ZOOMの方でお三方から質問をいただいておりますので、読み上げさせていただきます。

多田文夫（チャット）：すてきなシンポジウムありがとうございます。玉蟲先生に質問です。関東大震災の直後からの震災記録は現在の文化財レスキュー（東日本大震災）のはるか昔のことなのに、恐るべき調査だと思いました。しかも直後じゃないとわからないものを集めています。いまの災害時代に学ぶべきことが多いと思います。ちなみに空襲被災美術品の調査とかあるのでしょうか？

玉蟲：本当にその通りですよ。関東大震災は、相見香雨もあまして震災直後からがんばって、半年後でも源空寺などは本当に生々しい感じですから、びっくりです。翻って

戦災記録ですが、戦災記録をそこまで文化財に特定してやった人ってどうなのでしょう、いるのでしょうか？ 3月10日の東京大空襲で言えば、やっと今、庶民目線の被害が分かっているところではないでしょうか。私事になりますが、私の母はそのひと月後の城北大空襲の罹災者なのですが、やっと今、母から豊島区の被害状況を聞き書きしているような状態です。人間の被害の全貌もまだまだ分かっていないくらいですから、とても文化財までは…。文化庁あたりに何か報告書が残っているのか調べていくと、手掛かりが見つかるかもしれません。そんなところです。

多田 (チャット)：ありがとうございました。感想&御礼です。調査に用いる「交流スキル」が松江で生まれたと感じました。「藩」「松江の町衆文化」「ネットワーク」、魅力的な背景を知ることができました。先生方、事務局の皆様、ありがとうございました。

林：ご質問ありがとうございました。そうしましたら、次の質問を読み上げさせていただきます。

鶴岡明美 (チャット)：大変興味深く拝聴いたしました。ありがとうございます。村角さんに質問ですが、相見の驚異的な取材力の背景として、新聞編集者としての仕事があるかと思いますが、その様子が分かる資料はございますでしょうか？

村角：その答えにあたる内容をさっき喋ってしまったかもしれないんですが、玉蟲先生のご発表にあった「まず取材が基本にあった」というところを思い浮かべると、相見香雨が最初にジャーナリストとして社会に出たことは大きな意味を持っていたと思います。ただ、その資料があるかどうかという、実は『松陽新報』のバックナンバーを探してみたこともあるんですが、当時は記名記事がありませんし、美術記事もほぼないという状況で(笑)、新聞の方からその背景を探るということは、なかなか難しいと思っています。むしろ、驚異的な調査力ということで言えば、九州大学にある相見香雨の「自筆調査録」、こちらが審美書院に入って明治42年から記載を始めて、やめたのが92歳くらい、約60年間で240冊が残っていますから、その存在の方が、調査力なり、記録魔である相見の特徴をよく表しているかと思っています。答えになりましたでしょうか。

鶴岡 (チャット)：ありがとうございました。

林：続きまして、井田太郎様からのご質問です。

井田太郎 (チャット)：興味深く拝聴しました。巷間、緑の印肉で「香雨秘笈」など蔵書印をおした相見旧蔵本があります。『国書総目録』にも相見香雨と所蔵がでてくるのですが、これの元になった蔵書目録はありますか？

村角：蔵書目録は、本人は作っていないようですが、九州大学の方で中野三敏先生が仲介役となって相見の旧蔵書を受け入れた時に、図書館で目録が作られています。これは確か九大図書館のホームページにPDFが掲載されています。ただ問題は、そちらに行く前に無くなってしまったものもかなりあるようなので、相見の旧蔵書の一部、と考えていただければいいかと思います。「香雨秘笈」という緑の印は、中野先生も紹介されていますが、その印がある本がもしお手元があれば、貴重なものですから、いつか見せて下さい(笑)。以上です。

井田 (チャット)：ひょっとしたら、国文学研究資料館の『国書総目録』に付随した資料群中(岩波書店にあったものが移管されています)に旧蔵本のリストがあるかもしれません。

林：追加コメントをありがとうございました。

そうしましたら、チャットの方にいただいたご質問は全て読み上げさせていただきましたが、まだ時間があります。実は先程とりまとめの時間に、発表者から参加者の方へ逆にお話を振ってみたいという希望がありましたので、その時間にしたいと思います。では、玉蟲先生の方から。

玉蟲：それでは逆指名で(笑)。今日、篆刻の話が出ていましたので、美術史で篆刻について精力的に調べていらっしゃる大阪国際大学の村田隆志さん、いらっしゃいましたら、要木先生や村角さんのご発表について、コメントやご意見を伺えればと思います。

村田隆志：村田です。大変興味深いシンポジウムで、本当に松江の文化度というのに驚いて拝聴していました。篆刻というのは技術的にかなり特殊というか、なかなか独学が難しい訳ですね、印刀の使い方とかも難しいので。僅かに

江戸時代に入ってきたものが段々と広がっていくようなものですが、詩・書・画・印の四絶のうち、印まで熟達することは極めて難しい。なのに当時の松江でこれだけ篆刻が取り組まれていて、相見香雨がそういう素養があるところに育ったというのは、大変興味深く思いました。

それから、要木先生がご紹介された、田能村直入の漢詩の問題点を指摘して反省させるような人がいるという(笑)、松江の文化度というものに本当に驚いたシンポジウムで、どうして相見香雨のような人が出てくるかというのがよく分かりました。大変勉強させていただきました、ありがとうございました。

要木：どうもありがとうございます。田能村直入の漢詩も紹介しましたが、まあ確かに色々問題があるなど(笑)。田能村直入は漢詩もできると示したかったようですが、「まだまだ」という人もいた。(このエピソードが)事実という証拠はありませんが、そういう向きもあつただろうと。滅多に来ない有名な人物が来たことで波紋を起し、フェイクニュースかもしれませんが、そういうものを作るような闊達な文化人たちがいたんだという、そういう例として出しました。

村田：田能村直入がこの時出雲に行っていたのは、京都府画学校を作るための資金集めのためでしたが、たたら製鉄の田部家に行くという約束をしていたにも関わらず、奥出雲の三大鉄師、田部・絲原・櫻井家のうちの櫻井家の方に先に行って長期滞在することになった。それで田部家の方では非常に感情を損ねたというのが話題になったようです。当時の文献で目にしたと思うのですが、京都の方でもそれが話題になったということでしたので、おそらく出雲の方ではもっと話題になっていたと思います(笑)。もともとそういうこともあって、直入にお灸を据えてやろうというのもあったかもしれないな、と拝聴しました。

要木：直入は松江にいくつか絵が残っていて、絲原記念館にも、さっき出した鬼の舌震の下図なんかもあるそうなんです、行かなければいけないと思いつつ、ちょっとまだ見ておりません。

林：ありがとうございました。では、田中先生、会場の方はいかがですか。

田中：会場からの質問票は出ておりませんので、もう少しこのかたちで続けましょうか。村角さん、いかがですか？

村角：それではこの場をお借りしまして、塚本麿充先生の方から、乙部家の中国絵画コレクションについてご意見をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

塚本麿充：すみません、塚本です。驚くべき乙部家のコレクションと言いますか、それを紹介いただいて。私も、直入は出雲ですごいちやほやされているんだと思いましたので、大変驚きました。

それで、乙部家のコレクションは、萩の菊屋さんのところにドカッとありまして、地元に残ったものと残らなかったものというのが、どうして変化していくのか、というのが気になりました。村角さんにお伺いしたいのは、彼は文化財というのを地元に残していこうというような、特にこの時代だと美術館みたいな概念ができ始めてくると思うんですが、彼の人生の中に、研究以外の、そういう文化財や美術館みたいなアイデアはあったんでしょうか。

村角：すみません、「彼の人生」と言うのは、乙部の人生ということでよいでしょうか、それとも相見の人生？

塚本：乙部家と、それと相見の人生というか、密接に関わる島根の知識人というか。

村角：はい、乙部家につきましては、九郎兵衛という名前は名跡で、初代からずっと九郎兵衛なんです、今見ている範囲では、唐絵のコレクションをしたのは主に十代の可時だったと考えています。これは最後の家老でした。明治維新を迎え、可時が隠居して十一代になったところで、いわゆる秩禄処分というものがあって、4250石あった家禄が明治3年10月に一括で32石に減らされるということがあり、コレクションを維持できたのはこの代まで、ということ間違いないと思います。それで先程お示したように、よいものは井上馨に渡ったり宮内省御物になったりと、ランクの上の方のものは中央へ出ていく。中くらいのものは地方の、それこそ菊屋家の方に10点くらい行っている、というような状況が見えております。ですから、「地元に残そう」というような意思是、それほどなかったであろうという印象を持っています。

もともと、なぜ乙部家にあれだけの宋元画が入ってきた



かと言いますと、やはり同家には江戸・東京の骨董商が入っておりまして、今名前が分かっているのは「本屋平蔵」という、不味に出入りしていた本屋了我・了芸の家の三代目からの手紙が残っています。また、木挽町狩野家の資料なんかも残っておりまして、おそらく、鑑定などをそちらで受けていた関係での資料だと思います。そういったかたちで松江にやってきたものは、やはり同じような道具商の手を経て、東京あるいは大阪・京都といった大きな都市に出て行った。そういう傾向があったのではないかと考えています。ですから実は、明治 24 年の展覧会の時点で松江に残っていた乙部家旧蔵品というのは、中以下のランクのものだったのではないかと考えられます。答えになったか分かりませんが、いかがでしょうか。

塚本：大変大切なことを教えていただきまして、ありがとうございました。また、研究の発表を期待しております。

田中：どうもありがとうございました。そろそろ終了の時刻が近付いてまいりました。後半のディスカッションでは、「相見香雨にとって松江、雲州とは」ということを中心にしてお話をしてまいりました。要木先生のご報告に出てきました平賀静遠の言葉「胸に書巻無くして浪りに墨を弄ぶなかれ」、教養をきちんと備えた上で物事を論じるべきだと。そういうことが普通に語られていた時代に松江で生まれ育った相見香雨という人物に、また業績に、あらためて思いをやりたいと感じたディスカッションでした。

(本報告書刊行に関する告知あり、省略)

井手誠之輔 (チャット)：所蔵先の九大から、ひと言よろしいでしょうか。

田中：今回は九州大学より多大な協力をいただきました。九州大学の井手先生からコメントをいただけるということですので、よろしく願います。

井手：九州大学の井手です。島根県松江の大切な資料を九州大学が預かりしているような状況が続いている訳ですが、主体的に詳しく分析し、研究のお手本となるようなシンポジウムでした。大学の方でも、今後も大切に保管しつつ、皆さんに開かれたかたちで研究が進んでいくよう協力したいと思ったところです。

この資料は、中野三敏先生が 1984 年に遺族から寄贈を受けられて、ちょうど私が助手をしていた頃、菊竹淳一先生の下で最初の分類をお手伝いいたしました。以来、気がつくともう 36 年経った訳です。4 年前、島根大学で最初の展覧会をされ、今回はこうしてお三方が発表され、特に玉蟲先生は、自筆ノートの中のインプットとアウトプットを比較しながら、当時の美術史研究の時代相の中で解釈されていくという、非常にお手本のような研究の進め方でご発表をいただきました。

30 数年も経って、今この資料が脚光を浴びているということは、島根の文化度の高さを示すことになりませんが、一方で、私たち美術史学の世界の 1990 年代以降の、ヒストリオグラフィーを中心にもう一度考え直そうという、つまり従来の一元的なものの見方への反省が、こういうかたちで着実に一人一人の研究者をテーマにしながら、今進められているのだと思います。特にその試みが官学派ではなくて、相見香雨という在野の巨人みたいな人に焦点が当てられている。これは単に学史だけの問題ではなくて、メディアとか、その時代相の中での美術の受容全般の問題とも連動していきますので、本当はもっと意見を言いたい方がいらっしやるんじゃないかと思っていますが(笑)。九大としては、ただただ今日は本当にありがたい企画でした。

『相見香雨集』ですが、確かに中野先生が資料の受け入れと出版の窓口になれましたが、実質は菊竹先生のお仕事でもあったと思っています。菊竹先生はコンピューターをお使いにならないので、今日の事を、私の方から責任を持ってお伝えしたいと思います。どうもありがとうございました。今後とも私たちも、こういう新しい研究が開かれていくことを歓迎していきたいと思います。重ねて御礼申し上げます。

田中：どうもありがとうございました。本日は、相見香雨の業績の意義、その足跡をたどることの意味、あるいはそこに立ち返ることの現代における意味といったことを考えることができたと思います。今後、「自筆調査録」の解説をはじめ、研究がさらに進みますと、相見香雨の事跡とその意義についてもっと分かってくるものと思います。あらためまして、三名の報告者の皆さん、ありがとうございました。これもちまして閉会したいと思います。皆様には、最後までご清聴いただきまして、ありがとうございました。

(敬称略)

## 参考文献

- ・ 相見香雨 1958「新木佐家代々の思出」木佐長久・木佐紀久編刊『木佐和久遺稿集 徳昭々雅歴代』
- ・ 相見はま編 1971『相見香雨の一周忌に』私家版
- ・ 相見繁一著、中野三敏・菊竹淳一編 1985-1998『相見香雨集』全5巻、青裳堂書店
- ・ 雨森薫編 1932『雨森精翁五十年録事』雨森家
- ・ 板倉聖哲 1998「伝毛益筆蜀葵遊猫図・萱草遊狗図をめぐる諸問題」『大和文華』100号
- ・ 板倉聖哲 2008「芙蓉図 古典としての南宋院体画」、正木美術館編『水墨画・墨蹟の魅力』吉川弘文館
- ・ 板倉聖哲 2015「紅白芙蓉図 李迪」『日本美術全集』第6巻、小学館
- ・ 稲塚和右衛門 1936『復刻木実方秘伝書 雲藩櫛樹植林製蠟手記』アチックミュージアム
- ・ 入谷仙介・大原俊二 2004『山陰の近代漢詩』山陰の近代漢詩刊行会
- ・ 上野富太郎・野津静一郎編 1941『松江市誌』松江市
- ・ 宮内庁三の丸尚蔵館編刊 2003『雅・美・巧 所蔵名品三〇〇選』
- ・ 桑原羊次郎・相見香雨研究会編刊 2016「松江が生んだ美術史家・相見香雨～九州大学文学部所蔵「自筆調査録」展実施報告書」
- ・ 桑原羊次郎・相見香雨研究会 2018『郷土のエンサイクロペディア 桑原羊次郎』松江市歴史まちづくり部史料編纂課（松江市ふるさと文庫21）
- ・ 小林准士 2014『松江城下の町人と能楽』今井印刷株式会社
- ・ 小林准士校訂 2016『御雛日記』野上記念法政大学能楽研究所
- ・ 山陰中央新報社社史編纂委員会編 2003『山陰中央新報二十年史』山陰中央新報社
- ・ 山陰中央新報社（森みずき）2020「相見香雨の功績知って 没後50年企画 研究者が計画」『山陰中央新報』2020年11月18日記事
- ・ 島根県立図書館郷土資料編 2004-2006『松江藩列士録』全6巻、島根県立図書館
- ・ 白崎秀雄編 1975『雲州蔵帳図鑑』上下、別冊（解説・資料）、歴史図書社
- ・ 高橋義雄著、大濱徹也・熊倉功夫・筒井紘一校訂 1989『萬象録 高橋幕庵日記』第6巻（大正7年5月22～29日）、思文閣出版
- ・ 多治比都夫ほか編 1983『廣瀬旭荘全集』日記篇五、思文閣出版
- ・ 玉蟲敏子 2004『都市のなかの絵 酒井抱一の絵事とその遺響』ブリュッケ
- ・ 塚本磨光 2016『北宋絵画史の成立』中央公論美術出版
- ・ 東京美術倶楽部 1917『第二回赤星家所蔵品入札』（大正6年10月8日入札）
- ・ 東京美術倶楽部 1925『井上侯爵家御所蔵品入札』（大正14年10月9日入札）
- ・ 那須寛正編刊 2014『出雲・隠岐両国古札図録』
- ・ 平田市誌編さん委員会編 1969『平田市誌』平田市教育委員会
- ・ 広瀬旭荘著、卜部忠治・今岡堅一訳 1999『百四十五年前のわが町わが村—広瀬旭荘の山陰紀行—』出雲市教育委員会
- ・ 福岡孝弟編 1902『水萍処鑑蔵目録』厚信舎
- ・ 藤田伸也解説 1999「伝毛益筆 萱草遊狗・蜀葵遊猫図軸」『世界美術大全集』東洋編第7巻、小学館
- ・ 正木直彦 1965『十三松堂日記』第1巻、中央公論美術出版
- ・ 松江市教育委員会文化財課編 2010『乙部家等古文書史料調査目録—平成19年度～平成21年度—』松江市教育委員会
- ・ 三井記念美術館・島根県立美術館・NHKプロモーション編 2018『没後200年 大名茶人・松平不味』（附・富田淳監修、藤間寛編『御茶器帳（雲州蔵帳）』）NHKプロモーション
- ・ 宮崎法子 2018『花鳥・山水画を読み解く—中国絵画の意味』ちくま学芸文庫
- ・ 宮武慶之 2019「江戸の道具商・本惣—了我、了芸の活動に注目して」『日本研究』59号
- ・ 村角紀子 1999「審美書院の美術全集にみる「日本美術史」の形成」『近代画説』8号
- ・ 村角紀子 2020「相見香雨のルーツ 松江の地域文化」『山陰中央新報』2020年11月24日文化欄寄稿
- ・ 村角紀子 2021「松江藩家老・乙部九郎兵衛の中国絵画コレクションと相見香雨—乙部家「御道具帳」と本屋平蔵「覚」—」『松江歴史叢書』14号
- ・ 村山句吾編 1912『世外庵鑑賞』国華社
- ・ 森山時雄 1985『一老美術史学者 相見香雨の回想』私家版（新版1996）
- ・ 安井泉著、安井淳之助編 1933『溟齋詩存』
- ・ 山内長三編 1967「相見香雨翁回想録（その一）（その二）」『古美術』18・20号
- ・ 要木純一 2015『明治の松江と漢詩—明治初期の出雲漢詩壇』今井印刷株式会社

相見香雨没後五〇年記念シンポジウム関連展示 実施報告書  
Aimi Kōu 1874–1970, A Retrospective Exhibition and Symposium

編集：桑原羊次郎・相見香雨研究会

発行：桑原羊次郎・相見香雨研究会

（事務局）〒693-0064 島根県出雲市里方町 973-1

kuwabara.aimi@gmail.com

令和3年（2021）3月31日発行